

時子は黙然してゐる廣井の顔をぢつと見てゐたが、五分十分とたつうちに、次第に嚴肅な敬虔な氣色が面に現はれて来て、はてはどんなに地震が揺らうと鳴神がはためかうと、天體が燃え毀れ、地質が焼け錆けようと、ビクともしない聖者のやうに見えて来た。時子はこれまでこれほど眞剣な眞面目な人の態度を見た事が無かつたので、思はず首を垂れてしまつた。

……此の輩は水無き井なり、狂風に逐るゝ雲なり、黒き闇かれらの爲にかぎりなくのこれり、そは彼らは誇りたる虚しき言葉を語り肉慾と淫亂を以て、彼の迷へる者の中より、辛うじて脱れたる者を誘へばなり……

時子は心の中で此の聖句を幾度も幾度も繰返して讀んだ。聽て二十分も経つたと思ふ頃廣井は靜かに眼を開いて、『時子さん！』と呼びかけた。

『はいッ、』と時子は極めて素直に答へた。

『時子さん、赦して下さい、僕は今の今まであなたを欺いてゐました。五年前あなたに心の一部を捧げたと言ひましたが、實は其頃僕は三人五人の婦人に愛情らしいものを捧げてゐたので

した。僕は實に輕薄でした。卑劣でした。あなたに偶然お目にかゝつた今晚、私は本當に陋劣な心であなたに對してあなたを侮辱してゐました。あなたが浴室に行かれた時僕はすんでの事でああなたの後を追つて浴室へ行く所でした、私の手はあの浴衣を攫んでゐたのです。私は心の中で淺ましい慾情の焰を燃やしながら、それをあなたに隠してゐました。僕には清い／＼愛の油を……ナルドの香油を頭に注がれる資格の無いものです。面目次第も無い……』と心から慚愧に堪へないやうにぢつと考へ込んだ廣井は、

『だが、時子さん、』とやゝ暫く時子の俯向いた前髪を見詰めて、『自分の輕薄を棚に上げて他人を推はかるのは失禮な話だが、時子さん、あなたも清い愛だの處女の心だのと先刻からノベツに仰しやつてゐましたが、あれは本當に心の隅々までも見給ふ神の前に疚しく無いお言葉でしたか。自分の卑しい心からあなたを疑ふのは、ます／＼自分の輕薄を現はすやうなものが、……早い話が今日あなたは僕と出會はなかつたなら、あなたの心のどこにも、僕といふ貧乏牧師の影もかけらも現はれ無かつたのぢやありませんか。僕は今日偶然お目に掛つて、實際は……今まで全く忘れてゐた五年前の輕薄なラヴを、恰も眞心の愛のやうに誇張してあなたに

訴へてみたのです……自分で空想を歌つて自分の肉情を満足させてゐたのです。實に卑劣極る事だと今眼が覺めました。時子さん、あなたも本當に神の前に……神の前に……」

廣井の面には一句毎に熱誠が現はれて來た。

(198)

時子は廣井の言葉にヒシ／＼と身を責められたらしく、

「廣井さん能く仰しやつて下さいました。私、全く今日まであなたの事なんか忘れてゐました。けれども廣井さん、私が清い心の憧憬を満足させる戀が出来ると思つてゐるのは偽でも何でも無いのです。私、本當に清い戀に、全く肉を離れた戀に惚れてゐるんです。」

「人間にもしそれが出来るなら、宗教も道徳もいりません。それは迷信です。さういふ偶像を投捨てゝしまはねば眞の幸福を得る事は出来ません。」

「だつて私は此の惚れに生きてゐるので、」と時子は遺棄無さうに、「これが無くなつたら、私は死んでしまひます。」

「再婚なさい！」と廣井は宣告するやうに言つて、「信仰に生きて、異性の愛に超越する獨身

生活が送れないやうなら、潔く再婚なさい。清い愛だの處女の心だのと言つてゐる中には、其の白く塗つた墓が滅茶々に碎けて世間のいゝ物笑ひになりますよ。」

「物笑ひに？ 私、笑はれてもいゝワ。世間の人なんて……」

「そんな事を言つてゐるうちに、あなたは取返し付かない墮落の淵に陥ちて、僕のやうな弱蟲にさへも（此のバイタ奴！）と足蹴にせられるやうな、悲惨な羽目に落込んでしまひます。」

それが僕の目には見え透いてゐます。世間には丁度あなたのやうな態度で、男の感情をおもひやにして自分の感情をも粗末に扱つて、醜い屍を焼かず埋めず野に捨て、瘡犬の腹を肥すものが珍らしくありません。あなたを其の一人だと斷言するのでは無いが、あなたの今の態度を改めないなら、かういふ運命があなたを待つてゐないとも限りません。時子さん、よく落着いて、冷靜に御自身の本當の心を見詰めてゐらっしゃい。五年振で珍らしく逢つたあなたに、こんな事を申上げるのは、あなたを忠告したのでも何でもありません。僕自らが心に愧ぢる所があるからです。」

言ひ終つて、立ち上つた廣井は外套と帽子とを抱えて廊下に出た。

(199)

『廣井さん、』と時子は追従つて、『永久に今晚を記念いたしませう。』

二人は強く手を握つた。

『では、さよなら！』

一言云ひ切ると同時に廣井は後をも見ず階段の方へサツサと歩いて行つた。

堅爾様、

お久し振でございます。御別れしてから一度も御尋ねしなかつた私が、不意におたより申上げるはさぞ氣紛れと思召しませうが、あれから後の私の心の革命、飼禽の林に歸つたやうな境遇の變化は、私を一番よく知つてゐて下さるあなたに申し上げずにはゐられなくなりました。

あの頃の私は野に山に所定めず吹暴れてゐる嵐のやうでした。女だてらに何といふ恥かしい事でせう。

枝から枝に木の間を飛び交ふ小鳥が、花から花に歌ひありくやうに、どこといふ目あても無く浮れ心に飛び歩いてゐました私は、變らぬ囁きを繰返しつゝ初戀の巢に歸る事を今更がら美しい事だと思つてゐます。そしてそんな純でうぶな心を慕はしく思ふにつけ戀順禮の笈摺の摺切れた我身を悲しまずには居られません。

お別れしてから、私は大阪、伊勢、名古屋、東京と所定めぬ浮草のやうに、あちらこちらに漂うた末今は此の山里で靜かに讀書に耽つて居ますが、涙脆い女の何かにつけて憶ひ出されるは幼かりし昔の事です。

堅爾様、

もう十五年になりますのネ。權現山のあの石段の所であなたが父さん、私が母アさん、何にも知らずに椎の實を拾つてまゝごとをした時の楽しさ。あの頃の無邪氣な美しさに較べて其後の私の偽り多い醜さは何といふ悲惨でせう。

全く私は愚かでした。無反省の恥知らずでした。肉の墳墓を通り越した醜い汚れた身を打忘れていつくまでも清い乙女心をもつてゐるやうに妄想してゐた私の愚かさ。想へば想ふほど吾ながら此の淺はかな私自身を輕蔑せずにはゐられません。

堅爾様、

想ひ出の深い二日の旅路、其時は本當に世に無く楽しい旅路だと思ひました。私も其時は心に疚しい事がすこしも無いと思つてゐました。しかし今になつて考へてみると、私はあの時

決して／＼あなたに純な愛を捧げてはゐませんでした。不純な濁つた心を懐きながら能くもあんな白々しいまねが出来たものだ、あの夜の事を思ふ度に私は慚愧と悔恨に泣かすにはゐられません。

あなたばかりではありません、私は石塚様にも廣井様にも高木様にも音無様にも惡戯の手を擧げて其の平らかな池の水のやうなお心に小石を投げたのであります。私は何といふイタツラ者でせう。けれども堅爾さん、私は妖婦でも毒婦でもありません。それなのにどうして斯うまで悲しい罪を造つたのでせう。私は私自身が憎くて／＼、起つても居ても堪へ切れない苦痛に襲はれます。私は此の髪の毛を一筋々々自分の手で引むしつても尙ほ飽足りない氣持がいたします。

堅爾様、

けれども私の心の奥底には底光りのする道念が座を占めてゐます。私が戀に饑えて愛に渴いてまつしぐらに駈け出さうとする時、いつも其の道念が強く私の袖を控へて、私の逸る心を制します。私は其時此の尊い道念に深く服従する事が出来ませんでした。私は私の饑と渴き

とを醫したい一杯に苦み跪きました。そして思ひ切り足を舉げて道心を躡る事も得せず、と云つて服従もできず、弱い心に燃え廣ぐる慾火と淨火との戦ひの焔を他人に縋つてスネて甘へて打消さうとしました。それが虚偽となり悪戯となつたのです。本當に私は間違つてゐました。私は二人の主人に事へてゐました。私は私の心の鍛錬の不足を今更口惜しくも怨めしくも思ひます。しかし堅爾様、私はもう決心しました。私はもう誰にも戀などいたしません。私は獨りで自分の胸を抱きしめて、私の心の奥の奥に眞清水のやうに清く澄む戀の泉を獨りで汲んで淋しく暮します。私の罪深い虚偽の生活から救はれる爲めに、私は蝕ばまれたやうな過去の家を土臺から破壊して新しく建直さなければなりません。

堅爾様、

私はかう決心しました。そして一所懸命に強くなつたつもりでも、強がる傍から意氣地なく悲しさがひし／＼とこみ上げて來て唯わけも無く涙ぐまれます。私は十五年前の昔に立返つてあなたが父さん私が母アさんと言つた其頃の事をせめてもの憶ひ出とする事だけは御許し下さいまし。

今は山里に淋しく暮す有髮の尼ではあるが、まだ血汐の結果でない私です。落葉朽葉に埋もれてはゐましても、私はやつぱり若い血汐を抱いて自分と自分を戀して暮します。可愛い可愛い自分の幼姿を追憶して、自分と自分を撫で擦りながら暮しませう。さうした心で『堅ちやん！』と獨りで呼ぶ事を御許し下さいまし。

堅爾様、

それでは御機嫌よろしう。海山遠く離れてゐてもあなたと私とはやつぱり振分髮の古い／＼お友達です。あなたの戀の將來に幸あれと私は一心に祈つてゐます。けれども片山里に唯一人ふびんな戀の敗残者のゐる事はお忘れ下さいませう……必ず御忘れ下さいませう、

昔の 時うちやんより

なつかしい堅爾様

堅爾が此の手紙を受取つたのは十二月の初めであつた。時子の手紙には住所も何も書いて無かつた。堅爾は躍る胸を抑へながら、淋しい山里といふは一體何所の事だらうかと、頻りに封

皮をみつめたが生憎差出局の局名がかすれて『山、龍』の二字だけしか読めなかつた。

山……龍……と幾度も幾度も口の中で讀返してゐた堅爾はハタと膝を打つて、

『和歌山……龍神……さうだ龍神温泉場だ！』と思はず叫んだ。そして再び消印を視るとそれが不思議にも今度は『和歌山、龍神』とはつきり讀めるのであつた。そして其の切手が倒まに貼られてある事にもやつと氣がついた。堅爾はぢつと其の状袋の文字を見詰めてゐるうち、何とは無しに睫に涙のにじんで來るのを覺えた。

日蔭に消え残つた雪を踏みつゝ堅爾が龍神温泉の梶屋に着いたのは夜の九時すぎであつた。綿のやうに疲れてゐるので、其晩はあツさり食事を済してから直ぐ湯にも浴らずに寝てしまつた。

翌朝は九時までぐつすり寢込んで、ふと眼を覺すともう枕邊の障子が白んでゐる。世間が妙に靜かなので、『雪か知ら、』と身體を伸して指先で一寸障子を押開けた堅爾は、『や！ 大雪

だ』と叫ぶやうに言つて撥ね起きた。そして寢衣ねまきのまゝで冷たい縁側に立つて向山を見た。

昨夜幽しく眺めた墨繪の景色は驚くばかりに眞白なつてゐる。もう降りやんで處々雲切れになつてゐる隙から覗くやうに顔を出した太陽が、険しい山を半分まぶしく照らしてゐる。

重たさうに雪を載いてゐた大木の枝が、日の目を見ると俄かに力強くなつて、さも勇士の力を見よとも言ふやうに、二三度頭を掉つて、雪の塊を振落してみせると、他の小さい雜木たちも一齊に頭を上げたりかぶり振つたりして、めい／＼の被つて居た白い頭巾を脱ぎ、白い手袋を投げる。すると眞白い生物が先を争つて前の川岸まで轉けて來て、そこでみんな雪のかたまりになつて碎ける。ひよどりひよどりが二三羽驚いたやうに川上の方へ鳴きながら飛んだ。

『好い景色だなア！』と思はず獨語ちながら敷居際に坐つて眩しい眼をしばたゝいてゐると、

『お早うございます。』と縁に軽く手を突いた女中は、『お客様、直ぐお湯にお浴りなさいますか。』

『浴らう！』とタオル片手に楊枝をくはへて女中について行くと、竹皮鼻緒の杉下駄を縁先へ直したので、

『内湯ぢや無いのかい？』

『すつと此の下になります……あの湯氣の立つてるのがお湯屋でございます。』

『さうか、随分遠いんだネ。』と云ひつゝ堅爾は下駄の痕をつけるのが惜しいやうな氣のする雪の中を歩いた。歩く度に雪は下駄の下でブクリ、ブクリと圓味のある音をたてた。堅爾の耳には其の音が非常に物珍らしい音であつた。やがて長い石段を降りると川に沿つた浴室がある。

男湯には一人もゐなかつたが、板一枚を隔つる女湯ではジャブ／＼湯を使ふ音がした。二坪の大きな湯槽には無色無臭の澄みきつた温泉がピタ／＼縁を洗つてゐる。

堅爾は迂り氣味の湯槽の底を用心しい／＼窓際まで行つて、ブツぶり耳まで浸りながら外を眺めた。際涯なく高く見える山が、眞白く雲の中に聳えてゐる。細長い赤松が其の頂上から青い雲の中に手を差伸して逃げ行く白い雲を掴まうとしてゐる。

仲上つて窓框の所から下を見ると、川原は一面に眞白い。虎の臥てゐるやうな獅子の嘯いてゐるやうな、狗の蹲つてゐるやうな奇岩怪石の間を縫つて流れてゐる日高川の水は、眞黒く墨

のやうに見える。しかし自分で自分の眼を疑ふやうにぢつとそれを見詰めてゐると、段々にそれが水晶のやうに澄明に見えて来る。遂には川底の滑かな岩も小石の一つ／＼も、はつきり見えて来る。岩に堰かれてゴボ／＼と流れ落ちる水の泡の一つ／＼までも見える。川下から飛んで来た小さい川鳥がピーーと一聲鳴いて深い淵の底をくゞつて再び石菖蒲せきしょうぶの生えた岩蔭に隠れた。

『お早うございます。』と不意に後から聲がしたので堅爾はびつくりして振向くと、そこにはガツシリした五十恰好の男が手拭を引攪んで立つてゐる。

『お早う！』と堅爾はあわてゝ會釋した。

『善え湯ぢや。』と飛込みざまブル／＼と唇を鳴らしながら顔を洗つて『有難い／＼』と愉快さうにすつぶり顔まで浸つて、はあはあと長い息を引いた。

隣の浴室は急に静かになつた。トン！と軽く間の仕切板に觸れた音がした。それは優しい女の脇が板に觸れたのであらう。

『此の村のお方は幸福しあはせですネ。こんなお湯があるんだから……』

『のう薪一本焚かいてもこがいな善エ湯が沸くんぢやさかい。』と老人はぢろ／＼堅爾を見ながら、『あなたはどちらのお方ですか？』

『僕は新宮です！』

『新宮？へエ新宮？』と老人は堅爾の顔をまたぢろ／＼と視た。

『ぢいさんは新宮を御承知ですか。』

『知りませんが……あなたは戎屋にお泊りですか……』

『いゝえ、僕は梶屋に……昨晚来たばかりです。』

『はア、さうですか。戎屋に新宮のハイカラさんが来てゐますのう……』

堅爾はハツ！と思つた。しかしわざと落着いた風をして、

『さうですか。そのお方は何といふお名前ですか……』

『知りませんなあ。唯もうハイカラさんで通つてゐますので……』

老人は濁聲でハ、と笑つた。

隣の浴室では又たザブ／＼と湯を使ふ音がした。堅爾は急に恥かしくなつて来た。自分に空

虚を掴ませて置いて、捨子をするやうにほつておきぼりに自分を捨てた時子。其の時子をわざ／＼こんな山奥まで慕つて来たかと思ふと、あの捕捉し難い時子はきつと自分を蔑むに違ひ無い。いつそ思ひ切つて會はずに歸らうか知ら……などと思つて無意味に立つたり蹲つたり手拭を絞つて見たり、それを湯の中へベタリと投げて空氣に膨らんだ所をそツと掴んで丸い玉を造つて湯の中へ引込みながら、ブル／＼と沫を出して見たりしてゐた。

兎角するうちに隣室の硝子戸がガチャンと鳴つて、若い女が急ぎ足に男湯の前を通つて出て行つた。

堅爾は思はず、はツとした。女の俯向いた白い頸筋がちらりと見えて、すぐ板戸の向ふに消えてしまつた。

『お先きへ、』と云ひ棄て、湯槽を出た堅爾は身體を拭き／＼硝子越に見ると、女はもう石段を半分も登つてゐる。其の後姿を見た堅爾の近い眼は、それが果して時子であるか、ないかを確かめることは出来なかつた。

堅爾は食膳に對ひながら考へた。一體自分はどうかしてこんな所まで出かけて來たのだらう？ 時子の手紙は成程感傷的でもあつた。人をひき付ける力もあつた。が、時子が果してそれほど強く自分に執着してゐるだらうか。必ずお忘れ下さいますやう……と二度まで書いてあつた。あの手紙の末尾は一體反語に解すべきものだらうか、其儘受容るべきものだらうか。時子の例の筆法で、どつちにでも抜けられるやうに抜穴を造つて置いたのでは無からうか。自分は全體時子にそれ程深く未練を残してゐたのだらうか。釣落した魚はみんな大きい……そしてそれが此上もなく惜しいやうに、自分は今、逃げられて居所を隠された時子がむやみに戀しくなつてこゝまで來た。けれども今になつてみれば、もう時子が此所に居なくつても、泣きたいほどに失望はしないであらう。唯自分で自分を、『馬鹿が！』と言つて罵るだけであるかも知れない。すると、一體俺は何の爲にあの女を追かけて來たのだらう？

そんなことを考へながら、堅爾は暫く無言で機械的に箸を動かしてゐたが、

『ねえさん、我屋に泊つてゐるハイカラさんは、松本時子といふ人ぢやないですか。』と躊躇しながら問うてみた。

『えエ、松本時子さんといふお方ぢやさうでございます。』

『もう永らく滞在してゐるんですか。』

『ひと月も、もつと前からゐらつしやいます。』

『すまないがネ、あとで一寸僕の名刺をもつて行つてくれませんか。』

『かしこまりました。あの松本さんにでございますネ。』

『さうだ。あの人は僕と同じ町の人なんだ。』と説明がましく言ひながら食事をすましたあとで、洋服のポケットから名刺を取出して其裏へフランス語で、*“Je lion poursuiv la lionne”* (牡獅子は牝獅子を追跡す。) と万年筆でサラ／＼と書いて、

『これを持つてつてお呉れ！』

女中はお膳を下げるとき其の名刺をお櫃の上に乗せて出て行つた。

時子が名刺を見た時、どんな顔をするだらうか、どんな返事をよこすだらうか、アタフタと飛んで來て、『まア堅爾さん！』と縋り付いて來るだらうか、或は長い手紙を持たしてよこし

て『すまないがお目にかゝる事だけは御免下さいまし……』と云つて來るので無からうか、な
ど、考へてゐる所へ次の室から、『御免下さい。』といった聲と共にすうとからかみが開いた。
はツと思つて振向くとそこに立つてゐるのは時子であつた。

『まア大伴さん！』と時子は叮嚀におじぎをして、『いつ京都をお立ち？』

『一昨日……』と堅爾はドギマギしながら少しく後へにじつて坐り直した。

『では、私の手紙を御覧下さいまして？』

『見たから來たのです。』

『だつて、私、住所を書いて無かつたでせう？』

『消印スタンプでやつと見當をつけました。』

『ですけど、お目に懸りたいツて書かなかつた筈ですが……』

『けれども、あアいふイキサツで別れたきりですから、一度膝を突合して、お互に言ひたい事
をすつかりと打明けて、それから綺麗に別れたいと思つて……』

『お待ち下さい。あなたと私とはマダ別れる何のといふ關係にはなつてはゐないんでせう。綺

麗にも汚いにも私はマダそんな事を考へた事は一度だつてありませんワ。』

『果然！』と堅爾はまつかになつて俯向いてしまった。

『そんなお話はもうよませせう。』

時子は急に調子を變へ元氣な晴々した笑顔を作つて、『私今大變なものを勉強してゐますの
よ。』

『大變なものとは？』

『ダアウキンやクロボトキンを読んでますの。』

『成程大變なものだ、小説の方は此頃もうおやめですか。』

『人情ツばいものはもう飽き／＼しました。自分といふものを見つめてゐると自分自身が立派
な小説になつてますワ。トルストイやツルゲーネフが面白くつても、自分といふ大きな小説を
読んで見ると、他人の作つたものなんか讀む氣になれませんワ。實を言ふと今までに私は小説
を讀過ぎましたワ。イブセンのブランドにある言葉を眞似るぢやアありませんが、私の今まで
の考へは皆な物の斷片フラグメントに過ぎなかつたのです。エイナアとアグネスが人生を戀と花とで出來

てるやうに考へて踊つたり跳ねたりして、危い懸崖から踏外して落ちて破滅しさうな危険が身に迫つてゐる事も知らないやうな、そんな不眞面目では駄目ですワ。今はもう酒の神のバツカスやサイレナスを美しいと言つて喜んでる日ぢやアありませんワ。風俗改良、祖先崇拜、婦人問題、勤儉貯蓄、戦後経営、何々主義、そりやアみんな立派な事には相違ありませんが、ちよつと見やう見眞似で、少うしばかり、それも、ホンの少うしばかり眞面目になつて見たり、威張つて見たつてつまらないぢやありませんか。小い岩に圍まれたあのスカンデナビヤを、世界の一等國だなんて威張つてゐたつて、そりやア駄目ですワ。善も悪もみんなフラクションですもの、私には教會の鍵を河に投げ込んで理想の高山へ登つて行くやうな、そんな勇氣は無いけれども、もつと〱全體を見たいの。物の^{オウル}を見たいの、だから私、新規時直して科學的哲學的の頭を造らなければ……』

時子は眞剣な調子でさう言つてゐたが、急に平常の時子に返つて、『生意氣ネ、私は……』といつて頭を少しかしげてにつこり笑つた。

『えらいなア。僕などはもう勉強する勇氣は無い。種物屋の番頭さんで一生を送るんだ。』

堅爾は自嘲するやうに言つた。

『あなたはもうちやアんと専門家でゐらツしやるんだもの。私なんか科學の豫備知識が餘り無すぎますから、何を讀んだつて解らない事だらけですワ。あなたが暫くでも、こちらにゐらつしやるなら、これから毎日質問に上らしていただきますワ。』

『そりやア困る。』堅爾は本當に困つたやうな顔付をした。

『農學ツて、あなたは本當に善い學科をお選びになつたものネ。』と言ひかけて俄かに氣づいたやうに、

『午前中は私の勉強時間よ。日課をなまけちやいけませんから……ちやア失禮してよ。』と蒲團を這つて、さも用のありさうに、さつさと歸つてしまつた。あの熱情の濃やかな手紙とは打つて變つたその冷たい態度が堅爾には悲しい程物足りなかつた。

堅爾は何度も北側の障子を開けて隣の二階を見た。つい目と鼻の〱狭い路一つ隔てた向ふにある〱時子の居室は障子を閉め切つたなり、其の中には人の居るらしい氣配もない。で、堅爾

はむしやくしやすする頭を抱えながら氣晴しに何度もくお湯に浴つた。

雪に包まれた山が薄黒い布片きれで覆はれ初めた頃、時子は堅爾の室に入つて来て、

『どつさり質問があるのよ。』と言ひながら、ノートブックと二冊の洋書を、靜かに疊の上に措いた。

質問は進化論に始まつて生物學から遺傳學に及んだ。堅爾も餘程しどろもどろになりかけたが、好い加減な出鱈目で瞞着される時子で無い事を知つてゐるから、内心大いに辟易しながらも可成りに答へて置いた。

『やはり専門家に教へて戴かなきや駄目ネ。お蔭で大變解つて來ましたワ。』と言つて嬉しさを歸つて行く時子を見た時、堅爾はほつとするやうな氣持がした。

翌る日は正午すぎに『大伴さん散歩しなくツて?』と言ふ聲が我屋の二階から聞えた。

寢轉んで宿のかみさんから借りた(良人の自白)を読んでゐた堅爾は、撥ね起きさま障子を引開けて、『はア、参りませう。』と吾ながら可笑しい程大きな聲で言つた。

『さう、ぢやア私、お伺ひいたしますワ。』

縁側をトン／＼と走つて姿を隠したと思ふと直ぐ庭の所へ現はれた時子は、踏固めた雪の上を下駄を鳴らしながら二三間歩いて、

『降りてらツしやいな。』と顎で招くやうにして言つた。

堅爾は始めて遙々こんな山奥まで尋ねて來た成果を知つたやうに、興奮を覺えながら段梯子を駈け降りた。それから二人は道の真中を僅かに一尺ばかり踏み付けた雪の中を足袋を汚さぬやうに用心しながら、川上の方へぼつり／＼と歩いた。少し煤びたやうに見える兩側の白い雪には杖のあとがあつた。犬の足跡があつた。眞紅な深山樞の實が一つ二つ雪の上にぼろりと落ちてゐるのを見た時子は、寶玉でも見つけたやうに嘆息を放ちながらちつとそれを見つめた。

二人は別に話もしないで、さら／＼と流るゝ水音を聞きながら、藪蔭を通つて板橋を渡つて、小い氏神の社のある所まで出て來た時、時子は何を思つたか堅爾の方を振り向いて、『縁ですネ、本當に……』と言つてにつこり笑つたが不意を打たれた堅爾は『ねえ』と言つただけで、言葉を續け得なかつた。

それから三日目の晩であつた。堅爾は朝から一度も顔を見せない時子の事を想ひながら火鉢に手を翳して、ぼつ／＼と息をするランプを見詰めて居ると、遠く縁側のかなたから優しい足音が聞え、やがて衣摺きぬずれの音まではずきりと聞えて來た。

時子さんだ！と思つた途端に障子が靜に開いて、夢のやうに、すう／＼と入つて來た時子の姿は譬へやうの無い程美しかつた。薄化粧した満面から妖艶な甘い笑が流れてゐるばかりか、彼女の背後にはまぶしいやうな圓光が輝いてゐるとさへ思はれた。堅爾は魔術で縛られたやうに、ちつと堅くなつて見てゐると、時子はしどけ無く火鉢の前に坐つて、少し膨らんだ左の袂を膝の上に載せた。

『今晚は遊びに來たのよ。質問の連發で嫌はれちやア大變だと思つて。』

時子は始めて口を開いたが、堅爾は何だか薄氣味悪くなつてマジ／＼してゐた。

『どうかなすつたの？』時子は頭を左へ傾けてしげ／＼と堅爾を見た。

『いゝエ、どうもしないです。』

堅爾はやつと沈黙の堰を切つたが、其の言葉は微かに震へてゐた。

『今晚は質問なんか抜きにして遊びませうよ。ね堅ちゃん。あなたはマダ覺えてらつしやるでせう。あの權現の川原へ降りる石段のところに、小ちやいこれッばかりのマン丸い窪みがあつたでせう。そこへ蓬の葉だの椎の實だのを入れてお餅を搗いたのネ。』時子は膝の上に白い指さきで小さい環を造つて見せた。

『僕はいつでも其の中へ砂を交ぜたり小石を容れたりして、いやがらせをやつたものだネ。』

『さうよ。あなたはすゐぶんいたづらツ兒でしたのネ。』言ひながら袂の中から小さい罐をとり出して、

『私、いゝものを持つて來たのよ、カドベリーのチョコレート……おきらひ？』

『嫌ひぢや無いですが、同じ甘口なら僕にはキューラソウか、キアンチの方がいゝネ。』

『あなたはアルコールリストなのネ。でも昔の堅ちゃんは今米糖が好きだつたワ。』

『さう／＼彼の頃には今米糖、それから三角四角に切目の入つた生姜板しょうがいた、それが一番子供に喜ばれるお菓子だつたネ。』

「さうネ。ほら、覚えてらしって？ 私が金米糖は胡麻の上にお砂糖をまぶしたのだって言った時 あなたはそんな事は無いって、たうとう金米糖を石の上で幾つもくずくず碎いて見たのでしたネ。」

「うん。石の事で想ひ出したが、僕が高等小學をまだ卒業しない時だった。僕は川原で細長い石を拾つてそれへ歌を書いた事がある。和歌をサ……僕が和歌を書いたんだから面白いぢやないですか。あれは何とか言つたつけ……さうく（キダカンへ イツテキマセウ ニチエフノ ヒルカラワシハ ワタシバデマツ）ツて云ふ歌だった。」

堅爾は始めてはくくくと元氣な聲で笑つた。

「キダカン……さうく井田の観音様をキダカンと略して言ひましたワネ。だつて私、そんな歌を覚えてゐませんワ。」

「覚えて居なさらぬ筈ですよ。僕は其の石へ畢生の智慧を絞つて作つた和歌を書いて、あの楠の樹の下石垣の上に置いて歸つたのでした。そして其の翌日學校の門の所で、かうくした所に細長い石を置いてあるのを、あなたにあげるからツて言つたのでした。其時あなたは、

（さう？ ありがとう） ツて言ひなすつたから、それを拾つて讀んで下すつた事だとぼかり思つて、次の日曜日に僕は渡し場の所でするぶん長く待つたのでした。所があなたは顔を見せなかつたのです。で、僕は樟の樹の下へ行つて見ると其所にちやんと其の細長い石があるぢやアありませんか。其時僕はむツとして其の石を川原の砂の上に叩き付けたのでした。まあ言はゞ一種の失戀だつたのですネ。それは……」

堅爾は段々興奮して來た。けれども時子は冷然として、

「そんな事、初耳よ。ピヨールソンのアルネのやうネ。私がエリーのやうな可愛い娘だつたら……そして二人が黒湖ブラックウォーターを小舟に乗つて渡つたのだつたら面白いロマンスになるんだしたのネ。」と云ひながら鑑の蓋をあけて、「さ、堅ちゃんお手をお出し、お生姜板を上げますワ。」

堅爾は正直に右の手を差出したので、時子は笑ひながらチョコレートを一つ其の掌に載せた。外では冷い風が山々の木々を揺ぶりながら吼えるやうに峰から峰へと吹き渡つた。

二人の間にはまた沈黙の垣が築かれた。

『三日見えなかつたネ。』と藥局の窓から顔を出した田原は例の磊落な調子で『さア、上り給へ、今日は少し相談したい事もあるんだよ。』

『私も御相談があつて……』と言つた音無が書齋へ通つて座に就くか就かないうちに、田原はニコ／＼笑ひながら入つて來た。

『松本艦もいよ／＼戦鬪力が盡きて大伴船渠へ入つたネ。』

『御存知ですか。實は其の御相談に上つたんですが、教會から何か祝つてあげなければなりませんと思つて。』

『祝ひの事は後でいゝだらう。どうせ一度はこちらへ歸つて來るだらうから。』

『さうですネ、いつ頃歸られるでせう?』

『さア、その所は、はつきり解らないが、何しろ少し風變りの結婚式だから。』

『京都の吉田教會で日高牧師の司式でキリスト教式にやるんでせう?』

『さうだ、しかしそれには時子さんからの註文があるんだよ。』

『どんな註文です?』

音無は好奇の眼を輝かしながらきいた。

『堅爾君がわざ／＼日高奥の龍神温泉まで時子さんを追つかけて行つた結果、此の結婚は成立したのだが、時子さんは約束だけなら承諾するといふのです。』

『約束だけ? では舉式の必要は無いぢやありませんか。』

『そこが變つた註文なのサ、堅爾君の熱烈な愛情にほだされて約婚だけはする、しかし結婚式を舉げて、直ぐ其日から時子さんだけは、上京して圖書館通ひをするのだツて、ずゑん面白だらう?』

『さうですか、どういふわけでせう?』

『僕の所へ來た手紙で見ると、時子さんは堅爾君よりも、もつと愛せねばならない人があるツて云ふんだネ。』

『もつと愛せねばならない? あの堅爾君よりも……』

『さう驚かないでもいゝだらうぢやないか。其の愛せねばならないといふのは、時子さん自身の事さ。時子さんは今、自分で自分を戀してゐるんだつて。で、自分といふものよりも、もつともつと堅爾君を可愛く思ふ時が來たなら同棲しようつて註文サ、つまり愛情を偽りたくないと言ふんだらう。』

『さうですか。それで大伴君も承諾したのですネ。』

『承諾もヘチマもないさ、君、男つて云ふものは結婚式前には、ヘイコラと頭を下げて、どうぞ／＼つて女の前に奴隷のやうな様子をして見せるのサ。けれども女を手に入れた以上、俄に暴君に早變りをして虐政を行ふんだよ。其時になつて女はみんな泣くのサ、アンナカレニナだつてさうぢやないか、ウロンスキイのあの口説く時の態度と、結婚後の態度との變りやうの甚しい事を見給へ。時子さんは能う其の男心を呑込んでゐるから……言はゞ食へない女だから、雪を踏んで山を越えて日高奥まで尋ねて行つた堅爾君の熱情に直ぐオイソレと感心してしまはなかつたんだよ。堅爾君の方では、なアに女といふものは、えらさうな事を言つてゐても結婚してしまへばこつちのものだと思つてゐるんだらうが、時子さんばかりは、ちよつくらさう

は行かないよ。』

田原は痛快だといふやうにハ、ハ、と笑つた。音無は眼をパチクリしながら、

『御隠居がよくそれを御承諾なさいましたネ。そんな流變りの結婚を……』

『承諾するどころぢや無い、大賛成だ。あの隠居も随分苦勞をした人だから、堅爾君の性質もよく知つてゐるし、時子さんの氣分も呑込めたんだネ。』と云つて田原は一寸言葉を切つたが、『時に、君は知つてゐるかネ石塚君の結婚を？』

『石塚君が結婚？ 誰と？』

『須基子さんとだよ、僕が橋渡しといふわけぢやアないが、まア媒介者格となつてゐる。此間みんなと一緒に鹿六へ鰻を食べに行つたらう。あの時サ、あの歸途に隠居と石塚君と僕と三人が落合つて約束をきめたんだよ。』

『さうですか、それはお日出度い。良縁ですネ、いつ式を挙げます？』

『式まではマダ間がある。四月に養子の披露をする豫定になつてゐる。二人ともマダ若いんだから急ぐ事は無い。石塚君には老人の世話かた／＼、財産管理の經驗を積んでもらひ、須基子さ

んはナオミさんを付けて二三年東京へ出して勉強させ、せめて十九二十になつたら結婚式を挙げさせようかと思つてゐる。だから東京で時子さんと三人が一緒に暮すだらう、それは大變い事だと思ふ。』

『さうですネ。』と音無は氣の無い返事をした。

『さうだらう。君、時子さんは最初堅爾君と石塚君とを一度に愛してゐたんだよ。それが堅爾君と結婚して今度は石塚君から叔母さんへ言はれるんだ。それにも一ツこんがらがつた事がある。堅爾君は初めナオミさんと結婚したかつたんだよ。ところがみんな一つに纏れ合つたんだから一寸面白いぢやないか。』

『何しろ双方が無事に納つてお目出たい事です。』

『しかし君、全體約束なんて詰らないもんだネ。』田原は何を思つたのか、俄に口調を變へて、『僕は此間から時子さんの事だとか石塚君の事だとかで、大分時間を空費して、コソコソと内証で相談したり、あアのかうのと何年何十年さきの事を今からきめて見たりしたが、考へて見れば馬鹿な話さ。誓ふ勿れといふ教は眞理だよ。僕も月並に太地の隠居に頼まれて鹿爪ら

しくな、顔をして石塚君と須基子さんの話は纏めたが、さてそれがどうなるやら解つたものぢや無い。結局は太地家に何十萬といふ金があるので其の財産の爲に時子さんも須基子さんも石塚君も左右せられてゐるのサ。愛だの戀だのと騒いでも、今日の社會組織では生活問題が大體の基礎になつてゐるんだからナ。僕等の理想するやうな社會組織が來なきやあみんなごまかしだよ。此間僕は非常に面白い事を見た。それは川向ふの小學校長を勤めてゐる男が發狂してこゝへ來た時の話だが、其の校長は最初僕の所へ來て頻りに教育勸語だとか道德だとか言つてゐたが、歸る時に僕の机の上に置いてあつた雑誌のコムリードを黙つて持つて行くんだらう。それは僕もまだみな讀んでゐなかつたんだから、よほど持つて行くなつて言はうと思つたが、まア狂人の事だから放つて置けと思つて其まゝにして置いたら、直ぐ二三時間たつたあとで校長先生又たノコノコやつて來て、(田原君、雑誌を見せてやらう、面白いぞ!) ツて其のコムリードを僕に見せるのサ。そしてそれは無邪氣に其の挿畫の説明を僕にしてくれツて言ふんだもの。僕は可愛かつたネ。で、叮嚀に一々説明してやると大變喜んで、(では御禮に此の雑誌を君に進呈する。) ツて言ふんだらう。不思議なもんだネ、其時に僕が(ありがた

う、頂戴しとく」と言つた言葉は心からの謝意だつたやうに思ふ。つまり其の雑誌と云ふものは校長のもでもなく僕のものでもなく、人類共同の所有物で、それを持つて居るものが其時だけ本當に愉快に満足してそれを所有してゐればいゝんだ。自分が不必要になると誰にでもそれを欲しい人に譲るんだネ。それが本當の所有権だらうと思ふ。吾々はもう空気に對し川の水に對しては、それが自分の所有だと自覺しないほど自分のものになつてゐるぢやないか。やがて世界の總てのものに對してそんな感情をもつ時代が來るだらうと思ふ。だから今日の約束とか誓約とかいふのは畢竟私有財産保護の爲であり、利己的な貪慾な心を美しく糊塗した好い加減な名だと思ふ。』

『では自他の區別が無くなると、夫婦なんていふものもみんな共同になるんですか。』

『それは愚問だよ。世の中がそれ程進化した時には其の時代の人間の良心といふものも比例して進歩するからネ。現に今僕は藥價無請求主義を執つてゐる。けれども本當に僕の藥のおかけで病氣がなほつたと思ふ者は請求しないで、藥價を持つて來る。マダ其上に芋だとか大根だとかをお禮にくれるよ。たとひ病氣はなほつても藥價を拂はない連中は途中で僕の顔を見る

と、すぐ横町の方へ隠れてしまつたり、無茶に叮嚀なお辭儀をしたりする。其の心の苦みを見る時、僕は藥價をもらふ以上に氣の毒に思ふよ。又た中には、自分のやうな貧乏人——朝から晩まで働いて四十錢五十錢しか儲けられない貧乏人——が、妻子を抱えて苦しい生活をして居る上に病に取付かれたんだから、醫者は無料で藥を飲ませる義務があると思つてゐる連中もあるだらう。それを今までの道徳では無茶だと云ふだらうが、少くとも僕一個人にとつてはそれを正當の議論だと思ふ。僕の生活にはそんな人達に藥を無料であげ得るだけの餘裕があるんだから、僕は自分の良心に従つてそんな人達にはこちらから進んで藥を飲んでもらふやうにしたいと思ふ。僕が毎日診察に行く憐れな人達が、冬の寒い時に坐蒲團も火鉢も無いきたない小屋の中で先生々と云つて僕を迎へてくれる其の眼の色には本當に金錢で換える事の出来ない貴いものがある。僕はそんな時眞の人間といふものを見るんだ。或役所の小使をしてゐる男の家に病人があつてそこへ僕は半年も往診してやつたが、もとより藥價なんぞ十分に拂へよう筈は無い。ところが其の男は若い時名古屋あたりの道具屋に奉公した事があつたとかで、一貫張りの拵へ方を知つてゐたとみえ、役所から歸つた暇々に一貫張の机を一つ拵へて、それを禮に持

つて来てくれたが、僕は本當に氣の毒に思つたネ。財産家が自分の親の死ぬ前に大學から博士を傭つて来て何千圓も無駄な金を使ふ孝行よりも此の一貫張を僕にくれる心の方が、よつほど貴いと思ふネ。僕らの唱へる思想が危険だなんて言ふ連中は此の尊い良心の働きを無視した議論で、その方が僕は餘程危険だと思ふ。狗子にも佛性ありサ。」田原は思はず熱して來たのを悟つたらしく、「や、長いお談議になつたネ。僕はこれから往診しなきゃならない……」

『いや私こそお邪魔致しました。』と音無は起ち上りながら、『では御祝ひの方は當分見合せて置ませうか。』

『さうだね、結婚式の朝、兎に角祝電を打つて置けばいゝぢやないか。』

『ね、さうませう、教會の名で。』

『さうだね。』と云つて田原は藥局の方へ入つて行つた。音無は田原の家を出て其の歸り途に太地の門前を通ると玄關前の空地で須基子とナオミは小さなシヤブルで土を掘つてゐた。

『ごせいが出ますナ。』と言つて音無が其傍に立つと、須基子とナオミもびつくりしてふりかへつた。

『まア、どなたかと思つた。』須基子は仰山らしく驚いたまねをした。

『須基子さん、叔母さんが出來てお目出たう。』

『あら、先生知つてらしつて？』須基子は顔をまつかにして『お目出度うだなんていやだワ。』

『お目出度いぢやないですか、須基子さんはあの叔母さんがお嫌ひ？』

『嫌ひぢや無いワ。ですけども……』と少し言淀みつゝ、『ナオミ先生が叔母さんになつたら猶ほよかつたワ。』

ナオミは聞えぬ振をして後を向いてゐた。音無は笑ひながら、ナオミと並んで立つてゐる須基子の丈が俄に目立つて高くなつたのをぢろ／＼とながめてゐた。

「先生はもうお歸りになりましたか。」と言つて田原の玄關に立つた青年は藥局の方を伸上るやうにして覗いた。

「お歸りになりました。御用でございますか……あの大野さんでございましたネ。」と云ひながら女中のお菊は奥の方へ入つて行つた。大野は表の方へ首を出して、「オイ、來給へ。もう歸つてよよ。」と言つて一寸手招いた。すると法被はつぴを着た職工風の男が三人、軒燈の明りを氣にしながら忍び足で玄關先まで來たと思ふと、物に追はれたかのやうに急にパタ／＼と内庭へ駆け込んだ。

「そんなにビク／＼しないでもいゝサ。こゝは醫者だよ。我々は診察してもらひに來たのぢやないか。」

大野は淋しい笑を見せた。

「全くだ、診察してもらひに來たのだ。」

圓顔の職工はニヤリと笑つた。

「おう、大野君か、もう鳴野君はとうから來てゐるよ。裏へ行つてくれ給へ。」と云つて田原は奥へ引返した。

勝手を知つた大野は三人の職工に目配せして臺所の硝子戸をゴロ／＼と引あけてカタコトと裏の方へ出て行つた。土藏の一室を坐敷にしつらへた八疊敷の室には薄暗いランプの光の下に、鳴野がしよさい無ささうに左の掌に頸を載せて小い四角な火鉢の縁に肱を突いてゐた。

「おう、來たか。上り給へ……辻田君や松本君は？」

「來ました、一緒に來ました。」

大野は聲を潜めるやうにして言つた。

四人は火鉢を中にして坐つた。鳴野は少し肩を怒らして、

「どうだい？ あれから……」

「ます／＼大變な事を聞込みましたよ。」

大野が一寸のすまひを直した所へ田原がゴトリと障子を開けて入つて來ながら、

『暗いねエ其のランプは。』

『暗くつてもいいですよ、話は聞えますから……』

鳴野は少しく大野の方へ躡りよつて、田原に席を譲つた。

『失敬！』と田原は一同に一寸會釋して、『大野君、其後どうしました？ いよいよ決行ですか。』

『えエ、決行する事になりました。五工場の中で第一から第四工場まではもうみんな決束してしまひました。』

『ふん、第五工場は加入しないといふのかネ。』

『いゝエ、第五工場の職工は人員も少いし、みんな我々の説に同意して居るので、全く我々とは關係の無いやうに見せかけて、そして内部の事情をすつかり我々に知らしてくれる手筈なんです。でなければ重役達が、中でどんな事をするか知る方法がありませんから……』

『さうか、それは好都合だ。そして内情は一體どうなつてゐるんです？ かいつまんで言つてくれ給へ。』

『かうなんです。あの工場では毎月我々職工から五十錢宛の積立をして、之れを相互扶助の共同基本金としてゐるんです。ところが先の社長が二年間も肺病で臥てしまつて、碌に會社の事務を見なかつたもんだから、其間に重役の悪い連中が其の共同基本金をめちやく／＼に使つてしまつたんです。藝妓買をしたり妾宅を構へたり、甚だしきは購買組合の米を引出して賣つたりしたんですもの。それで我々職工から其の精算を迫つたのです。けれども今の社長は赴任早々でマダ何にも會社の内情が解らない所へ重役達がいろ／＼ごまを磨るもんだから、社長うまく捲込まれてしまつたんですよ。それに非常に頭の堅い人ですから、職工の分際として決算を迫るなんてけしからぬといふんです。我々も最初は手柔かに談判してゐたんですが、どうも埒が明かないのでたうとう決行する事にしたんです。ですから今晚は一つ先生の智慧を借りに参りました。』と大野は右に坐つてゐる三人をふりむきながら、『此の方が第四工場の松本君、其の次が第二工場の林君、其次が第三工場の辻田君……』

三人は叮嚀におじぎをしながら『どうぞよろしく……』と聲を揃へて言つた。

『一致といふ點にはどうも訓練が出来てゐない連中だから、餘程しつかりほぞを固めなきやア

すぐ碎けてしまふよ。』

鳴野は腕を組みながら言つた。

『それは大丈夫です。とにかくもう第一から第五までの工場全體が歩調を揃へてゐますから。』
と言つた大野は三人を顧みながら『ねえ、君達、もう大丈夫でせう？』

『え、大丈夫です、第三第四工場が中心になつて飽まで戦ひます。』

辻田は憤激したやうに言つた。

『ではかうしよう。』と田原は火鉢の中から眞鍮の火箸を一本抜いてそれで軽く火鉢の縁をたゞきながら、『第一は先づ職工全體が固く同盟する事。第二は諸君が平常の通り勞働しつゝ、重役に對して交渉委員を選んで穩かに談判する事。それが上策。第三には内部のみで、どうしても解決出来ない時は外部からも——鳴野君のやうな方に頼んで——交渉委員になつてもらふんだネ。それが中策。第四にはどうしても社長や重役が頑固で承知しないなら同盟して罷工するのサ。そして新聞でも治安警察法十七條に抵觸しない範囲内で大いに應接するんだネ。ゼネラルストライキとか、直接行動とかいふ言葉の流行する今の時代だから、これを一地方の事件

にしないで廣く日本の問題にするんだネ。しかし、さうなると餘程注意してやらなければいけない。ストライキと云へばすぐ硝子窓を毀したり機械を碎くといふやうなサボタージュをやる事だと思ふのはいけない。正々堂々とした、本當に正義を旗印としたストライキをやつて欲しい。ストライキといふのは最後の手段だから、それを理想的にやつて範を示すんだネ。さうすればストライキといふものゝ眞意がわかる。ストライキといふものは正當の要求を正當にするものだといふ事を知らねばならない。不當な要求を不正な行爲とするストライキは失敗するのが當然であり、そんなストライキの起る事は國家人類の不祥事だから……そこを能く考へて堂々とやつてくれ給へ。』

田原は段々と火箸を高く振り上げつゝ熱誠をこめて言つた。一同はみんな黙つて聞いてゐた。

『では諸君、かうしよう。』と鳴野は元氣な聲で、『明晩から此の室を事務室に借切つて實地運動に着手しよう。今田原先生の仰しやつた順序に従つて、先づ上策を講じてみるのだ。で、其の宣言書を職工全體に配付しよう。どうせ下策も下々の策も施さなきやア治まらないだらう

から、事件の内容を記載した印刷物を株主全體と町内の有志に配付する分も、更にストライキの宣言書と、そしてストライキ規約とでもいふやうな心得を書いたものも一緒に印刷して置くんだネ。そしてぐづくしないでグン／＼やつて行くのサ。同文電報で京阪の各新聞へも通信してネ。模範的にやつてみようぢやないか。ストライキと云へば直ぐ亂暴を連想する連中を驚かすんだネ。なる程ストライキとはア云ふものかと感心させなければ、労働問題の將來も危まれるよ。日本にも將來はストライキが段々起るだらうが、ストライキはあんなにやるべきだといふ模範を我々が示すんだネ……どうでせう、先生。こゝを貸して下さいませんか、表から出入をしないで、此の裏の川原から石段を傳つて出入するやうにして……先生に決して御迷惑はかけませんから。』

鳴野はまだ戦はない前からもう凱歌を擧げるやうに興奮してゐる。

『そりやアこゝを使つてもいい。しかし餘程注意をしないと駄目だよ。きつと裏切るものが出来たり、血氣に乗じて亂暴するものが出たりするからネ。』

田原は氣遣はしさうに、さう言つて一同を見廻した。

『さうです、其邊はよほど注意してやります。』と大野は誠意をこめて、『法律顧問として南さんに、文書係として鳴野さんに御面倒を見ていただくわけには行かないでせうか。』

『南君に頼むのもよからう。』と鳴野は田原を見ながら、『文書係には卒業タイムスの通信員をしてゐる大川流二君を頼んではどうでせう？』

『さうだネ、いづれも適任でせう……しかし印刷はどうする？』

『僕の謄寫版があるからあれをもつて来て、明晩から印刷しよう。三千枚も刷れば十分でせう。』

鳴野はさも愉快さうに腕をさすりながら言つた。一座のうちには未知の世界を發見したやうな興奮した空氣が充ちた。

翌晩から田原の裏坐敷では一時二時頃までヒソ／＼と話聲が洩れた。下女にコーヒーを運ばせたり、ビスケットを罐のまゝ持たせてやつたりするだけで、田原はちつとも裏坐敷へ顔を出さ

なかつた。鳴野も大野も朝から晩までヒソ／＼と何だか計畫してゐるやうではあつたが、ことさら表へは出て來なかつた。

さうして四日五日経つた後で、田原の經營してゐる新聞サンセットでは、『熊野製材會社の内部に小紛擾あるものゝ如く昨今委員五名社長宅を訪問し何事か交渉する所ありたり。』云々といふ短い報道をした。しかし其の翌日の紙上では『熊野製材會社の内情』と題した一段半の記事が掲載された。同時に町内の株主へはどこから誰が發送したとも知れない謄寫版の印刷物が配付せられた。それには社長の無能、重役の横暴などが詳細に指摘されてあつた。町内では寄るとさはると製材會社の噂で持切つた。

たうとう上策も中策も行はれないで下策を執つたのである。製材會社の職工連は朝疾く王子ヶ濱に集合して同盟罷工を誓つた。鳴野は小高い砂丘の上に登つて嚴肅に誓約書を読んだ。そして『我等は飽まで紳士的體度を守り決して不法亂暴の行爲をなさず正々堂々正義を旗印として此の同盟罷工を遂行せん事を期す。』といふ條に力をこめて、一段高く聲を張上げた時、職工全體は破るゝばかりの拍手を以て賛同の意を示した。

一同が大野の發聲につれて萬歳を三唱して解散したあとへ、會社側の通告に接したと見え警察署から警部巡查數名駈け付けて來た。しかし彼等は唯砂の上に殘された縦横の足跡を見たばかりであつた。

其日の午後、會社から大野松本辻田等十二名に解傭の通知を出した。そして『若し三日以内に出勤せざる職工は悉く解傭す』云々の通知を職工全體に發した。

事件はます／＼紛糾して來た。田原の新聞サンセットでは殆ど全面を會社攻撃に用ひた。牟婁タイムスは毎號其の第二面全體を大川流二の通信文掲載に提供した。そして朝日座で勞働問題大演説會を開く事になつて町の辻々には大きな廣告が貼られた。辯士は鳴野、田原、大野、松本、辻田等で、演説會の前日から、五百名の職工は隊伍を整へて町内に示威運動をした。

『鐵ぶち眼鏡の鼠を先に

あまたの鼠がゾロ／＼と

かちる共同基本金！

猫が見つけてストライキ！」

といふ歌を節面白く合唱しながら町を練り歩いた。製材會社の社長はいつも鐵縁の眼鏡を自慢にして、金縁は贅澤だといつて勤儉貯蓄を説くからである。

一隊は何度もくく町外れの熊野製材會社の前に押掛けて行つて「熊野製材會社萬歳」をあびせかけた。しかし二回目三回目から、彼等は萬歳と呼ぶかほりに、「熊野製材會社アブナイ」と叫んだ。

(244)

音無が日曜説教の準備をしてゐる所へ警察署の小使が入つて来て、

「署長さんが、御相談申したい事があるので、今すぐお出で下さるやうにと申しました。」と言ひ置いて直ぐアタフタと出て行つた。

「何だらう？ まさかストライキの事では無からう？」と呟きながら音無は羽織を引掛けて急いで警察署へ行つてみると、玄關わきの事務室で横田署長は音無の方へ脊を向けて、大きな赤

ら顔の六十近い男と話をしてゐた。

「此れは職工達の書いたものぢやア無い。」

それは署長の聲であつた。

「無論、此のストライキの張本人は外にあるので、其張本人は言はずと知れた……」

赤ら顔の男は急に聲をひそめた。

「さうだらう。僕もさう思ふ。そんな原稿用紙をつかふ職工達はない。」

署長がさう言つた時、受付で事務を執つてゐた巡查が、音無の顔を見ながら、「何か御用ですか。」と靜かに訊いた。

「へエ、今、署長さんから至急に來いといふ御使でしたから……」

「あ、さうですか。」

巡查が立ち上らうとした時、横田警部はふと後を振向いて、

「おう、音無君。どうぞこちらへ……」とことさら聲高く言つた。警部と對座してゐた男は紙片を状袋と一緒にあわて、懐へ入れながら、「さやうなら、まア萬事宜しく……」と云つて音

(245)

無と摺違ひに出て行つた。

音無は心の中で「あれが製材會社の重役津本だナ。」と思つた。

「どうも御苦勞でした。御呼立いたしまして……」と署長は叮嚀に挨拶して、「御承知の通り製材會社のストライキは困つた事になつたものです。明日一日で出勤しないものは明後日からみんな解傭と會社側では主張する。職工側では明日の晩朝日座で政談演説會を催すといふ。今の所ではどつちも張眩で争うてゐるのだが、職工側も田原君だの鳴野君だのといふ社會主義者をまぜて演説會をするのは不利益だ。今の社會主義は破壊主義だから、さういふ連中が一緒に演説をするとなると、警察の方でも厳しく取締らねばならない。しかし演説會を解散でもすると職工連はきつと不平不満を爆發させてどんな大事を惹起すかも知れないと思つたから君に御足勞を願つたわけです。あのストライキの發頭人の一人と見られてゐる辻田といふ男は、あれは君の所の教會員だといふ話だから、牧師である君から一つ説きつけて、重役側と何とか話を平和に片付けるやうにしてくれまいか。僕も仲に立つ必要があるなら十分に骨を折るから……それから君と田原君とはちつこんらしいが、田原君に話をして明日の晩の演説會は勞働者ばかりの演説にするやうに……そこを君から——僕の意見だと云ふ事を打明けて、よく相談してくれ給へ。どうぞ君、一つ御盡力を頼む。」

署長は白髪の五六本交つた少ない鬚を左の手でしごきながら何度も軽く頭を下げた。「辻田君は教會員ですが、もう半年以上も教會に出席しないし、到底僕の言ふ事は聞入れませんが、まアあなたの御意見だけは、御取次して置ませう。それから田原君ですネ。あの人は或は承知するかも知れませんが、鳴野君はなか／＼耳を傾けないだらうと思ひますが……」

「まア、一つ盡力してくれ給へ、こゝで社會主義者がストライキを煽動するなんて、そんな事件が起つては困る。」

署長は口を一字に結んで音無の顔を見詰めた。音無は署長の苦心にも同情したが、田原や鳴野の意向を平生から能くのみこんでゐる彼には、此の談判が遂に不調に終る事を能く知つてゐた。

音無は警察を出て直ぐ田原の所へ行つてみた。丁度往診から歸つて火鉢の前にくつろいで、アを飲んでゐる所であつた。

『今日は全權公使といふ格で来たんだがネ。』

音無の言葉の終らない間に田原はニコ／＼笑ひながら、

『警察からの……臨時使節だらう？』と云つた。機先を制せられた音無は、

『實はさうです。もう誰かからお聞きになりましたか。』

『そりやア君、天眼通だもの……』と田原は可笑しさをこらへるやうにして、『僕はさいぜん俤の上から君が警察署へ入る姿を見たんだよ。』

『さうですか、實は横田署長がかう言ふのです、此のストライキに社會主義者がまじつては労働者の不利益になるから、あなたと鳴野君との演説を明晩見合して欲しいと云ふんです……そりやア到底出来ない相談だらうとは思ふが……』

『僕は別に演説をしたいと言ふわけぢやア無し、差控えてもいいが労働者が聞くまい……それから鳴野君も承知しまし。演説して中止せらるればそれまでだが。』

『僕もさう思ひます。まアそれだけ御耳に達して置けばいいのです、全權大使と云つても本國の意志を取次げばそれで使命を終つたのだから。』

『所が音無君、二つ困つた事が起つたんだよ。』と田原は猫板の上にコップを描いて、『今日往診先で聞いた話だが、職工の中に不心得な男がゐて、重役の津本に脅迫状を送つたんださうな。(若し明後日唯の一人にでも解備を言渡したなら貴様は其日限り笠の土臺が無くなるぞ！)ツて云ふ意味の凄文句をならべてあつたさうな。最初からそんな下らない事は決してしないやうに、くれ／＼言ひ含めてあつたのだが、どうも抜がけの功名をしたがる者があつて困る。』

『津本といふ人に？』

音無はせき込むやうに訊いた。

『うん、彼の津本……重役でもなか／＼權勢ある男でネ。こちらへ赴任する郡長でも署長でもみんなあの男の御機嫌を伺はなければ何にも出来なかつたもんだ。』

『津本ツて、彼の赭ら顔の……大きな體格で……』

『さうだ、君はマダ知らないのかい。彼の有名な男を。』

「知らないんだが、……では、今日警察署で見たのはそれにきまつてゐる。」
音無は獨りでうなづいた。

「警察署にゐた？」

田原は言葉せはしくきいた。

「えエ、私が行つた時、丁度其の津本だと思ふ人が署長と對ひ合せて……何だか紙に書いたものを出して……さうです、署長が（これは職工達の書いたものぢやア無い。職工達はそんな原稿用紙を使はない……）と言つてゐました。」

「原稿用紙？ ではその原稿用紙に書いてあつたのが例の脅迫状ぢやあないか知ら？」

「脅迫状だつたか何であつたか、そこまでは知らなかつたが、とにかく、青い罫の入つた小形の紙でした。」

「青い罫の小型の？ ふん、そして君はそれを確に見たかい？」

「津本らしい男がそれを懐へ入れるところを見ました。そして其男は、（此の張本人は言はずと知れた……）とか何とか言つてました。」

「ふーん、」と言つたまゝ、暫く無言でゐた田原は、ツイと起つて書齋の方へ行つたがすぐ歸つて来て、勝手の所で女中を指圖しながら、五つになる丈太郎を片手負にしてビスケットを焼いてゐた妻の貞子の方へ、

「おい、あの机の上に置いてある原稿用紙が百枚足りない。どうしたんだい。知らないか。」

「東さんが持つてらしたつたワ。昨日のおひる頃……」

「お前が渡したのか、それを……」

「えエ、此間あなたが東さんに百枚おあげするツて約束なすつたぢやありませんか。」

「うん、約束した、あげたのが悪いと云ふんぢやないサ。本當にあげたのかツて念を押したのだよ。」

「えエ、確かに百枚あげましたワ。」

「さうか。」

田原は直ぐ起つて電話口に行つて……番！ と言つた。音無は不思議に思ひながら田原の後姿を眺めてゐた。

「……東君ですか。ヤア、どうも大變な事になつて來たネ。何だか急に外國の人間になつたやうな感じがする……うん、やるよ。大いにやるよ。罷り違つたら君に辯護を頼むよ……うん差入品だけでもい……時にネ、變な事を聞くやうだが、昨日の正午、君は僕ん所の原稿用紙を持つて歸つたらう……いゝや、持つて行たのは構はないんだが、それを君はもう使つたかい。……マダ一枚も使はない？ さうか、それなら安心だ。實はネ、重役の津本の所へ原稿用紙……青い罫の原稿用紙へおどし文句を並べ立てて送つたものがあると聞いたんで……或は君かも知れんと思つてネ。ハ、ハ、ハ、失敬々々……」

田原は快活な顔をして元の坐へ戻つて來た。そしてストライキに就いていろんな話をしてゐる所へ、表口に俥の停る音がしたと思ふと、あわてゝ駈込んで來る下駄の音がした。

「急患だナ？」と田原は内玄関の格子戸の隙から外を透して見ようとした時、勢よくそこへ入つて來たのは東であつた。

「おう！」と田原は眼を圓くした。それは何等かの大事件を豫想したらしい。

「誰も外に來てゐやしない？」と東は四邊を見廻しながら、「誠に申譯の無い事をしたので

……」

「何です？」

田原はゐすまひを直した。

「實は……」と言ひかけて音無の顔を振返りながら、「音無君だけだから構はないでせう……實はあなたから戴いた原稿用紙を僕の机の上に置いてあつたのです。所が昨晩僕は遅く歸つて何にも知らなかつたが、さつきお電話があつたあとで其の原稿紙を見ると十枚ばかり上の方を使つてあるんでせう。で、僕は留守番をしてゐた弟に、誰が此の原稿用紙を使つたかと問うたんです。すると弟はニコニコ笑つてゐて何にも言はないんでせう。段々と叱つたり賺したりして聞糾すと、昨日第四工場の職工長をしてゐる大谷といふ男が來てそれを使つたといふんです。」

「ふん、どんな事に使つたんだい？」

田原は顔色を變へた。

「それがけしからんだ。大谷は其の原稿用紙へ津本を暗殺するの、其の笠の土臺が飛ぶのツて思ひ切つた事を書いたんださうな。」

『では、いよ／＼それだ!』

田原は凄いやうな眼付で音無を見た。

『音無君はそれを御承知ですか。』

東は音無の方へ向直つた。

『えエ、さつき警察署で其の津本らしい人が、青い罫の入つた原稿用紙に書いたものを署長に見せてゐるところを見たのです。』

『ふーん、』と東は太息をついて、『其の原稿紙に書いたものを津本は署長に渡しましたか。』

『いゝえ、懐へ容れて歸りました。』

『さうか、そんなら僕はこれから行つて、津本の前に這ひつくばつてゞも其の脅迫状を買つて来る! さうしなけりやア先生に申譯が無い、さやうなら!』と坐を起ちかけて、『若し津本が承知しないやうだつたら非常手段を以つてゞも其の脅迫状を奪ひ返しますが、……太地家の名義を借用するかも知れませんが、太地さんとあなたとの関係ですから、太地さんにも異存はありませんまい?……』

『どんな事に利用するのか知れないが、僕の言ふ事だつたら大抵承知するだらう……』

田原は浮かぬ顔で東を見上げた。東は靜かに火鉢の前へ坐るやうに腰を屈めて、

『津本は熊野銀行の専務取締だらう、あの銀行の内幕は僕も少々知つてるんだが、あまり強情を張ると太地家の貯金を五萬なり十萬なり取出すんだネ。大びらに取出すと云ふんだネ。今、あの銀行から太地家のやうな大得意先が五萬なり十萬なりを取出したといふ事が世間に聞えりやアみんながバタ／＼と取付けに行くにきまつてゐる。さうすりやアあの銀行も危いよ。時と場合によると僕は其の氣勢を示すんだ。王道で行かなきア霸道を行ふんサ。』

田原は黙つてゐた。

東がアタフタ出て行つたあとへ、引違へに鳴野と大野とが入つて來た。

『先生! 事件は面白くなりましたナ。明日の演説會はきつと盛會ですよ。』

鳴野は酒臭い息を吐きかけるやうにして火鉢の前に坐つた。大野はあが上りがま櫃に腰を掛けて下駄の後で蹴込の戸をトン／＼言はせてゐた。

『先生しツかりやつて下さい。明晩は……』

鳴野は太い腕を擦るやうにして言つた。

『僕は明晩、演説は御免蒙る。大變諸君を裏切るやうで濟まないが、まア勘忍してくれ給へ。事情は後で話すから……』

田原は俯向いて火鉢の火を見詰めてゐた。鳴野は呆れたやうに田原の顔を覗きながら、

『演説をなさらない？ 今一息といふ所で我々が手を引いちやア労働者側の負けになります。

明晩先生が演説をしないぢやア、九俣の功を一簣に缺くといふものです。そんな事を仰しやらないで、どうぞ出席して下さい。』

『しかし此の場合、社會主義者が此の運動に加はるといふ事は、運動の爲に不利益を來すかも知れない。我々は主義が世の中に實行せられ理想が現實せられて行けば、何も自分が矢面に立たなくともいゝぢや無いか。』

『それは先生、理窟です。理窟と云ふものです。理窟はどうにでもコヂつけられます。しかし先生が今まで此の主義の宣傳にあれだけ犠牲を拂はれてゐながら、かういふ實地問題が湧上つて來た時、尻込されたとあつては實に先生の爲に惜む、僕は日本の労働問題解決史の一ページ

を飾る爲に先生の驟然たる憤起を望む……先生、どうぞそんな弱い事を仰しやらずに、明晩はウンとやつて下さい。こゝで我黨の主義主張を町民に知らせなければ知らせる機ががあります。我々は人類の爲に……弱きものゝ爲に……虐げられし者の爲に……先生、大いに戦はうぢやありませんか。』

鳴野は熱い涙をポト／＼と膝に落しながら田原を睨むやうにして言つた。

『鳴野君、』と音無は其袖をひかへながら、『田原さんにも込入つた事情があるんだらうから……まアさう言はないで……』

『音無君、君は黙つてゐて下さい。僕達は君を信用してゐないんだ。そりやア君の人格をどうのかうのと言ふんぢやア無い。しかしあの横田署長もあの妻君も君ン所の熱心な信者ではないか。だから横田警部は君といふものを橋にして我黨の内情を探りに來るのは人情の常さ。今日も今日で署長は辻田君を呼んで、二言目には教會だとか音無だとか言つてゐたさうだ。僕は君と個人としては親しく交際するが主義の上からは僕は唯物論者、君は有神論者、どうしても一致しないんだ……』

音無は何か言はうとしたが、田原はそれを遮つて、「とにかく僕は明晩演説をしない事にしたから、さう思つてくれ給へ。あとで詳しく事情は話すが……鳴野君！」と田原は少しく聲を慄はして、『君も演説をしないでみてくれ、ばい、がネ。』

『鎗が降つても火が降つても僕はやりませぬ。僕は此の場合決して臆病神なんぞに誘はれはしません！』と言ひながら起上つて『さやうなら！』

『さやうなら……』

田原は俯向いたまゝ言つた。

鳴野は大野と伴れて荒々しく格子戸を引開けたまゝ後を閉めもせずに出て行つた。田原は二人の後を見送つて悲しさうに、『仕方が無い！』と呟くやうに言つた。

残つた二人は黙つて火鉢の兩方に對ひあつてゐたが、暫くして東から電話がかゝつて來た。

ハア、ハアと返事ばかりして聞いてゐた田原は、『いやどうも有難う、さよなら。』と言つて電話を切つて、

『音無君、津本はたうとう其の脅迫狀を東君に返したさうな。』とやゝ安神したらしく言つ

た。

『さうですか。それはよかつた。』

音無もほつと安堵の息を吐いた。

『しかし、それを見た警官の頭の中に残つた印象は何ともする事が出来ないからナ。』

田原は顎髯を掴みながら淋しい聲で言つた。

翌日の演説會に田原は、たうとう顔を見せなかつた。鳴野は演説半ばで中止を命ぜられ、續いて演説會は解散されてしまつた。

三日目はいよく職工達の運命の決する日であるが、調停に入るものがあつたと見え、町の演武場で會社側と職工側との懇談會が開かれることになつた。しかし田原の所へは案内狀も通知も來なかつた。のみならず、今まで何から何まで意見をたゞきに來た職工長達からも何の音沙汰すらなかつた。田原も遺がに心淋しかつた。どうせかうなるだらうとは思つてゐたが、腹

心の鳴野までが一朝にして自分から離れてしまつたのかと思へば、何だか自分の今までして来たすべての事が、みんな詰らない犠牲であつたやうに思はれてならなかつた。そればかりではなく、今にも五六百の職工たちが押寄せて来て、口汚なく自分を罵りながら石や瓦を投げ込んで、馬鹿、國賊などゝあらゆる罵詈謗を逞うして戸障子をたゞき砕くのではなからうかとさへ思はれた。ホザナよと呼んで歓迎した基督を一週間の後に十字架に付けたエルサレムの民のやうに、自分も今に彼等の手で、裏の座敷でいろんな密議をこらした彼等の手で、悲慘な十字架に付けられるのでは無いかとも思つた。

(260)

もう日のトツブリと暮れた頃、息喘き駆け込んで来た覺也は、『駄目です、先生！』と上り框に腰を卸しながら吐出すやうに言つた。

『何が？ どうしたんだい？』

田原は少しアタフタした調子で問うた。

『私は演武場の懇談會へ行つて来たんです。ところがまるで成つてゐないんです。懇談會だと

云ふから職工側にも、意見の一つ位は吐かすのかと思つたら、おびたゞしい官僚振を發揮して、社長が戊申詔書を奉讀したあとで、抑も我大日本帝國は古來……と型の如く言つて、會社はその一つの家である、社長は父で、重役は兄である、職工はことごとく子であり弟である。苟も子たり弟たる者が父や兄に反抗するとは不孝の子である、忠臣は孝子の門より出でなければならぬのだから不孝の子は即ち不忠不義の臣である。十數日間職務を怠り、國賊同様の者共に教唆されて騒ぎ歩くとは正に戊申詔書の御趣旨に背く不忠漢であると……かう言つたのです。勿論其の演説にも一通りの筋道は立つてゐるが、しかし社長は自分達の缺點に就いては一口も言はないで、頭から吐り付けようとするのはあまりに神輿主義ぢやありませんか。たうとう職工達と大衝突で會合はめぢや〜でした。今すこウし誰かゞ柔かに双方を調停してやつたら無事に解決出来たらうと思つたのですが、……もう今日限りで、いよ〜出勤しないものは解備するといふので、腰の弱い連中はソロ〜規約を破つて出勤しさうになつてゐる所を、やつとのことで喰止めて居るのださうです。此のまゝ職工を無條件で出勤させるのも心外だし、全部解備させるのも可愛さうだし、どうすればいゝんでせう。先生！ 今晚中にでも何とか骨を

(261)

折つてやつてはもらへないでせうか。私はこれから鳴野君や大野君や辻田君たちを訪問してお宅へ集るやうにしますから、先生、一つ何とか智慧を貸してあげて下さい！』

覺也は訴へるやうに言つた。黙つて聞いてゐた田原は、

『では、かうしよう。君はこれから東君の所と音無君の所へ行つて至急こゝへ來てもらふやうに言つてくれ給へ。僕も少し思ふ所があるから何とか一思案して見よう。』

『ありがたい、どうぞさうしてあげて下さい。實際此のまゝに踏潰されてしまつては労働者が氣の毒です。』

覺也がさういつて帽子を取上げた時、デヤン／＼とけたましい半鐘の響きが聞えた。

『おや？』と二人が顔を見合せた時、近くの寺の鐘までゴーン／＼と鳴り初め、『火事ぢや、火事ぢやア。』と言ひながら表を東の方へ、バタ／＼と駆けて行く人の足音が騒がしく聞えた。

『火事ですナ？』と言つて表へ駆出さうとした覺也を呼止めた田原は、

『裏の物干へ行つて見よう。一緒に來給へ！』と叫ぶやうに言つた。

覺也は靴を三尺ばかり離れた所へ、かたし／＼に脱ぎ捨て、坐敷へ上つて來た。そして二人

で裏の物干へ登つて行つた時は、もう王子ヶ濱の方で眞赤な煙の雲が燃え上つてゐた。

『どこだらう？』と田原は欄干に片足かけて伸上り／＼見てゐるうちに、『火事ぢや、火事ぢや、製材所が火事ぢや！ えらいこつちやぞ！』と言ふ大きな聲が聞えた。薄暗い路次を走る黒い影が一つ、『どうせこんな事が起るだらうと思つたよ！』と呟きながら人込の中へ消えて行つた。

田原は其の呟くやうな聲が、はつきり手に取るやうに聞えた自分の敏感を不思議に思つた。

『先生、大變な事になりましたネ。私は直ぐこれから現場を見て來ます。』と言つて下へ降りようとした覺也を引止めた田原は、

『よし給へ！ 下へ行つて話さう……』と制するやうに言つた。

覺也も思ひ當る所があつたので、そのまゝ物干場を降りて、玄關の直ぐ次の室で田原と一緒に茶を飲みながら往來の人達の話を聴くとはなしに聴いた。

『たうとう一番大事の機械が焼けてしまつたさうな。』

『第三工場から出火したといふ話だ。』

『餘程な損害だらうよ。』

とり／＼な噂が手に取るやうに聞える。

翌日から三日間に亘つて警察署では數百人の職工を召喚して訊問したが、みんな聴取書を取られただけで還してもらつた。一人も拘留せられる程度のもは無かつたが、しかし事件は暗雲に包まれて物凄く或物を模索しはじめた。

同盟もいつとなく碎けて、五人十人と會社へ復歸するやうになつた。

硬骨な十二三名が基本金の権利を放棄して隣縣へ職を求むべく去つただけで、残りの職工はみんな平均十錢づゝの賃錢増額で元々通り働くことになり、間もなく工場の煙突は盛んに黒い煙を吐きはじめた。

會社からは長い手紙を印刷して株主始め、職工や町の有志にまで一々配達した。其の内容

は、積立基本金の大部分は購買組合に投資してあつたのだが、火災の爲に物品も帳簿も焼失してしまつたから清算できないのを遺憾に思ふ。しかし本年度の利益金で何とか埋合せをする云々といふのであつた。

怪しい火は種々の風説を産んだが、遂に七十五日も夢の間に過ぎて、火事の噂も殆ど消えかけた頃、一人の若い男が田原の玄關へ来てひどく打萎れながら案内を乞うた。

田原は出て行つて會つて見ると、それは製材會社に働いて居る小山といふ機械部の職工で、時々診察を頼みに来る男であつた。

『小山君か、又た胃が痛む？』

『いゝえ、一寸先生に御伺ひ致したい事がありました……』

『さうか、こちらへ上り給へ。』

田原は小山を診察室へ案内して廻轉椅子に腰を掛けさせた。

『先生、私は今度裁判所へ呼出される事になりました。』

小山は泣かんばかりにしほれてゐる。

『え？ 君が……どんな事件で？』

『会社の火事の一件で……』

『火事の？ 今頃どうしたといふんだい？』

『どうもかうありません。何百人も調べられた中で、私一人が有力な懸疑者になつてしまつたのです。』

『それは、どうしたわけだい？ 君のやうなおとなしい人間が……』

『實はあの火事の晩、私は機械の番人として宿直に當つてゐたのです。ところが、もう十日も十五日も機械は動かさず、全然火の氣が無いので、火事の心配はないと思ひまして、悪い事とは知りながら内證で一吋町へ出て来て酒を飲んで遊んでゐます間にあの騒ぎが起つたのです。』

『では、其の酒屋の主人に、何時頃から何時頃まで其の店にゐたといふ事を證明してもらへば善いぢやないか。』

『はい、それはもう警察の方でも、ちゃんと調べてくれましたのです。しかし私が其の酒屋を出て三十分もたつたかたゝないうちに火事が起つたのです。しかも火は私の宿直室から出ました。私があつた松原の所まで行つた時、宿直室の屋根がぱつと赤く光るのを見てびっくりして駈付けたのですが、私の行つた時はもう機械室一面が火の海になつてゐました。』

『どこの酒屋か知らないが、そこからあすこまで三十分で行けるか行けないか、それを詳細に調べてもらふんだネ。』

『へえ、警察のお調べでは、走つて行つて十分、普通に歩いて二十分から二十五分とおつしやるんです。』

『さうか、では僅か五分十分の争ひなんだナ。困つたなアそれは……』

田原は憫れむやうに小山の顔を見た。小山はぼと／＼涙を流しながら、

『私には一人の年とつた母親があります。それがもう長い間フラ／＼病で苦しんでゐるので、一度先生に御診察を願ひたい／＼と云つてゐますが、何さま私の薬價も碌々御拂ひしないのですからあつかましくお伺ひできないと言つてゐますが、萬一私が監獄へでも入つたなら其の母

がどうなることかと、それを思ふと夜の目も寝られせん……」

「そんな心配はいらないさ。身に覚えの無いものは飽まで覚えが無いと云ひきればいゝぢやないか。もう今は證據裁判で昔のやうな推定裁判はしないからネ。そして其のおツ母さんと云ふのは明日からでもこゝへ通ふやうにし給へ、藥代などの氣兼ねはいらぬから……」

「有難うございます……」と云つて小山は落つる涙を拭はうともせず、「私は警察でも區裁判所でも頻りに私と先生との關係を尋ねられました、あれはなぜでございますか。此間も部長さんから、お前は會社で危険な書物を職工に配つたさうなが……と尋ねられました。私は、いゝエ危険な書物など配りは致しませんと申しますと、部長さんは、『法律と權威』といふ小本を配つたらうと言ひました。實はあの本なら鳴野さんから頼まれたので、どんな事を書いてある本だか知らないが五十冊ばかり職工に配つたのです。部長さんから危険な書物だと聞かされたので、何だかこはい物見たさに其の本を読んで見たいと思つてゐるんですが、私の手も中には一冊も残つてゐませんし、あげた友達もみんな讀まないで、どこかへしまひこんだり失つたりしてしまつたさうですから……先生の所にございますならどうぞ一冊下さいませまい

か。私は一度篤と讀んで見たいと思ふのでございますが……」

「君は警察で、其の本を職工に配つたと正直に言つてしまつたのかい？」

「はい、悪い事だとは思ひませんが正直に申しました。鳴野さんの仰しやるには、これは田原先生が翻譯した大變有益な本だから……」

「え？ 僕が翻譯したと君は警察で言つたのか。あの本を……」

小山の言葉を遮つた田原は、椅子の脚を掴みながら、からだを前に屈めた。

「えエ、さう申しましたが、あれは先生の翻譯ぢやアないんでございますか。」

田原は返事をしないで、黙つて小山の顔をぢつと眺めてゐたが、

「可愛い男だナ君は。そんな男が監獄へ入れられるやうでは世の中は闇だよ。」

「えゝ、マサカ監獄へ入れられるやうな事は無からうと思ひますが、私は裁判官の御方にハキ／＼と受答へが出来ないから、伯父を頼んで一緒に行つてもらはうと思ふんです。」

「それはいゝだらう、親類だつたら裁判所でも附添ひを許すだらう。」

「さうでございますか……」と小山は暫く考へ込んでゐたが、「先生あの晩私は松原の所で

妙な者を見たんです！」

『妙な者？　どんな者だい、それは？』

『私が松原の所へ来た時、私と摺違ひに黒い法被を着た男に出逢つたのです。本當にそれは不思議に、さッ！　と私の眼の前を通つたのです。私は其人の顔も姿もちやんと覚えてゐます。それは確かに私も先生もよく知つてゐる人なんです。しかし此事は先生にも誰にも申し上げないで、唯、私の夢か幻として置きませう。それから工場の近くの人達は火事の前に何だか破裂したやうな大きな音がしたと言ひますが、それもタンクが破裂したんだと私は言つて置きました……先生、では明日から伯父と二人で行つて來ますから、母の事を宜しく頼みます。』

小山は何度もく／＼頭を下げてとぼ／＼と出て行つた。

小山を玄關まで送り出した田原は、浮かぬ顔で藥局へ入つて行つたが、

『おい、平石、藥屋へ電話をかけてエンサン加里を一ポンド直ぐ持つて來るやうに言へ。』

臺所に居た平石は直ぐ電話をかけると間もなく自轉車で駈付けた藥屋の小僧は、柱に掛つてゐる通帳を取つて矢立の筆を動かしながら、『お宅は鹽没を能く使ひますノシ。』と言つた。

『そんなに澤山使やしないだらう？』

言ひながら田原は何の氣無しに其の通帳を手を取つて見ると……日、エンサン加里二ポンド、鶏冠石……匂、硫黄……匂といふ文字が稻妻のやうに眼の前に閃いた。田原は思はず、その使が誰だつたかを問はうとしたが、ぐツと其の言葉を呑みこんで、フィと診察室へ入つたが、（先生、あの晩私は松原の所で妙な者を見たんです。）とたつた今言つた小山の言葉を憶ひ出してがつ／＼と慄えた。

翌る日は朝から雨も降り風も吹いた。三輪崎から乗船する積りで船待をしてゐた乗客は、午前十時頃に『船は風波の爲に三輪崎へは寄港しない。』と云ふ電報が來たといふので、皆ブツ／＼言ひながら勝浦まで車を走らせた。小山も伯父と二人で三輪崎の片岡屋といふ宿で休んでゐたが、船が着かなければ明日まで延さうかと言つてゐる所へ、隣室の客が『此の天氣では、明日も明後日も船は來ないかも知れないですよ。』と注意してくれたので、若しそんな事があつては裁判所への出頭期日にも後れるからと思つて、二人はすぐ勝浦まで俵を走らせて、やつ

との事で乗船したのであつた。

紀州丸といふ三百二十噸の船は勝浦港を出て太地の鼻へ差かゝるともう木の葉のやうに揺られはじめた。まだ出港して三十分も経たないのに、胃の弱い小山は一堪りも無く胃の腑を空にしてしまつた。

船は十二時過に串本港へ入つて、そこで五時まで停船すると言つてゐたが、二時頃に天候が少しよくなつたといふので、此の航路に馴れてゐる船長は大膽にもそこを抜錨した。しかし船が潮の岬を越した時は、もう船客に生きた顔色のものは一人も無かつた。毎日の航路に慣れたボーイまでも、ボーイさん、ボーイさんと、あちらからもこちらからも金盃を請求する聲を聞かぬ風で半身を壁にもたせて兩足を疊に強く踏張つてゐたが、稍ともするとズウー、ズウーと身體がずれて仰向に寝そべるのであつた。

波はだん／＼激しくなつた。船は空中を飛んでゐるやうである。悲鳴を擧げるもの。念佛を唱へるもの。血を吐くもの。父を呼ぶ聲。母を呼ぶ聲。さながら叫喚の地獄である。若い女も年寄も、着物がまくれて、脛も露はになつて、材木のやうに右に左にころ／＼と翻弄されて

ゐる。

『苦しい！ 苦しい！』とうめきながら小山は蠶棚の縁にすがりついて危く轉び落ちるのをまぬがれた。

『これはエライ、やり切れん！』と言つた伯父は敷物に咬みつくやうにしてゐた。

『南無阿彌陀佛々々々々……』

『助けて呉れ！』

『みんな甲板へ出よう、こんな所に居ちやア沈没した時、みんな死んでしまふぞ……』

『出て行けるものか、起きる事も出来ないぢやないか。』

『大丈夫だ。しつかりしろ！』

『これ位の浪が何だ！ ブランコに乗つてゐると思へ！』

船客は苦しい聲で……しかも自分と自分を元氣づけるやうに、むやみに大きな聲で叫び出した。しかし其の聲も次第に疲れて、やがてはみんな黙つて轉がりながら悶えはじめた。

突如一人の男は丸裸になつて叫んだ。

『船長を呼べ船長を！』

其聲に勇氣を得た洋服男は叫んだ。

『ずつと沖へ船を出してしまへ！』

丸裸の男は叫んだ。

『沈みはしない！ みんな勇氣を出せ。歌を歌へ歌を！』

若いボーイは叫んだ。

『みんな上衣をお脱ぎなさい。女の方は帯を解いて成るだけ身輕になつてゐて下さい！』

『おい、ボーイ！ どうなるんだい。これは？』

洋服男の叫びを最後に、室内には又た人聲が絶えてしまつた。荷物が轉がる、信玄袋が飛ぶ。半裸體になつた男女の足と足とが打ツかる。頭と頭とが搗ち合ふ。見ず知らずの人達、それが若い女であらうが、年寄であらうが、裸體であらうが、襦袢一貫であらうが、無我夢中で、みんな眼を閉ぢたまゝ手を握り合ひ首を抱へ合ひ、足首にしがみつき、腰紐を掴み合ひながら、たうとういつの間にかみんな一つ所に團まつてしまつた。

小山は眼を開けて『伯父さん？』と叫んで周囲を見まはしたが、あたりは一面に黒い髪と白い齒と裂けた唇とが幾つもの／＼おぞましく見えるばかりであつた。

ぐツ！ と船がどつちかへ傾いたと思ふと、小山は誰かの腕が自分の首にまきついたのを知つた。息が詰るので首を横に捻ぢ廻さうとしたが腕は益々強く締めつけるばかり。其の腕を撥ねのけようとしたが、自分の両手は誰かにしつかと握られてゐる。足を踏張つてみようとしたが、其上に幾つもの人の身體が重り合つてゐるらしい。

『うーん！』と力一杯後の方にのけると、どこかでガーン……と恐ろしい響がした。ワァーツ！ と人の泣くやうな叫びが聞えた。

『伯父さん！』と云はうとしたが、急に苦しくなつて咽返つた。それは汐水を飲んだのであつた。

小山は力のあらん限り手を振り足を振り、頭を掉つた。そしてやつと首に捲付いてゐた腕がなくなり、両手兩足が自由になつたときは、もう全身はどうする事も出来ない程疲れ切つてゐた。しかし子供の時から水泳が上手であつた彼は息を詰めながら泳いでゐると、天地のひつく

り返るやうな危怪な響が頭の上でグンと響いたと思ふと、身體は何百尺も高く大空へ投上げられたやうに思った。と、同時に頭のでつべんから足の尖までスカリと眞兩つに斷割られたやうな感じがした。

『あッ！』と思つた拍子に、小山は實にはつきりと自分自身の全裸體を見た。しかもそれは今までのやうな瘠せこけた自分では無く、力に充ち血汐に溢れた美しい青年の自分であつた。雪のやうな白い肌が自分の傍に近寄つたと思ふと彼はいきなり其の可愛い人魚をしかと抱きしめた。彼は生來初めて『歡喜』といふものにぶつかつたのである。

其時彼にはもう時間も空間も無かつた。恐怖も危難も無かつた。水と陸との區別もなかつた。唯もう芳烈な肉の香が彼れの全性全靈を包んでしまつた。此の美しい一瞬間のうちに彼は新しい不可思議な世界で、健康も恢復し愛にも酔ひ情にもたんのうした。しかし彼れが今一度人間の意識に立返らうとした時、彼れの前には恐ろしい怪獸のやうな醜い顔が十も廿も、怪しい聲を立てながら呻吟きながらコロ／＼と轉がつて來た。しかもそれはみんな呪と怒とに満ちた忌はしいものばかりであつた。

彼は死物狂になつて其の怪物をはち飛ばした。そして一度其の美しい人魚の顔を見たい白い肌を抱いてみたいと思つた時、どこからとなく眞黒い怪物が飛んで來て、大きなくろがねのやうな手で小山の頭をグツと引摺んで水の底へたゞき込んでしまつた。

紀州丸の沈没！

乗客船員百七十二人行方不明！

死體漂着十二名！

田原が往診からの歸途、其の貼紙を新聞社の前で見たのは其日の六時頃であつた。

もう其時空はカラリと晴れて、唯狂暴な疾風が時々想ひ出したやうに權現山の立木を根こそぎ吹いて吹き飛ばさうとして、これでもか、これでもかと言はぬばかりに蹴とばし撥ねとばしてゐた。峰の松はビューツ、ビューツ！と妙なるなりを立て、頑張り、岩に生へた雜木は押し倒しへし倒されながら、どうしてもそこを離れる事の出來ないのだといふやうに、がつしりと

巖にしがみついたまゝ、やだア、やだア！ と頭を掉りふりわめいてゐるやうに見えた。

『恐ろしい天気だ！』と呟いた田原の眼底には、小さい木片に取りつき継りついたらまゝ吼え狂ふ浪間に捲いて捲込まれて行く脆弱ひよこい小山の身體がはつきりと浮んで来た。『先生！』と云つて自分の足に継りついて来るやうにも感じた。

『音無君、もうおやすみですか。』

『起きてますよ。どなた？』

『田原です、一寸開けて下さい。』

『あ、田原さんか。』とランプを片手に玄關へ来て掛鍵かけがねを外した音無は、『さアどうぞ。少し早過ぎると思つたが、祈禱會が済んでみんな歸つたので、』

『まだ九時頃だらう。』

玄關に外套を脱棄てた田原は書齋へ通つて、四角なテーブルの中に音無と差對ひになつた。

『實は、今晚に限つたわけでも無いが、急に相談したい事があつて、』

田原の調子は頗る更まつてゐた。

音無は何だか不安に脅かされるやうな氣もしたが、わざと落着きすまして、

『どういふ御相談ですか。』

「實はネ、僕もう醫者といふ仕事をやめようかと思つてゐるんだ。」と田原は低い沈んだ調子で、「それから五六年此の土地を離れようかとも思つてる。」

「醫者をやめる？ それは全體どういふワケですか。」

音無は寢耳に水の意外の相談に思はず眼を睜つた。

「どういふ理由といふほどの理由は無い。唯、醫者が嫌になつた。醫者といふものに使命を感じなくなつたといふだけサ。」

「あまり簡單過ぎてわかりませんが、どういふ理由があるにしろ、今更醫者をよさなくてもよささうなもんですナ。」

「君は牧師に使命を感じなくなつても、信者から頼まれれば説教もするし祈禱もするかい？」

「そんな例を持出されると返事に困りますが……」

「さうだらう？ 誰だつて職務に使命を感じなくなつて、唯飯を食ふ爲ばかりになつたら、とても辛抱してゐられるものぢやない。無論僕は人間が生活の爲に働くのを賤しいことだとは思つてゐないが、一つの仕事に使命を感じなくなり、興味がなくなつたなら、さつさと他の職に

轉じて行くがよいと思ふ。君はあのチエーホフの六號室を読んだらう、僕の心事はアレだ。僕の目下の境遇は丁度あのアンドレエ・イエフキミツチだ……」と田原は卓上に頬杖突いて、「僕とアンドレエ・イエフキミツチとは経歴が殆ど同じだ。僕も最初は兄貴の勧めで宗教を研究して牧師にならうとして同志社で勉強したもんだ。ところが途中で、農業を試してみたくなくてアメリカへ渡つて行つたが、それももうまく行かないで、たうとう家代々やつて來た醫者になつて歸つたものゝどうも僕は醫者が天職で無いと見え、今までのすゐぶん本業以外にいろんな計畫を立て、憤慨したり騒いだりした。が、今から思ふと實に馬鹿げた空想を燃やしてゐたもんだ。所が世の中には變な人達がゐるもので、其の僕の眞面目な憧れを利用して、一コベツクよこせ十コベツク貸せと云ふあのユダヤ人のモセイカのやうな男が僕を先生々と崇めるまねをして、僕からどれだけ酒代を絞つたか知れない。ところが僕は主義だとか理想だとかに夢中になつてゐて、眞に理想の爲に戦はうとする人間と其の卑しい根性の男とを見分ける事が出来なかつたのだ。僕を先生々と祭り上げて、頻りに僕の主義に賛同するやうに見せかけ、やれ、どこの學校の校長がどんな事をしたとか、やれ町政がどうだとか町長が斯うしたとか、會社の

基本金がどうだとか、種々な材料を擔ぎ込んで来て眞しやかにそれを話すんだらう。人間といふものは淺ましいもので、僕が呪つてゐる社會にありさうな又たあり得べきやうな事を話されると、すぐそれがみんな事實のやうに考へられて、一も二も無く（さうだらう現代にはそんな事が有り勝た。）と言つて、ツイそれを信じてしまふんだネ。そして演説會を開いたり新聞雜誌へ投書したりして大騒ぎをしたものさ。けれども後になつて靜に考へてみると、そんな材料を擔ぎ込んで来た男が疑はしくなる。いよく調べて見ると、そいつは僕に演説會を開かして其の會場費の上前を撥ねて一杯飲みたい爲に、有りもしない事を捏造して僕を利用したんだといふ事が解つたり、會社の内部に斯んな腐敗があるとか、どこにこんな事實があるとか、いろんな話を持込んで来て、理想の實現に汲々としてゐる僕の心を唆るんだネ。現にあの製材會社の騒ぎだつて、火事のどさくさ紛れに購買組合の賣品をしこたま持つて歸つた職工があつたといふ話だ。そんな男がさも熱心さうに僕の前で労働問題を談じるんだから、たまつたものぢやない。僕は其手に幾度乗せられたか知れない。本當に僕を理解してゐるやうに見えた男、それは僕の爲には生命を賭けても盡さうと云つていつも七首あいつを懐に呑んで、僕の家に出入して僕を

保護してゐた男であつたが、しかし其男だつてたうとう本音ほんねを吹いて、僕に七百圓の無心を吹掛けるといふ始末だ。それは馴染の女郎を受出さう爲であつた。こんな事が僕には數限りなく經驗されたので僕も今では先生々々と言はれる事がつくづくいやになつてしまつた。けれども僕の眼の覺めなかつた頃は、みんなそれが主義に忠實な熱心な男のやうに見えたのサ。所がふとした事から、近頃僕は其の連中がみんな一コベツクくれ！と手を突出すジューのモセイカだといふことを知つたのだ。だから、君。僕はもう、玉石共に捨てようと思ふんだ。それは僕の本意ではないが……』

田原はほつと太息を吐いて腕をこまぬいてゐたがまた靜かに口を開いた。

『君！ 千八百七十六年の三月三十日に、ペテルブルクのカザン寺の前で、男百三十一人と女三十四人のアナキストが赤旗を打振つて大騒ぎをした事を知つてゐるだらう。あの赤旗事件から露國の政府は實に殘酷なほど嚴重な壓迫をアナキストに加へたもんだ。言論の壓迫は勿論有らゆる方法で彼等を虐めつけた結果翌年になつて有名な百九十三人事件が起つたのだらう。僕はその虐められた人々を本當に可愛さうだと思ふ。如何に主義に忠實な青年達でも、

あらゆる自由を束縛されて監視されては堪つたものぢや無からう。」とキツパリ言葉を斷つて、『僕の宅へも、ロマノフ家の迫害から逃げた連中のやうな人達……ライフル銃を肩掛けて放火犯人を捕縛して行く警官を見ては、すぐ自分も今にあの放火犯人のやうに縛られて暗い所へたゞき込まれるのでは無からうかと想像する追跡妄想狂のイヴァン・ドミトリツチのやうな男が何人もく逃げ込んで来たことがある。僕はさういふ連中を出来るだけ保護もし同情もした。丁度あの院長アンドレエ・イエフキミツチが六號室へ行つて、イヴァン・ドミトリツチに同情して其の話を聞いてゐるうちに、たうとう其の哲學に感心してしまつたやうに、僕も其の連中と同じ哲學を信するやうになつたのだ。そして僕は自分を彼等と同主義だと思ひ、彼等も僕も同じ主義者だと思つてゐたのだが……僕は段々と自分の説と彼等の説との相違點を發見しはじめた。第一僕は絶對の唯物論者になり得ない、僕はどうしても汎神論者である。いはゞ唯物論に對する唯靈論者である。それから僕だつてやつぱり彼等と一緒に私有財産制度を改良したいと思つてゐる。けれども物には總てに進化の行程があるんだから、其の理法を無視して一足飛に現状から理想の世界へ入らうとするのは無理だと思ふ。所が、僕の所へ逃げ込んで来た

連中は餘りに急激な理想を抱き過ぎてゐた。彼等は思想した事は直ぐ實行出来ると思つてゐるんだ。だから僕が戀愛自由論を唱ふるとどんな不しだらな事をしていゝものだと誤解する。僕が家庭破壊論を書く、すぐ彼等は僕の家庭ではどんな事をしたつていゝのだと迷信するんだ。僕が家庭破壊を主張するのは因襲に囚はれた悪家庭を破壊して新しい美しい家庭を建設せよと云ふ進化の法則に遵つた議論なんだが、彼らはそれを誤解して片ツぱしからみんな僕を裏切つてしまふんだ。彼等は何と言ふ？（田原はけしからん、財産私有制度を非認しながら金を貯める。自由戀愛論を唱へながら他人の戀を妨げる、家庭破壊論を書きながら妻君を愛したり子供を大事にする。平等主義を唱へながら、我々同志が百日の換刑に行くのを見ながら其の罰金四百圓を出してやらないで、妻君の妹にオルガンを買つてやつた。）まアこんな調子で遂には足を舉げて僕を蹴つたんだネ。で、僕はモセイカのやうな乞食根性の男から逃れて、又たイヴァンのやうな男の哲學に囚はれてしまつたのだが、其の爲に僕は一方ならぬ苦痛を背負はされたもんだ。言ふまでもなく僕の哲學なり思想なりには、イヴァンの哲學や思想と一致した點もある。しかし全然同一ぢや無い。今は全く反對の位置に立つてゐるのかも知れない。しかし

音無君、そこが運命だ。僕は今あの六號室にある何とかいふ市長のやうな男に、イヴァンと一緒に六號室へ閉ぢ込められるばかりか、兵隊上りのニキタのやうな荒くれ男に、床の上に打めされて、血へどを吐いて往生せねばならぬ終局を見るかも知れない。」

田原は無然として音無の顔を見てゐたが、つめたい茶を一口飲んで、

『さう／＼あのイヴァンは面白い事を言つた。ダイオゲネスは桶の中で日なたぼつこをしながら、橙やオリーブを食つて太平樂を並べてゐた。しかし彼の男をロシアへ伴れて来て見ろ、直ぐに風邪を引いて凍えて死んぢまふだらうつて。本當にさうだ。ロシアのやうな革命の本場でこそ、ガボン長老のやうな男も出、バルヂイナのやうな女も出たんだが、我々日本人がそんな人の傳記を読んで、すぐそんな人の眞似をしようと思ふのは、それはダイオゲネスを寒い北の國へ伴れて来て桶の中に入れて路傍に轉がして置くのと同じ事さ。(王様あなたは私の日向ぼつこの邪魔になるから、そつちへどいて下さい)なんて言ふまでも無く、とうの昔に凍えて死んでゐるだらうよ。我々國情の違ふ日本人が、ロシア人やドイツ人のまねをしたつてそれは駄目だ。實行どころぢやない。そんな小説を讀んでも、クロボトキンの著書一冊讀んでも直ぐ凍

えて死んぢまはねばならない運命に陥るんだ。僕なんかあのイヴァンのやうな人達に同情して、あの人達を食客に置いた事だけで、もう恐ろしい運命が身の上に落かゝつて來さうに思はれる。今の場合僕は、あの人達と僕とは思想の根柢が違ふといふ事を、どれだけ強く主張した所でそれは駄目だ。アンドレエ・イエフキミツチが、(俺の思想はイヴァン・ドミトリツチと全然同一ではない)と叫んだ所で市長はそれを取上げないで無理に六號室へ閉ぢ込めてしまつたやうに、僕もそれと同じ運命に陥るかも知れない。まア總ては運命サ。僕は今までの事を考へると、みんな思ひも掛けない意外の結果になつてゐるが、儲それは人間の力で何ともする事の出來ない事だから仕様が無い。彼の原稿用紙の一件、成程あの脅迫状は東君が奪還してくれた。しかし警官の頭に鑄込んだ其の印象といふものは、どうしたつて残つてゐる。僕も最初の程はあの脅迫状を書いた男を怨んだ、軽卒な男だと憎みもした。しかし靜に考へると、實際あの當時、劇場で大演説をやらうと決心した頃の僕達の頭では、あの津本といふやうな男が心から憎かつたので、口にも言はず筆にも書かなかつたが、腹の底では彼の脅迫状に書いてあつた以上の事を考へてゐたかも知れない。だから僕はそれが爲めに、どんな迫害が來てもそれを甘んじ

て受けるが當然だと思つてゐる。それからあの會社の火事だ。よしや、あの火事が失火であつたにしろ放火であつたにしろ、また誰かゞ僕の藥局から藥品を盗み出して行つて、怪しからぬ事をしたにしろ、それを僕が全然知らぬ存ぜぬと云ひ張つて逃れようとするのは悪い。あの火事の起つた時、僕の頭には自分の家が焼ける時のやうな悲しい感じが無かつた。僕はあの時石塚君と二人で裏二階の物乾から見てゐたが、下の路地を走る人が『どうせこんな事になるだらうと思つたよ。』と云ひながら走つた其の聲をはつきり聞いた。其時僕の心でも『さうだ』と其の闇の中の聲に調子を合した。それはやはり火事を喜ぶ心だつたのだ。すると放火犯人と同じ罪を負はねばならない筈ではないか。基督を十字架に磔けたポンテオ・ピラトも、それを賛成した民衆も基督を殺したのだといふ罪狀に區別は無いんだから。それからネ音無君！』と田原は潤んだ聲で、『僕はあの小山伯父甥の最後をふびんに思ふ。あの正直なインノーセントな男——神様のやうな男を波の中に埋めて殺したのは誰の責任だと君は思ふ。警察でも裁判所でも無い。それは全くあの時のストライキを賛成した者全體が其の責任を帯びなければならぬ筈だ。僕は小山の死に對して自ら十分の責任を負ふ。殺されてもしかたが無いと思ふ。今まで

僕は妙に官憲を白い眼で見てゐた。しかし僕の宿命觀から言ふと、今晚警官が僕の所に來て、其場で僕を殴り付けてアンドレエ・イエフキミツチのやうな残酷な目にあはされても僕はいたしかたが無いと思ふ。それは原稿用紙の一件から、火事の事から、それから君は知らないだらうが、僕の翻譯した法律と權威——あの祕密出版物を鳴野君は小山の手を通して會社の職工たちに配つたらしい。正直な小山は何も知らずに警察でそれを饒舌つてしまつたのだ。そんな材料が重なり／＼警官の眼の前に横はつて來る時、其の警官が僕に對して危険、惡漢、あらゆる惡名を以て僕を縛りに來ても、それは彼等の爲すべき事を當然になすので決して憎むべきではない。唯さういふ迫害する者と迫害せられる者とが此の世の中に生れ合せて一つところに落ち合はねばならないといふ其運命を悲しく思ふだけだ。しかしそれは、どうしたつて逃れツこの無い事だから……」

段々と田原の話に引込まれて行つた音無は片唾を飲みつゝ、

『御意見は判りました。徹底した宿命説ですが、どうしても醫者をやめねばならないと仰しやるには、もつと其の醫業に對しての深い理由がございませう。單に使命を感じないと仰しやる

だけで無くツて……』

『恐ろしくなつて薬をもる事が出来なくなつたのサ。アンドレエ・イエフキミツチは疑つた。三十人の入院患者が三十五人となり四十人となり、日一日、年一年毎に患者の数は殖える。が此町の死亡率も病人もちつとも減りはしない。すれば、醫者の薬はなほしてゐるのか、殺してゐるのか……』と田原は苦笑しながら、『病人が醫者の所へ來るのは病氣をなほしてもらひたいからだ、此の薬なら此の病氣に必ずきくといふものが果してどれだけあるか。大抵きくだらう？ 位な薬を飲ませるので、それでなほるのは、そりやア薬でなほるのでは無くツて病氣自身になほるのだ。自然になほるのサ。砂糖水を飲ましてもなほる病人にまで、舌を出さしたり、眼を剝いて見たり、脈を握つたり、胸を叩いたり、人間の身體を翫弄物にした上に聴診器や金時計で嚇しつけて高い薬價や診察料を拂はせるなんて本當に地獄行きの沙汰だよ。アンドレエ・イエフキミツチは、醫者の丸薬や水薬で人間の苦痛がなほるもんなら、哲學も宗教も不必要だと云つたが、それほどに言はなくとも、新薬が出來ても、ますく病人の殖えて行く事實を知つたなら醫者は仁術だなんて言はれた義理ぢやアない。』

(290)

田原は次第に興奮して段々と其の語調が荒くなつて來たが、

『僕はいふ事を云ふから睨まれるのだ。』と調子を一轉してからくく笑つて、

『ぐづ／＼して六號室へぶち込まれない前に、早く逃げ出さう。そして此の土地を離れてどこかへ行つてしまはうかと思ふ。』

『能く解りました、』と音無は二つ三つうなづいて『お説はマダ十分にのみこめない點もありますが御決心は能くわかりました。僕達がなまかな理窟を云つても思ひ留るあなたで無いから何にも申上げませんが、奥様は御承知でございませうナ。』

『承知も不承知も無い、斷行すると云つたら斷行するまでです。』

『それは亂暴だ！』

『亂暴は認める。だが、思ひ立つたらずぐ咄嗟に實行するが僕の氣象だ。そこで實は君に頼みに來たのだ。僕は時機を見計つてとにかく一旦シンガポール邊へ行かうかと思ふ。』

『時機？ それはいつ頃でせう？』

『それは盜人の夜來るが如しサ。其の時機はいつ來るかわからない。今夜か明日か、又た來年

(291)

「かそれは明言出来ないが……」

「では場合によつては明日にでも？」

「さうだ、明日にでも實行するか知れない。」

「それはあまり早急過ぎる！」

「突然聞く君には早急だらうが、僕にして見れば今此事を君に話すまでには散々熟考に熟考を重ねたのだ。決して一時の氣紛れや客氣に逸つたのでは無い。僕だつて此の町では醫者として患者に尊敬され、妻子と一緒に楽しく暮したいと思はない所以は無い。放膽な空想論はしても理窟は理窟、人情は人情。可愛い、女房子を振捨て、天涯萬里に漂泊するのを快とする齡でも無いし、昔の聖者たちのやうに、人間の大きな艱みを抱いて世をのがれるわけでも無い。それには説明出来ない或る威力——宿命と云はうか、何と云はうか、或る大きな力が僕を引摺つて行くので、今までの僕の遭遇した總ての事件が、みんな僕をそつちへと追ひやるんだ。それには抵抗する事も楯を突く事も出来ない。僕だつて未練は十分にある、妻子や周囲の事情に後髪を牽かれないでも無いが、よし一時思ひ止つて見た所で、斷末魔にカンフル注射や酸素吸入をす

るやうなもんで、此の宿命をどうする事も出来ない……」

「能く解りました。さう御決心なすつたものを、もう動かす事は出来ないから何とも申し上げませんが、シンガポールといふのは何かあてどもあるんですか。」

「まんざら何のあてもなく出かけるわけでも無いが、まア當分シンガポールに留まるか或はもつと遠走りするか、それもきまつてゐないのだ……ボンベイには以前三年程ゐた事があつたのだから……」

「それでいつ歸られます？」

「さア。三年で歸るか。五年で歸るか。或は永遠に歸らないか。何だかこれがお名残で、歸つて来る時は骨壺に入つてゐるやうな氣もする。それで實は後々心残りの無いやうに、今晚君に後事を頼みに來たのだ。」

餘りに眞剣らしいので音無は不思議に思ひながら田原を見ると、其の眼には一杯の涙が溜つてゐた。田原は自分と自分を勵ますやうに膝をたゝいて、

「かう決心はしたものゝ唯何となく氣に懸るのは、俗に男子闕しきつを跨ぐれば七人の敵ありといふ

言葉のやうに、僕の周圍にも無數の敵が始終僕を遠巻にしてゐて、いつなん時そいつらが飛びかゝつて来て此の喉を締めるかも知れないやうな氣がする。イヤ眞實僕にはそんな豫感がある。かうなると六號室のイヴァン・ドミートリツチ然として来る。だが、何だかそんな氣がしてたまらんから……』

音無は急に悲しくなつて黙つて俯向いてしまつた。

『音無君、あの新聞も今では一杯々々に立行くが、石塚君一人ではむづかしいから僕のゐない後は君の助勢を頼む。四月になると太地家へ養子入籍の手續きを済して、須基子さんとナオミさんと上京した後の隠居の世話や家事の取締をする事になるんだが、何しろ年が若いから萬事につけて君の面倒を頼む。それから堅爾君もあアやつて家庭を作つたのだから、少し變則だが、まあ安心、最後に僕の一家だ。妻は御承知の通りの女、諦めの悪い女と云ふでは無いが、僕がゐなくなつたら淋しくもあらう。愚痴も出よう。勿論信仰の無い者に宗教を強いても無効だが、どうか自發的に信仰の出るやうに導いてもらひたい。それから子供だが……』

田原はさすがにホロリとして聲をとぎらした。

『おほきくなつたらさぞ僕を怨むだらうが、かういふ運命の父を持つたのが因果と諦めてもらふ外は無い。まだ六歳と四歳で東西もわからんが、僕も今すぐ彼等が路頭に迷ふやうな事をしては無い。どうかかうか、やつて行けるだけの貯へもしてある。君も知つての通り僕には金持の親類が何人もある。僕の甥には百萬長者もある。兄貴だつて何十萬の財産家だ。しかし僕はさういふ親類の金持があるからつて、それをあてにさせる事は望まない。僕が何とか一つ蹴つまづいた時は、親類中は御互ひに撥ねつけ合ふにきまつてゐる。そりやア普通の人間達のやうに、因襲に囚はれてやたらに先祖の位牌を有難がるやうな連中ならいざ知らず、僕の親類はみんな一風も二風も變つてゐて、そんな因襲から解放されてゐるから、僕が僕の勝手に遠方へ行つたからつて、それに同情して僕の家内を世話するやうな連中は一人もゐないだらう。(ほつとけ。ありやア吾が勝手に外國へ行たんぢやないか。)と云ふだけだらう。しかし、僕はそれが正當だと思ふ。何も僕は僕自身の運命に服従するんで、彼等には彼等自身の服従すべき運命が別にあるんだから。それをごつちやにしちやアいけない。だから僕がゐなくなつた後の事を、親類達にどうかうしてもらはうとは思はない。だから親類中がどんなに冷淡であつても決

してそれを怨まないやうに妻に言聞かせてくれ給へ。世話をしない者が悪いので無くて、頼みに行く方が間違つてゐるんだから……甥の東家と、橋屋の友木とは、ちよいと面白い氣象だから何とか世話もするだらう。しかし僕はそれにさへ深い頼みは掛けない。なアに世の中の事は何とかなるやうになるものサ。金持の親類を恃にするのは砂糖壺の中にある砂糖を外から舐めるやうなもので、あるにはあるんだが幾ら舐めたツて甘くも何ともない。萬一にも少うし甘いと思つたら、それは萬々分の一の落こぼれサ。』

田原はまたハハ、、と力の無い高笑ひをした。

音無は默然として腕をくみながら聞いてゐたが、腸の底からにじみ出してゐた溜涙をどうすることも出来なかつた。

其の翌朝音無は朝飯をすますと直ぐ田原を訪問したが、もう玄關には五六人の患者が詰めかけて田原は忙しさに診察室から藥局へ出たり入つたりしてゐた。

『まア家にゐてくれてよかつた。』と心の中でうなづきながら内玄關の所へ行つて見ると、そこで哲子と丈太郎とは仲よく遊んでゐた。

『丈太郎さん、お葬式ごとをしませうネ。』

『うん、誰が死ぬの？』

『バ、さんが死ぬのよ。』

『うゝん、わいきが死にたいよう。ようねえさん！』

『ぢやア、お死になさい。』

『うん、わいき死ぬよ。』

丈太郎は小さな眞黒なものを持つて来て哲子の前の木箱の中に入れた。音無は何氣なく覗い

て見ると木彫の骸骨である。

『これが丈ちやんの死んだのかい？』

『うん、わいきの死んだの。これからお葬式をするから小父さんも手傳つておくれよ。』

『丈太郎さん、』と哲子は可愛い顔を傾げながら、『それよりかバ、さんもマ、さんも、あんなもわいきもみんな一緒に死んだとしようネ。』

『うん、さうしよう。一緒に死んだと。面白いナア。』と丈太郎は直ぐ同意した。

丈太郎はまた二つの骸骨を持出して來た。哲子は、

『わいき今日は死にたい事無いんぢやけど、マアしかたが無いワ。』と云つて小さい骸骨の一つを自分の分として箱へ入れつゝふと音無の顔を見上げて、『小父さん、重いから手傳つておくれエ。』

無邪氣な子供の遊びだが、場合が場合だから、何だか蟲の知らせであるやうな氣がして、音無は思はず顔を曇らすと、

『ヤア、小父さんが泣いてらア。』と丈太郎はニコ／＼しながら、をかしいナ、小父さん、こ

りやア嘘の葬式ぢやのに。』

『またお葬式ごとかい？』と坐敷の縁側から開き戸を押しながら出て來た貞子は、『あ、音無さん。どうぞこちらへ。』

音無が八疊の真中へ靜に座つたとき田原は、『やア、昨晚は失敬した。』と言ひながら手術着の袖をまくりつゝ入つて來た。

『失敬しました。』と音無は一寸頭を下けたが、其の瞬間に昨日までの田原家と今日の田原家とはまるで違つた家のやうな感じがした。なぜだらう？ と音無は自分の眼を疑ふやうにキョロ／＼と室内を見廻したが、田原はニヤリ／＼と笑ひながら音無の顔を眺めてゐた。

『さうか。』と音無は頻りにうなづきながら、先づ壁を見、次に硝子戸のはまつた書棚を見た。壁には此間まで掛つてゐたクロボトキンの肖像もマルクスの顔もカアペンタアの寫真も見えない。書棚には昨日までキラ／＼と背文字を光らせてゐたマルクスやラサールなどの著書が一冊も見えなくなつてゐる。

『偕は、いよ／＼本當になるのだナ。』と思つた音無は胸がドキン！ とした。しかし田原は

別に平常に變つた顔色も見せず、新聞や雑誌の話をしてゐたが、急病患者があつて俵で迎へに來たといふので、アタフタと出て行つた。

音無はそれとなく貞子の心に探りを入れて見たが、ちつとも變つた様子が見えなかつたので、安心して久々で太地家を訪問しようと思つて町を権現の方へサツサと歩いてゐると、向ふから江戸腹掛の井へ何だか一杯膨ませた若い男が、ニコ／＼笑ひながら來るのに出逢つた。

『よう、音無君、僕はこれから君の所へ行かうと思つて……』

『鳴野君か、すつかり労働者の姿になつてゐるもんだから……』

『姿ばかりぢや無い、もう此節は心も肉體もすつかり労働者になつてしまつたのだよ。』鳴野は肩を揺りながら言つて、『御宅へ伺つてもいいだらう？　これから……』

『あゝ、行かう。僕も別にどこへ行かねばならぬといふ事は無いんだから。』

鳴野は何だか氣忙しいやうに先に立つて歩いた。そして二人は牧師館へ行つて一緒に食事をしたが、鳴野は急にゐすまひを直して、

『音無君、僕は今日君に謝罪に來たんだよ。』と言つて暫く俯向いてゐたが、『僕はもう斷然筋

肉労働者になる。今までのやうに社會だの政治だのと言つてノラクラ遊びながら大言壯語してゐたツテ詰らないといふ事を知つた。僕は嘗て君に失敬な事を言つた。あの頃の僕の頭は唯物論で固められきつてゐたが、僕は其後いろ／＼と考へた。考へた結果は人間といふものゝ餘りに小さい事を考へつけたのだ。無限の宇宙！　それは何といふ恐ろしい言葉だらう？　吾々は此の悠久な宇宙の間に産れて來て、たつた五十年六十年生きる爲に、一體何をしてゐるんだらう。いがみ合つたり引搔き合つたり、まるで猛獸のやうに悲しい生活をしてゐるぢやないか。我々は此の不整頓な駄獸の群のやうな現代を改革しよう向上せしめようと言つて、やはり駄獸のやうに猛獸のやうにいがみ合つたり蹴飛ばし合つてゐるんだ。それではいつまでたつても駄目だ。先づ空吠を止めるんだネ。付元氣で大言壯語する事をよすんだネ。沈黙して沈黙して全世界が全く靜まり返つた時、はじめて總ての問題が解決するんではなからうか。犬の喧嘩だつて吠え合つてゐるうちは虚勢だ。本當に咬み合ふ場合には聲なんか出しはしない。社會改良だの労働運動だのといふものもそれと同じことで、演説だの示威運動だのと云つてゐるうちは、お祭り騒ぎさ。僕はもう、そんな空騒ぎから逃れた。世間の奴らは僕を卑怯だとか變節したと

か云ふだらうが、何と云はれたつて僕は構はない。僕は浅薄な空威張りを思ひとまつた。僕はさう思つたからいろんな下らない物を川へ投げ捨てた。書籍も焼棄てた。そして沈黙して一生懸命に働いて見る決心をした。根かぎり働いて働いて働き通して見ようと決心した。それが罪業の深い僕のなすべき大きな贖罪だ！」

鳴野は凜然としてかう言つた。黙つて聞いてゐた音無は問うた。

『罪業？ 君の思想でも罪といふ事を感じる事が出来ますか。』

『僕は今まで總ての罪惡を總て社會組織の不完全から起るものとしてゐた。道德といふものは滋養物を食はす事だといふフオイエルバツハの説を本氣に唱へてゐた。又た宗教なんでものを頭から馬鹿にしてゐたものだが近頃はさう思へなくなつた。僕は僕自身が窃盜罪にも強盜罪にも、殺人罪にも相當する大悪人だといふ事を知つた。……僕ひとり僕が唯ひとり引受けねばならない罪がある。其の大きな罪を發見した僕には、もう今までのやうな態度ではゐられなくなつた。僕は大きな罪惡を身に引負うてゐる。だから僕は一所懸命に働いて、眞面目に残る半生を送つて一切の罪を贖はうと思ふ。』と言つた鳴野は腹掛の井から一冊の小さい和綴の本を

出して、『こゝだよ今僕の願つてゐる所は……』

音無は鳴野が聞いて自分の眼の前に差出した所を読んでみた。

サラニ餘ノカタヘ心ヲフラズ一心ニ佛助ケタマヘトマウサン衆生ヲバタトヒ罪業ハ深重
ナリトモカナラズ彌陀如來ハスクヒマシマスベシ。コレスナハチ第十八ノ念佛往生ノ誓願ノ
トコロナリ、カクノゴトク決定シテノ上ニハ寢テモ覺メテモ命ノアランカギリハ稱名念佛ス
ベキモノナリアナカシコ〜

『さうだ、重きを負へるもの我に來れと基督の言つたのもそこだ。』と音無は眼を閉ぢて考へ初めた。そして昨晚田原の話した其の話のどこかに鳴野の姿がちらついてゐるやうに思はれてならなかつた。

(よしや、あの火事が失火であつたにしろ放火であつたにしろ、また誰か僕の薬局から薬品を盗み出して行つてけしからん事をしたにしろ……僕はあの小山伯父甥の最後をふびんに思ふ。あの正直な神様のやうな男を波の中へ埋めて殺したのは誰の責任だ……)

音無の頭の中に其の會話の節々が斷續して繰出された時、眼の前に恐ろしい光景がフィルム

となつて現はれた。

(ヤツつける!)と叫びながら闇の中をスタ／＼と濱の方に駆けて行く憤怒に燃えた男の姿。熊野灘は荒れに荒れてゐる。恐ろしい響と共に、大きな紀州丸は海底深く沈んでしまつた。

助けてくれエーと叫びながら浪間に浮きつ沈みつしてゐる瘦せこけた小山の姿が見える。しかもぺと／＼に濡れて肉體にびつたりと捲付いて居る着物の縞柄まではつきり。

(さアもツと大きい盃を持つて来い! 歌へ／＼踊れ／＼。)と云つて酔狂つてゐる鳴野の姿。鳴野の懐からバタリと疊の上に落ちたものがある。それは白鞘の九寸五分だ。

音無は身の毛のよだつのを感じた。こんな幻覺の消えないうちに、たとひそれが、(罪業ハ深重ナリトモカナラズ彌陀如來ハ救ヒマシマスベシ……)と改悔の文を唱へてゐる鳴野ではあつても、其の閉ぢた眼を開いて、ぢかに彼の顔を見る事が恐ろしいやうに感じられた。

『ぢやア君、失敬するよ。』と言ふ聲に驚いて眼を開けて見ると、そこには骨格逞ましい頼も

しげな鳴野が生々した輝くやうな眼でちつと音無を見詰めてゐた。

六月初であつた。音無が二階の書齋でツルゲネーフの『父と子』に讀耽つてゐると、玄關で『今日は……』と聞き慣れない聲がした。誰だらう？　と思ひながら降りて行つて見ると、硝子戸の外には色の浅黒い、四角な顔の大男がハンケチで汗を拭きながら立つてゐた。

『どなたです？』と戸を開けながら聞くと、

『僕は警察署の樽本です。』と言ひつゝ名刺を差出した。

『さうですか、どうぞお入り下さい。何か御用事ですか？』

『一寸お尋ね致したいのですが、東京から赤穂といふ男が見えませんでしたか。』

『赤穂？　知りませんですな、そんな人は……赤穂何と言ふお名前ですか。』

『赤穂初といふ男で、其男が労働者の福音といふ秘密出版をやつて、紀州へ逃げて来たといふ事なので……』

『労働者の福音？　そりやア僕とは全く関係の無い書物ぢやありませんか。』

『だつて福音といふんだから、基督教の事を書いてあるんぢやないでせうか。』

『違ひますよ。それは社會主義の書物でせう？』

『さうかも知れません。まア――基督教と似寄つたものサ。』

言ひながら樽本は坐敷をぐる／＼見廻してゐたが、『やア失禮致しました。』と言つて出て行つた。音無は變な事を言ふ男だと思ひながら書齋へ引返したが何となく氣が／＼りでならないので、直ぐ田原の家へ出かけて行つて樽本の訪ねて来た事を話すと、

『うん、其の書物は二三日前に僕の所へ送つて来た。別に大したものでも無いが、同盟罷工の事を書いてあるので發賣禁止になつたんだらう。』

『秘密出版ぢやア無いのですか。』

『なアに、秘密出版にする程のものぢやア無いサ。』

『さうですか、しかし名前も何にも知らない赤穂君が僕の所へ來てゐないかツて言ふのは、どうしたわけでせう。』

『多分僕の所へ來てゐないかと思つて、遠廻しに君の所へ尋ねに行つたのかも知れないよ。』

『さうでせうか、では其の赤穂君が来る筈なんですか。』

『來やしないだらう？ 僕は近頃あの連中と殆ど通信しないでゐるんだから。』

話してゐる所へ覺也が入つて来て、『先生、僕は今警察へ喚ばれましたよ。』と言つた。

『警察へ？ どんな事？』

『納本が着かないと言ふんで……』

『納本をしなかつたのかい。』と田原は疑ぐるやうに覺也の顔を見た。

『納本は毎號僕が帶封を書いて、必ず發送してゐます。それなのに、どういふものか、内務省

へも縣廳へも検事局へも本月の廿日から廿五日まで六日分が届いてゐないといふんです。』

『不思議だネ。それは？ 君の方では間違ひなく發送したのかい。』

『えゝ、間違ひ無く發送しました。多分何かの行違ひでせうよ。』

『六日分も未着つていふのは不思議だネ。』

田原は頻りに頭をかきつけてゐたが、何か思ひ當る事でもあるやうに、

『石塚君、近頃掲載差止命令が來やしなかつたかい。』

『一昨晚の二時に一つ來ました。』

『どんな記事の？』

田原の顔は色めいてゐた。

『なアに、何でも無い事らしいのでした。中村、根本某々の犯罪事件は豫審中に付新聞紙に掲載すべからずと書いてあつただけで、それが、どんな事件やら、何をしたのやらさつぱりわからないんです。』

『え？ 中村も根本も……』

田原はひどく驚いた様子であつた。

『先生は其の事件を御承知なんですか。』と覺也が問うた時、書生の平石が次の室から、

『石塚さんに此の御手紙を……只今新聞社の小使さんが持つて参りました。』と言つて鼠色の封筒に入つた一通の手紙を疊の上に措いた。

覺也は『區裁判所からだ……』と呟きながらそれを披いて、取り出した美濃罨紙を疊の上に擴げると、それには、

檢秘第五號

新聞紙掲載差止命令中一部解除通知

曩ニ掲載方差止タル事件ニ付左ノ事項ニ限り其掲載方ヲ許ス

中村、根本初メ男七名女一名共謀シ、英領新嘉坡ニテ祕密出版ヲナシ過激ナル行動ヲナサントシタルコト發覺シ右八名ニ對シテハ既ニ起訴セラレ今ヤ豫審中ニシテ其内容ハ勿論公證スルコト能ハザルモ既ニ犯罪行爲及ビ嫌疑者ノ犯意明確トナリ其以外ニ捜査及ビ起訴セラルベキモノナシト見込ム

右通知ス

とあつた。田原は最後の『其以外ニ捜査及ビ起訴セラルベキモノナシト見込ム。』と云ふくだりを二三度讀返して頻りに軽くうなづいてゐた。

音無は田原の家を出た足で、信者の家を二三戸訪問して歸つたか何だか田原の事が氣に懸つ

てたまらなかつた。

寢室へ入つたがもう初夏の温氣うんきに汚水を離れた蚊が、ブーン、ブーンと二羽三羽襲つて來るので、どうしても眠つかれなかつた。で、ランプに火をつけて本棚の小説を四五冊枕もとへ投げ出して置いて、蒲團の中へもぐり込んだまゝ右の手を伸して、ハア／＼と小さいあくびをしながら、そこにあつた小説を一冊手探りに探つて顔の上に持つて來て見ると、それは木下尙江の『乞食』であつた。

白ツばい表紙に印刷した清朝初號活字の『乞食』といふ字を見た時、音無の頭には直ぐ中村の顔がアリ／＼と見えてきた。

それは前の年の秋の初であつた。音無は此の『乞食』といふ小説を書店で買つてそれをもつて田原の家を訪問すると、入口の所に立つてゐた田原が、

『おう、音無君、丁度いゝ所へ來た。今ネ、東京から來てゐた中村君が、明日シンガポールの方へ立つので、お名残に熊野川の模型を少し見せようと思つてゐる所だ。』と言つて、ニコニコ笑つてゐた。

『熊野川の模型ツて何ですか？』

『全體を見せる事が出来ないから、一寸川口だけ見せて、それで我慢してもらふのさ。』

『さうですか、お供しませうか。』

『行かう、薬屋の中口も来るんだし、大學に居る親類の男も一緒に行くんだ。薬屋と醫者と牧師……ちやあんと道具は揃つてるんだよ。』

音無が中村と親しく話したのは此時であつた。一同が舟に乗りこんで舟夫の來るのを待つて居る間に、中村は音無の手に提げてゐる『乞食』を見て、

『それは木下君の乞食でせう？』と問うた。

『えエ、さうです。今買つて來たばかりで……もうお讀みになりましたか。』

『木下君から贈つて來たが、それは君、トルストイズムだよ。』

『さうでせう、彼の人の書いたものですから……』

『もう君、トルストイアンでもあるまいぢやないか。今頃……』

中村は聊か音無をさげすむやうな調子で言つたのであつた。

音無は其の本の表紙を見詰めてゐたが、其の當時中村の言つた言葉が一々記憶の淵から浮み出て來た。そして其時の事をあアであつたかうであつたと繰返し繰返し考へてゐるうちに、うつ／＼と眠つてしまつた。

ドンドン！ ドンドン！ と厳しく表戸を敲く音がしたので、音無はびつくりしてはね起きて、『どなたですか。』と言ひながら寢衣のまゝ玄關の戸を引開けて見ると、マダ一度も會つた事の無い脊廣姿の男が、つツと中へ入つて來たと思ふと、昨日白くなつたばかりの巡察服が三つも四つもどか／＼と押込んで來た。

『やア、昨晚大層夜更しをしましたので朝寢坊を致しました……清潔法の検査ですか。』

言葉の終らないうちに、脊廣服の男は一枚の名刺を音無の前に差出して、

『大審院の命令で一寸御尋ね致したい事がございまして。』

『大審院？ どんな御用で？』

言ひながら音無は其の名刺を見ると、五號活字で『検事田村周作』とあつた。大審院とは恐

らく田村検事の口から出任せに言つた言葉であつたらうが、音無の境遇と大審院とは餘りに懸隔が甚だしかつたので、音無には其の言葉が何かの間違ひだらうとしか感じられなかつた。

『清潔法の検査ぢやア無いんですか。』

言ひながら外を見ると、そこにも五六人の白い洋服が立つてゐた。

『赤穂君がお宅に来てゐませんか。』

検事は靜かに尋ねた。音無の心は此時空虚を打つ人の心を嘲笑せざるを得なかつた。

『赤穂君？ 昨日も樽本刑事が其のお方の事を尋ねましたが、私はそんなお方の名前も知らないんですが……』

『一寸お宅を調べさせていただきます。』

『さあ、どうぞ御調べ下さる。』

音無は何心なくかう言つてしまつた。けれども、どうしたものか、餘り總てが意外であつたから、驚く暇も腹の立つ餘裕も何にも無かつた。

検事は巡查を指揮して、一人は表の入口に立たせ、一人を裏の出口へ立たせた。それから検

事は五人の巡查を率ゐて先づ二階の寢室と書齋とに上つて行つた。音無は下の室の雨戸を引明けて置いて二階へ行つて見ると、巡查は書棚の前に立つて手々に五冊十冊づゝの書籍を引出して、其のページの一枚々々を調べてゐた。

この有様を見た音無は自分の心の中で、つめたい皮肉な笑聲を聞いた。

『赤穂君は、そんな書物の間には居ませんよ。』

音無はさう言つて、ニコ／＼笑ひながら検事の顔を見た。

『若し、御通信をなすつてらッしやるかも知れませんか……』
言つた検事の顔はまじめであつた。

『あア、さうですか。』と言つて音無は窓わくの所に腰を掛けて検事や巡查のする事をちつと見詰めてゐるうちに、突然『家宅捜査！ 家宅捜査！』と心の中で叫んだ。しかし全體何の爲に巡查の七人も来て、こんな大騒ぎをするのだらうかと思ふと、それが途方も無い勘違ひから來た滑稽では無からうかといふやうな感じさへした。

一同は書物を一通り調べた。それから古い手紙を一々讀み初めた。手帳類を見た。押入の中

の蒲團から行李からありとあらゆるものをすつかり調べた。

『これは何の爲に使ふものですか』

一人の巡査は小さい箱の中にあつたカードをひねくりながら言つた。

『それはフランス語の復習カードです。』

『カード？ 花合せのやうなものですか。』

『いえ、違います。言葉を忘れないやうに書いて置くのです。』

『これは何の薬ですか。』と別の巡査が訊いた。

『それは薬ぢやありません、ギブスです。』

『ギブス？ どんな事に使ふのですか。』

『なアに、一寸いたづらをして見たのです。』

『いたづらを？ どんな事につかつてみたのです？』

『こんな物を作つてみたんですが……』と音無は笑ひながら、床の上にある泣きかけた天の使を指した。

かうして、七人の巡査は室内のありとあらゆる場所から、あらゆる物を調べた。或者は白い服に埃のかゝるのを気にしながら天井を覗いた。或者は床下を覗き込んだ。或者は便所の中を調べた。

最初から終まで書籍と手紙とを必死に調べてゐた検事は、靜に音無の所へ立つて来て、

『ホンの形式ですが、身體検査を致しますから……』と言つて、懷を着物の上から靜に押へて見て、それから兩の袂をそつと握つて見た。

『さア、下の坐敷だ。』と言つた検事は先に立つて段梯子を降りた。

五人の巡査もどや／＼と降りて来て、戸棚から押入から残らず調べたが何一つ押収すべきものはなかつた。

検事も巡査も、みんな拍子抜のしたやうに互ひに顔を見合つてゐる時、一人の巡査が、小さい膳戸棚の茶碗や小皿の入つてゐる抽出しに手をかけて、がちや／＼と音をたてながら引出すのを見た検事は、

『そんな所を調べる必要はないぢやないか。瀬戸物と爆裂弾とを一緒に置く馬鹿もあるまい。』

と云つてにつこり笑つた。

爆裂弾ときいた音無の心は、言ひやうのない錯誤と轉倒を感じて思はず失笑した。

『え？ あなた方は私の所へ爆裂弾を探しにゐらしたんですか。それならどうぞ十分にお調べ下さい。』

音無の言葉には嘲笑と揶揄とが交つてゐた。

田村検事は自分の失言を、ごまかすやうに、

『さア引揚げよう、押収するものは無し！』と屈託したやうにあくび交りに言つて靴を穿き初めたので、巡査たちも口々に吹きがならどや／＼と庭に降り立つた。

『一體何といふ馬鹿々々しい事だらう？』と心の中で言ひながら出て行く巡査の後姿を見てゐると、引違へに平野といふ刑事巡査が入つて来て、

『音無はん、えらう濟みませんけど、一寸署まで行つていただけませんか……すぐ濟むやろと思ひますさかい。』

人間の善ささうな平野は、顔を紅らめながら氣の毒さうに言つた。

『宜しい、参りませう。』

音無は直ぐ羽織を引掛けて、平野と一緒に警察署へ行つた。行く途中音無は、『一體何の騒ぎだい？』と訊いて見たが、平野は、

『さア、何ですやろ。我々のやうな下級な者には、さッぱり雲を攫むやうで判りまへん。』と言ふだけであつた。

警察署へ入つて見ると正服和服の巡査が二三十人ガヤ／＼と忙しさうにあちこちしてゐる。

『どうぞ、こちらへ……』と平野は音無を事務室の後にある一室へ案内した。

平野が小腰を屈めて出て行くと引違へに一人の正服巡査が入つて来て、『あゝ暑い／＼』と言ひながら音無の前に腰を掛けた。其時音無は、其の巡査が自分を監視するのだと知つた。

二人は黙つて對ひ合つたまゝ一時間程待つたが何の沙汰も無かつた。

『君、僕はマダ朝飯も食べてゐないんだから、早く調べを濟ましてくれるやうに、署長にさう言つてくれませんか。』

音無はたまりかねてさう言つたが、巡査はにや／＼笑ひながら、『今に何とか言つて來ませ

うよ。』と言つて平氣で坐つてゐた。

三時過ぎた頃、音無は窓際へ行つて、硝子越しに隣の室を覗いて見ると、そこには田原の甥に當る東家が、頻りに鉛筆を動かして退屈凌ぎに監視の巡査を寫生してゐた。

東家は音無の顔を見て、苦笑しながら「チョイとうなづいた。

音無は空腹を抱へながら窓の外を眺めたり事務室で物を書いてゐる巡査を硝子越しに覗いたりしてゐると、表からどや／＼と四五人の正服巡査が入つて來た。續いて「やア、えらかつたえらかつた。」と言ひながら入つて來たのは、昨日赤穂はゐないかと尋ねに來た樽本刑事であつた。

『どこへ行つて來たのだらう?』と思つて、少し首を左の方に伸して見ると、入口の所に色の小黒い凛々しい顔に、クリ／＼した眼を輝かしながら口を一文字に結んだ鳴野が立つてゐる。

『おや! 鳴野君も……』音無は思はず小聲で叫んだ。

『鳴野が來た?』

巡査が硝子戸の方をふりむいた時はもうそこに鳴野の姿は見えなかつた。

やつと五時頃に音無は部長に伴れられて二階へ上つて行つた。そこには四十恰好の薄い八字髯を生やした脊廣服の男が年老いた警部と並んで四角な机を前にして坐つてゐる。活動寫眞の時取調べを受けた室である。

『あなたが音無信次君ですか。』と物優しく言つた脊廣服は警部の方をふりむいて、『君、誰かひとり、字のよく書ける巡査を……』

『は、かしこまりました。』と四角ばつて答へた警部は、入口に立つてゐた巡査に對つて、

『おい、山田部長を呼んでくれたまへ。早く!』と命令した。

『はッ、』と云つて階段をかけ降りた巡査は、間もなく脊の高い一人の部長と一緒にそこへ上つて來た。

『山田君、こゝへ來て高田檢事の聽取書を書いてあげて下さい。』

言ひ置いて警部は下へ降りて行つた。

檢事は先づ音無の原籍、住所、職業を訊いた。

『基督教は新教ですか舊教ですか。』

『新教の長老派です。』

『田原君とは御交際なさいますか。』

『えエ、大變親しく交際してゐます。』

『どんな御関係で？』

『あの方の兄さんが、今私のみます教會を創めて建てたんですから……』

『鳴野君ともお親しいですか。』

『鳴野君は私が神學校にゐる頃、法科にゐた友人でございます。』

問答はこれだけであつた。四時間も五時間も待たして置いての訊問だから、どんな意外な質問が出るだらうかといふやうに、待構へて居た音無には少々呆氣なかつた。

『有難う、此の聽取書へ一寸署名だけして置いて下さい。』

検事は山田部長の書いた聽取書を音無の前に差出した。それを受取つて読みかけた音無は、苦笑しながら、

『私の職業はキリスト教の牧師なんでございます。』と云つた。聽取書の肩書には『卜師』と

書いてあつた。

『ボクシなんでせう？』

山田部長は音無の顔を眺めながら問返した。

其時検事は聽取書を覗きこんで、

『君、それは字が違つてゐるよ。ボクシのボクの字はさうぢやない。』と言つた。

『あのウラナヒ師ぢやないんですか。』

山田部長は不思議さうに檳榔樹色の羽織を着た音無の顔を見あげた。

『牧だよ牧畜の牧さ。』

検事は人さし指でテーブルの上に大きく『牧』の字を書いた。

『あ、わかりました。』と云つて部長が筆を執つて書直したのは『牧』の字であつた。

『うん、まあ、それでもよからう？』

検事は苦笑しながら其の聽取書を引寄せて音無に渡した。

音無は部長に對してすまない事をしたやうに思ひながら署名を終つて二階を降りた。そして

表へ出ようとする、「おうい音無君！」と後から大きな聲で呼止めたのは樽本刑事であつた。

「はア。」と氣の無い返事をして振返ると、樽本は不思議さうな顔をして、

「君、もう調がすんだのかい？」

「すみましたよ。たつた五分間で……」

「高田検事が歸れツて言つたかい？」

「歸れと言つたから歸つてるんです。」

音無は稍や得意氣に石段を降りた。

「そんな筈は無いが、」と言ひたさうに樽本は音無の後姿を見詰めてゐた。

夕御飯をすましてすぐ音無は田原の所へ行つて見た。

「君所もやられたツてネ、牧師が家宅捜査を受けるツて、世は澆季だよ。」と言つて田原は面白さうに笑つた。

「何が何やらさつぱり見當が付かない。全體どういふ事なんでせう？」

「僕にもわからない。僕の所もやられたんだよ。」

「さうですか、やつぱり大審院から來たツて言ひましたか。」

「うん、何とかいふ判事が、そんな事を言つてゐた。大審院はをかしいネ。」

話してゐる所へ東家が靴音高く入つて來たのを見た田原は、

「お前の所もやられたのか。」

「やられた、やられた。大變な騒ぎだつた。今朝僕が御飯を食べようとしてゐる所へ加納とか何とかいふ警部が巡査を五六人連れて來て、家宅捜査をやると云ふんだらう。何の爲だか知らないから、さア／＼どうぞツて歓迎したのサ。すると天井裏から床下から事細かに調べたが、一番閉口したのは繪ノ具と鐘詰の説明だつた。單に繪ノ具だと言つても巡査は承知しないんだ。さも恐ろしい劇薬か、爆發薬かにでも觸るやうに、ピク／＼しながら、一々これは何といふ名で、どうするものかツて聞くんだらう。仕方が無いから繪の具は一々説明しながら捻り出して色を見せてやつたが、困つたのは鐘詰だつたよ。それもみんな中を開けて見せろと言ふん

だからたまらない。雑誌を一々切られた日には、みんな腐敗するからと云つて、一々レツテルを読んで説明したり、其のレツテルに小さい牛の繪が描いてあるので、内容が牛肉だといふ事を承認してもらつたりしたのだが、ずいぶん滑稽だつたよ。これから先の警官には家宅捜査學といふものを教へて置かないと困るねエ。』

東家はさもかしさうに笑つた。音無は東家の方へ向直つて、

『あなたは最前、逡巡を寫生してゐたでせう。』

『あんまり退屈だから、三ツばかりスケッチした。』東家は靴を脱いで坐敷へ上りながら、

『面白い事があつたんだよ、面白い事が。』

『ふん、どんな事が?』田原はニコ／＼笑つてゐた。

『一昨日だつた、僕は去年の冬自分の考案で拵へたあの應接室のストーヴを寫生してゐたら、妻が来て(六月にもなつてストーヴでもあるまいから、女中に片付けさせたらどうです。)ツて言ふんだらう。そこで僕は、(日本の女は科學的でないから困る。ストーヴと云ふものは冬ばかり必要ぢや無いんだ。此町のやうに雨の多い所では、時々ストーヴを焚いて空氣を乾燥さ

せねばならん、さア何か持つて来て一燃し燃さうツて、僕はいきなり棚の上にあつた婦人雑誌を五六冊持つて来て、それを引破つてストーヴに捻ぢ込んで焼いてしまつたのサ。それは僕が平生から嫌つてゐた月並な家庭小説を征伐するために、丁度いゝ時だと思つて秦の始皇をやつたのだが……』

東家はたまらないやうに、ふき出して笑つた。

『どうしたんだい? それが……』

田原は髻を下に引張りながら東家の顔を覗き込んだ。

『所が今日の騒ぎだらう。多勢やつて来て家宅捜査をしてゐるうちに警部が、其のストーヴの蓋をとつて見て、(あゝもう、ちやーンと整理してある!)ツて言ふんだらう。』

『整理してあるはよかつたネエ。』

田原は相恰を崩して笑つた。

『それからマダこんな事があつた。』と東家は少し膝を乗出して、『僕は警察へ合意同行とかいふやつを強いられて、四時間も検束された末、検事が僕を二階へ呼上げて住所姓名を訊くんだ

らう。僕は思つたネ、全體今朝からあの人達は何をした？ 多勢の警部や巡査を僕の家へ出張させて、隅から隅まで引搔廻して調べさせて置いて、それから僕の住所姓名を訊くなんて、天下にこんな不合理があらうか。今朝からのあの騒ぎは東家伊策がどんな男やらどこに住んでゐるやら知らないで盲目滅法に僕の家を引搔廻したのだらうか。ちやあんと僕の住所も姓名も知つて、そして僕の宅を調べたのなら、今更何も僕の住所姓名を鹿爪らしく訊く必要は無いだらう？ わかり切つた事を訊くのならそれは實につまらない繁文褥禮レツドリボンだし、知らないで訊くのなら今朝からの騒ぎに對して彼らは責任を帯びなきやならないんだらう。そんな知れ切つた事を問答するよりも第一こつちで知らねばならない事は、僕を訊問する人がどの誰かと云ふ事だと僕は思つたネ、で、僕は鉛筆とノートブックを取出して、(さう仰しやるあなたの御名前は?)と訊いたのサ。』

『検事の名を訊いたのかい？』

田原は喉をかするやうにして言つた。

『しかし僕の此の條理の立つた理論は通用しないで、たうとう族籍番地から年齢まですつかり

言はされてしまつたネ。』

音無も東家もどつと聲を揃えて笑つた。

『ところがネ、僕も不思議なことを耳にしたんだ。』

音無は首を傾げながら云つた。

『どんなことを？』

田原は眼をみはつて音無の顔を見た。

『僕のところへ來た検事は、うつかり口を迂らして、そんな所へ爆裂弾を置く馬鹿もあるまい……ツて巡査を叱りましたよ。』

『ふん、そんなことを言つたかい。』

田原は何だか考へ込むやうにして踵を疊の上に落した。

音無は田原の家を出て、教會の長老をしてゐる大倉のところへ行つた。

門の所から敷石傳ひに奥まった坐敷の方へ入つて行くと、玄關の所に立つてゐた大倉は音無を眺めながら、

『来た／＼先生が来た。』と笑ひを含んだ聲で言つた。

『先生かノシ。』と妻君の竹乃が出て来て、『とても、今日はエライ事ぢやつたはノシ。』

『お宅もやられましたか?』

音無は聖人のやうな大倉の宅まで家宅捜査の手が伸びたと聞いた時、意外に驚かされた。

『やツと今片付いた所です。』と大倉は廊下の所で衣類の埃を拂ひながら、『今朝、私は先生に御相談したい事があつて御宅へ参つたのですが、入口の戸を開けようとする、と、巡査が立つてゐて、(入つちやアいけません!) ツて云ふんでせう。私はびつくりして (どうしたんですか。) ツて問うて見たが、巡査は何にも言つてくれないので、多分先生が赤痢にでも罹つたのかと思つて、大あわてにあわて、田原ドクトルさんの所へ行つて見ますと、ドクトルさんの所にも巡査が立つてゐて入れてくれないんです。どうした事だらう、先生もドクトルさんもみんな赤痢かコレラに罹つたのか知らと思つて、家へ歸つて竹乃に其の話をしてゐる所へ、どやど

やと十人ばかりの巡査が入つて来たんです。何だらう?と思つてゐる所へ、部長さんが、(御宅には音無さんから何か預つてゐるだらう?) ツて言ふんです。(いゝえ、何も預つてゐません。)と言つたが、もう其時巡査はみんな坐敷へ上りこんでゐるんでせう。(兎に角一應調べるから……) ツて、さアそれから家宅捜査が始まつたのです。所が私の所はこれで家宅捜査が二回目なんです。』

大倉は俄かに氣がついたやうに、『まアどうぞこちらへ……』と音無を一室に通した。

『ふん、私から預物ツて言ひましたか。』

『えエ、どうも警察からお調べを受けねばならないやうなものを先生から預つた覚えが無いので、多分何かの間違ひだらうと思ひましたが、私は部長さんに斯う言ひました。(どうぞ隅から隅までお調べ下さいませ、若し私の宅に、これは家庭教育上いけないといふやうなものが、唯の一つでも出て来たならどんな御處分でも受けます。)すると部長さんはニコ／＼笑ひながら押入から戸棚から實に几帳面に調べ初めたのです。』

『本當に父さんは、あんな事を言うたんぢやワノシ、以前商買上の事で、家宅搜索たら 捜査た

らいふものをやられた時、父さんは中原判事さんの前でやつぱりあんな宏言こうげんを切つたんぢやワハシ、其時判事さんが、(本當に大倉さんの御宅は感心ぢや、どこへ行ても大抵家宅捜査をしたら、博奕の道具が出て来るか、變な繪が出てくるかするもんだが、お宅にはそれが無い!)ツて、とツても感心して歸つたワハシ、それで父さんは今度も其手をやつたんぢやワハシ。」
竹乃は傍から口を出しながら、バケツの中の雑巾を絞つた。

『捜査は今までやつたのですか。』

音無は不思議さうに問うた。大倉はニコ／＼笑ひながら、

『實はついでに大掃除をやつたんです。』

『家宅捜査の最中に?』

『さうです。實はこの二階に町内の祭禮道具やら集會所の道具やら、いろんな物が山のやうに積んであるんです。だから毎年々々清潔法の時大弱りなんです。ところが今日の家宅捜査で、七八人の巡査が二階へ上つて一々がらくたを調べるんでせう。私はふと思ひ付いて、妻おれにバケツと雑巾とを持って來させて、丁度いゝ幸ひだと思つて巡査さん到手傳つてもらつて、箆

箆を寄せたり長持を片づけたりして、たうとうすつかり綺麗に清潔法が出來てしまひました。

向ふは家宅捜査、こつちは清潔法、官民合同、一舉何とか云ふんですネ。これが……』

大倉はから／＼と笑つた。音無も東家に聞いた話をして、

『ねエ、何の間違ひから、こんな事になつたんだらう?』と言つてゐる時、玄關の所で、

『先生、あつたワハシ、あつたワハシ……』と云ふ竹乃の聲が聞えた。

『何があつたのです?』

音無は玄關の所へ走り出た。大倉も續いて出て來た。

『御預り物はこれですよ。』

竹乃は新聞包みを左の手に差上げた。

『さうだ、それだ。』

音無は手を拍つて笑つた。大倉も笑つた。

前の晩音無は田原の家を出ての歸りに大倉の家を訪問したのであつた。風呂にはひつたあと

で暫く話し込んでゐて歸らうとした時、玄關まで送り出して來た竹乃が、

『先生御大事の預り物はどう致しませう?』とかなり大きな聲で言つた。

音無は一寸どぎまぎして、『何にも預けて無い筈だが、』と思つて考へてゐるうちに、十日程前に下駄を一足預けた事を想ひ出したので、

『あア、あれですか。あれは大事のものですから、どうぞ大事に預つて置いて下さい。』と言つた。下駄といふのはボール紙に藥液を塗つて籐表擬ひにした二十四錢の安物であつた。

音無はそれを買つて大倉の所へ穿いて行つたが、夕立が降つて來たので、大枚二十四錢の貴重品だなど、駄洒落を言ひながらそれを預けて置いて、別に高下駄を借りてはいて歸つたのであつた。

『それぢやア確かに預かつて置きますワ、ハシ、お大事の品ぢやさかい……』

竹乃は大きな聲でわざとムキになつてさう言つたのであつた。

音無は竹乃の差出した新聞包みを見てゐるうちに、ふと前の晩にこゝを出た時、門の所から

大きな黒い影がすうとツと權現の境内へ隠れてしまつた事を想ひ出した。

『さうです。さうです。それに違ひありません。お大事の預り物……と昨晚奥さんは大きな聲で仰しやいましたネ。』

大倉も竹乃も今日の大騒ぎの原因が、此の新聞包みの下駄だといふことを知つた。そして三人はその新聞包を眺めながら、言ひ合したやうに一度に笑つた。

『先生がどんなものを、こゝへ預けたといふんでせう。警察では……』

大倉は考へこむやうにした。

『巡査さんが物を調べる時、びく／＼もので、一々そとツと破物でも扱ふやうに押へてみたワ、ハシ。なぜでせう?』

竹乃は新聞包みを廊下に措きながら音無の顔を覗き込んだ。

其時音無の頭は、昨晚自分の後について來た黒い影のことで一杯だつた。

時計の針が十時を指したので、音無は床をのべようとしてゐる所へ、立關の戸を敲く者があつた。

『石塚君かい？』言ひながら音無はランプを片手に出て來た。

『まア開けてくれ給へ、僕は今、田邊から歸つたんだ。』

『さうか、留守中に大變な事があつたよ。』音無は掛金を外して置いて覗いてゐると、

『さうだツてネ、田邊も大騒ぎだつたよ。』と言ひながら覺也は勢よく硝子戸を引あけた。

『何事だらう？ 全體……』

音無は石塚が新しい意見でも齎もたらしたか知れないと云ふやうな眼付で問うた。

『さつぱりわからない。何でも事は中村、根本がシンガポールで企てた出版法違反に關聯してゐるらしい。どうやら日本全國で同氏等の出版物を受取つて配付した者はみんな捜査されたら

しい。どこもこゝもずゐぶんだ騒ぎだよ。』

『だツて、僕なんかは紙ぎれ一枚もらやアしないぢやないか。』

『そこが懸疑といふものサ。』

『君の下宿も調べたと云ふ話だよ。きのふ。』

『え？ 僕の留守中に？』

『うん、それに就いて面白い話があるんだ。』

『面白い話？ どんな事が……』

『君の留守中に巡査が三人行つて、机から本箱から行李からすつかり調べた結果、危険物を二品押收して行つたさうだよ。』

『押收？ 何を押收したんだらう？』

『一つは小さい赤表紙の書物だつたさうなが、一つはそりやア奇抜なものだつたといふ話だ。』

『赤表紙の書物、はゝア、やられたナ。僕は赤穂初君の『勞働者の福音』を置いてあつたんだ。

田原さんにもらつて……しかし彼れは發賣禁止になつただけだから差支へはないが今一つの奇

抜なものツて、それは何だらう？」

「さ、それが面白いんだ、君の居る室には袋戸棚があるだらう？」

「うん、ある。しかしあの中はほこりだらけで僕は開けた事が無い。」

「所がだ、巡査先生そこを引開けてみると、君はその奥の方に紙袋に入れた薬品を隠してあつたぢやないか。」

「馬鹿な事を言へ。」

「馬鹿ぢやない、現在あつたからしやうがない、細長い紙袋に入れた、黄色い粉薬だつたさうだよ。」

「粉薬？ 何だらう？」

「巡査はそれを引出して見たが、さて何だかわからないといふので、薬種屋の主人を呼んで来て鑑定させたがやつぱり解らなかつたさうな。」

「ふん、何だらう？ 黄色い粉薬？」

「覺也は頻りに首をかしげてゐた。」

「實は斯うなんだ。」と音無はをかしさをこらへて語つた。「なあに、それはネ、去年の夏西國順禮の道者が宿つた時、置忘れて行つた麥の粉なんだツて、初田^{はつた}糞粉^{ふん}だツて、多分雨にでも濡らしたのだらう、變な臭ひがするので、女中が袋戸棚の中へほうり込んで置いたのだツて。それが發酵して妙な色になつてゐたもんだから、たうとうそれを危険な薬品と認めて押收して行つたんださうな。」

「何だ、馬鹿々々しい、女中がそんな話をしてゐたかい？」

「うん、僕は其話を女中さんから聞いて本當にをかしかつたよ。其のほか、まア奇談怪説ばツかりだよ。」

音無は東家の話から大倉の下駄の話から一々それを面白可笑しく物語つた。

「家宅搜索の目的はそこにあるのサ、すべてが笑話ですめばそれほど結構な事は無いぢやないか。だから家宅搜索なんて云ふ事は時々やつてもらつても善いんだよ。不意に調べられて閉口するやうな家庭では困るぢやないか。では、僕も笑ひ話の一つを御紹介しよう。今朝こんな事があつただよ、僕の宿つてゐた宿の直ぐ隣りにネ。」と覺也は身體を揺りながら、「何でも鳴野

君とどうかした関係からだと言いたんだが、田邊で有名な藝妓が今朝寢込を討たれたんだよ。巡査が五人ばかり、村田四郎藏といふ検事に引率されて乗込んだが、まさか獨り寢に臨検でもあるまいと、藝妓先生ボンヤリしてゐると、片ツばしから鏡臺と云はず簾笥と云はず調べられたんだらう。所が簾笥の横に小さい桐の箱が……まア紫のリボンで縛られてどもあつたと思ひ給へ。それへ一人の巡査が手を掛けたんだネ。すると藝妓先生、きやアツと叫んで其の桐の箱を引つたくつてしかと抱きしめたんだ。素破こそ！と云ふので巡査が其の箱をもぎ取らうとすると、

『こればツかりは、こればツかりは、どんな事あつたツて見せられまへん……』と云つて、藝妓先生泣きながら其の箱を抱へ込んでしまつたんだよ。さういふ他人に見せられないものを發見する目的で踏込んだ警官だから、うんさうかと云ふわけには行かない。

『そんなら、検事さんだけに見てもらひまへう。』

『よし／＼、そんなら僕一人で見よう。』

『巡査はんは、みんなお次の部屋に行て、もらひまへう。これは、わたいが大事の／＼もんや

よつて……』

『さうか、そんな大事のものなら別室で見せてもらはう。』

こんなわけで、村田検事と藝妓君とは別室へ閉籠つたのさ、ところが其のコントラストが面白い、藝妓といふのは小萬と云つて頗るの美人、検事といふのはそれは謹嚴な澁面しぶめん作つた男、其の二人が對坐したまではよかつたが、さて其の箱から出てきたのは何百通といふ甘つたるい艶書ぢやないか。小萬は町の財産家の息子で糸屋といふ醫學士を愛してゐたんださうな。ところが糸屋は家庭の都合でたうとう親の選んだ女と結婚する事になつたといふ通俗小説の筋を行つたのサ。そこに甘い苦い小悲劇があつた末、糸屋が結婚前に、小萬からもらつた何百といふ艶書を小包にして、(これまでの縁と諦めてくれ、綺麗サツパリと別れよう、此の手紙は今まで大事にしてあつたのだが、焼くのも心苦しい。と云つて持つてゐては尙更悲しい。だから思ひ切つてみんな御返しする。)と云ふ意味の手紙を添えて返して來たんださうな。そこで小萬は其の何百といふ手紙をチャーインと整理して、自分の出した手紙と其の返事と、つまり往信返信を一々綴合して、まア立派な生きた小説を綴つたんだネ。そして、(わたいと糸屋さんとは、

もう此世で連添ふ事が出来んのやよつて、せめて手紙だけなりと、夫婦にしてやらう)ツて、つまり比翼状を作つたんだ。そしてそれを大事に、桐の箱に容れて、毎日毎晩暇さへあればそれを読んでポロ／＼涙をこぼしてゐたのだツて。で、小萬は先づ大體自分と糸屋醫學士との關係をオロ／＼聲で物語つた末、いよ／＼本文に取かゝつた時、検事がそれを讀まうとすると、どうして／＼手も觸れさせないで、(一ふで／＼あなたと私とがかうなつたのも、元はと云へば……)と一々自分で讀み初めたんださうな。村田検事も大いにあてられて(もういゝ、もうわかつた。)と云つていい加減に切上げようとしたが、なか／＼承知しない。(ね、検事はん。あたいがかうまで言うてやつたのに、糸屋はんはこない言うて來やはるんですもの、そりやア糸屋はんが無理だツしやる。)といふ調子で、村田検事はさん／＼油を絞られて、頭を掻きながら歸つたツて、僕の出立前に宿のかみさんが、其の小萬を呼んで來て、大騒ぎサ、小萬は泣くやら笑ふやら……』

音無も覺也も腹を抱へて笑ひ崩れた。

もう遅いからといふので、覺也は音無と枕を並べて寝た。翌朝十時頃二人が朝晝兼ねた御飯を食べてゐる所へ鳴野がひよつくり入つて來て、

『大騒ぎだツたネ。今朝の大阪朝日にもうちやアんと載つてるよ。』と云つて疊の上に一枚の新聞を投げた。

音無はあわてゝそれを拾ひ上げて三面の下の方を見ると其所には二號活字で『新宮町の大捜査』と題して一段程の通信が載つてゐる。其中程に三號活字で『不穩なる牧師』といふ標題で音無の事が十四五行書かれてある。音無は『僕も一躍して有名になつたもんだなア。』と言つて笑つた。それから三人は作り話のやうな家宅捜査にまつはるエピソードを話し合つたが、鳴野は時々何だか考へ込むやうにした。

十二時すぎに覺也は新聞社へ行き、鳴野は家宅捜査を受けた友人達を一通り見舞ふのだといつて出て行つた。

音無は着物を着更へて、田原の家を訪問して見ると、表の格子戸に『病氣デスカラ本日ハ診察シマセン。藥ダケハアゲマス。』と書いた紙が貼られてあつた。

『どつかお悪いんですか。』

不安を懐きながら音無は内玄關の所から書齋の方を覗き込むやうにした。

『音無君か。上り給へ。』

奥の方から呼んだのは田原であつた。上つて行つて見ると、田原は別に病氣らしくも無く、机に對つて英譯小説を讀んでゐた。

『御不快なですか。』

『少し頭が悪いんで。』と言つたが、『いや、なアに別に大した事は無いんだが……』

『京阪の新聞にはいろんな事を書いてゐますネ。私共にはさつぱりわかりませんが……』

音無は話の端緒をたぐり出さうとしたが、田原は一向そんな事には興味の無いやうな顔付をして、讀みかけた書物を靜かに閉ぢて、右の掌てのひらで其の表紙を撫で廻しながら、

『音無君、世の中の事は總てみんな必然だネ。』

『偶然は無いと仰しやるんですか。』

『東家たうけが自分の考案したストーヴを、應接室の裝飾にして置いたといふ事に何の無理は無い。』

それからあの若い妻君がもう夏だから片付けようと言つたのも當然の事だ。其時東家が平生から嫌つてゐた低級雜誌を、其のストーヴに投げ込んで焼いたといふ事にも不思議はない。そこへ警官が何だか知らないが捜査に來て其の灰を見た時、ちやアんと危険な書類を焼拂つて證據を煙滅したと思ふのも警官としては實に當然の事なんだ。もしさう思はなかつたなら思はぬ方が間違つてゐる。こんな時そんな馬鹿な事は無い、實際はかうくだと云つた所で、そりやア人間同士の間には通用しない辯解だ。東家も其の妻君も警官も三人は三人ながら、當然爲すべき事を爲したので、それが爲に東家が一生どんな苦痛を脊負はされようと、それはみんな當然の結果だと思はねばならない。さう云ふ僕だつてやつぱりさうだ。僕は製材會社のストライキの時確かに黒幕になつた。そして其の結果はあんな事になつてしまつたが、取りやうによつては、どうにでも解釋されるんだ。此間の家宅捜査の時に一人の巡査が僕の本箱の後から一枚の葉書を拾ひ出して來た。それは以前こゝで書生をしてゐた根本が、シンガポールに居る中村君の所へ行く事になつて、三輪崎から乗船する時、あすこの船宿からよこした葉書だつた。其の葉書には簡単に、

長々御厄介になりました。

先生の所にゐた數ヶ月は暴風雨の前の靜けさであつた。

彼地へ行つたら、うんとやります！

とだけ書いてあつた。それはあの根本が僕の所で毎日ごろ／＼と寢こけて遊んでばかりゐたが、いよ／＼決心してシンガポールの護謨林で働かうと云ふ氣になつた時の、偽らない感想ではないか。しかし今度の騒ぎに其の根本も加はつてゐるらしいが、(暴風雨の前の靜けさ)だとか、(うんとやります!)とかいふやうな言葉も、取りやうではどうにでも解釋が出来る。殊に僕は醫者で根本は藥局生だ、いろんな藥の調合も問はるれば正直に教へてもやつた。藥局に居た根本が出立の際に、其の荷物へ何を容れて行つたか知れたものでも無い。だから僕は思ふ、あの葉書一枚が或は僕の一身にどんたゝりをするかも知れない。しかし、たとへどんな災難が降つて來た所で、それは誰が悪いのでも何でも無い。それが爲に艱難が僕の身に及んで來るとすれば、僕は甘んじて其の艱難を受けねばならない。何としたところで、どう狂つたところで飲むべき盃はやつぱり飲まねばならないんだから……』

『つまり、あきらめるんですネ、そんなに……』

『うん、諦めると言つてもいい、決心するといつてもいい。自ら進んで其の運命のまゝになるのが自由だと言つてもいい。僕なんかは今まで自分の浅い智慧と短い經驗で、一つの主義主張を作つて、其の自分の立てた主義なり主張なりを振翳して、一寸でもそれに適はないものはみんな蛇蝎視して輕蔑して來たが、それは全然間違つてゐた。世の中の事は、そんな簡單なものぢやア無い。我々は眞理だの主義だのと言つて、却つて世を亂したり人を苦しめたりする事があるかも知れない。それかと言つて世間から惡黨のやうに忌嫌はれてゐる男が、どんなに善事をしてゐるかも知れないんだ。兎に角我々は、もつと深く考へなければいけない、だから僕は一旦精神上の無産階級になつてしまつて、新に人生觀を築きあげようと思ふ。それにはやはり今までのやうに、時計や聽診器で人を嚇かしてゐては駄目だと思ふ。もう僕は經濟學にも社會學にも哲學にも又た本職の醫業にも飽が來た。みんな詰らないものだと思ひ出した。のみならず近頃はかうして疊の上でうまい物を食つて安樂に生きてゐるのが恐ろしくなつて來た。』

田原はかう言つて、堪へ切れないやうな苦痛の色を面に表はして俯向いてしまつた。

『では、あなたにはもう敵といふものがありませんか。』

音無は取りつく島が無かったので、斯んな不得要領な事を言つてみた。

『敵？ そんなものは無い、一切衆生は我が子なりといふのは眞理だらう。敵を愛せよといふ教へはマダ深さが足りない。敵なんていふものを認めるうちは駄目だ。』

田原はさう言つて、ちつと音無の顔を見てゐたが、ホロリと涙を膝の上に落した。音無も過る夜の物語りを憶ひ出して俯向いてしまつた。

其晩であつた、音無は始めて吊した蚊帳の中で『ク公爵の幼年時代』を讀んでゐると、勝手口の戸をコツ／＼と敲く者があつた。

『どなたです？』と言つて高窓の所へ行つて見ると、窓の下に立つてゐるのは、たしかに田原であつた。

『田原さんちやありませんか。』

音無は恐ろしい物でもみるやうに、そつと硝子窓を引開けた。

『今朝程は失敬した。』と言つて、田原は音無の顔を見上げながら、『君、其所の運動場へでも行かうぢやないか。』

『参りませう。』

音無は寝巻のまま、勝手口から出て、二人は直ぐ裏手の小學校の運動場へ歩いて行つた。

『君、いよ／＼實行する時が来たよ。』

『先達て仰しやつた御意見を？』

『あんな騒動のあつたあとで、出て行くのは少々立後れの氣味でまづいが、それも仕方が無い、まア行く所まで行かう！』

田原は土堀に沿うて自分の影を踏みながら、しんみりした聲で言つた。

『では、嘗て御話しの御意見を、いよ／＼御實行なさいますのですか。』

『少々立後れた。もう十日も早く決行する筈であつたが、やつぱり凡人だからナ、いざとなるど、どうも決行出来ないもんだ。あんな騒動のあとで出て行くのはまづいけれども仕方ない。世間の奴は僕の家出と今度の騒動とを一つにして考へるかも知れないが、どうでも言ひたいや

うに言はせて置かう。一面から見れば確かに今度の騒ぎが僕の決心を速めたんだから、全く關係が無いとも言へないサ。』

『では、もう奥様にもお話しなさいましたのですか。』

『言やしない。しかし僕の常平生の行動を知つてゐるから、僕が突然此の日本の地を離れてしまつたところで、そりやア嘆くには嘆くだらうが、幾分か普通の女とはちがつた考へ方をするだらうと思ふ。』

『では、奥様にどこへ行くと仰しやるのですか。』

『一寸東京まで、中村や根本に面會に行くと言つて……』

『入獄してゐる中村さん達を御見舞ひに行らつしやると仰しやれば、奥様は御心配なさるでせう？』

『しかしネ。あんまり何でも無いやうな事を言つて安心させて置いてても却つて可愛さうだから。都合によれば自分も何かの引懸りで一二月未決に投り込まれるかも知れない……位な事はほのめかしてあるんだ。』

『それは奥様が可愛さうです。』

『なアに、此の世の中の親子夫婦兄弟朋友はみんな遅かれ速かれバラ／＼になつてしまふんぢやないか。千年も万年も一緒にゐられるやうに思ふのは人情だが、運命の力は無慈悲で残酷だよ。思はぬ時に思はぬ出来事があつて、泣いても叫んでもみんな個々別々に引離して底の知らない闇暗の穴に投げ込まれてしまふのサ。僕の身にはもう其の運命の鋭い爪が、ガツシリと打込まれてゐるかも知れない。僕はえらさうに今度の事を自分で決断するやうに口では言つてゐるが、これは僕の自由意志でも何でも無いんだ。恐ろしい／＼運命の爪が僕を引さらつて行くんだ。そりやア君、僕だつて此のまゝ安樂に此所にゐたいサ、しかもそれは出来ない。僕はこれつきり可愛い妻子にも、友人にも故郷にも此の日本の國にも永久に訣れるかも知れない？かうした運命を擔つた僕と夫婦になつたあれには氣の毒だが……まア仕方が無い。』

『では、いつ御出かけなさいますか？』

『明朝疾く……で、僕は未練なやうだが三輪崎まで妻を伴れて行く、そしてそれとなくあれに得心させて置かうと思ふ……』

『さうですか。』と言つたきり音無は黙つて地に映る田原の黒い影を見詰めてゐた。

『しかし君、或は三ヶ月後にひよつくり歸つて来るかも知れず、それとも二年三年後になるかも知れず……もう今晚ツきり君とも永遠に會はれないかも知れず……』

中空に鏡のやうに懸つてゐる月を振仰いだ田原の眼には涙が光つてゐた。

『こんな事を御尋ねするのは甚だ失禮ですが……』と音無は少しく躊躇して、『中村さんや根本さんが、どんな事をなさつたのか知れませんが、彼の人達が何だかたくらみなさつた策源地へ向けて御出發なさるといふ事に就いては、どうも變に思はれないでも無いので……』

『それは御尤もな御尋ねだ。しかし僕はなにも行先をシンガポールときめたわけぢやア無い。印度へ行くやらモスクワ邊へ行くやら、僅かばかり知つてゐるエスベラントを杖に世界中のエスベラントを尋ね廻るやら、行先は殆ど確定してゐないのだから……そして君、僕があの中村や根本等の事件と關係してゐるだらうなど、いふ心配は決してしないで下さい。そりやあ大丈夫だから。僕はまだ、さうまで空想家にはなり得ないんだから。しかし萬一僕と彼等との間に何等かの引懸りが出来るとしても、それは丁度君の下駄や東家のストーヴや石塚君の麥の

粉と同じだと思つてくれ給へ。』と言つて、『さう／＼石塚君と云へば、彼の男の將來を宜しく頼むよ、新聞紙も永く續かないだらうが、萬事君相談相手になつてやつてくれ給へ。僕の家の事は親類中が誰一人世話をしないでも、妻はあれ一人で切り抜けて行くだけの勇氣は與へてあるから……ぢや失敬する、明朝は疾いからもうお眼に掛らないで行く、行く先々から、時折の便りをするから……さやうなら！』

田原は手を伸して音無と堅く握手した。田原の手は冷たかつた。

田原は杉の生垣に沿うて表の方へさつさと出て行つた。音無は餘程追かけて行つて、今一言何だか言つて置かうと思つて駈け出さうとしたがどうしたものか其の勇氣が出なかつた。

『たうとう實行するのかな……』と呟きながら硝子戸を閉めて床に入つた音無は、ぢつと眼を閉ぢて居ると、彼が此の町へ来て初めて田原に會つた時から、今日までの田原の生活の轉變がフィルムのやうに目まぐるしく心に泛んで來た。

あの頃の田原は極端な階級闘争を夢想してゐた。富豪から往診を頼みに來た時は『往診料を

先拂にしなければいよいよだ！」と言つてはね付けて置いて車賃も薬價もくれる氣遣ひの無い貧乏人の所へは、何をさしおいてもすぐ駈けつけてやつたのは、それは資本家に對する一種の反撥心から來たのであつたらう。家庭にあつた大きな梅の樹をきり倒して薪にしたのも其の頃の事であつた。

(334)

「こんな立派な古木を、勿體ないぢやありませんか。」と言つた時、「僕は此頃株とか資本とかいふ言葉がいやで／＼たまらない。毎日毎朝此の梅の株を見る度に株といふ言葉を聯想するのが嫌だから打ちきつてしまつた。」と答へた言葉が今に耳に残つてゐる。

何かの話の序に聖書の中にある『汝の敵を愛せよ。』といふ文句に就いて彼はかういふ事を言つたのであつた。

『汝の敵を愛せよと言ふ事は眞理に相違ない。神は善き木にも惡しき木にもひとしく雨を降らす。其の目を善人にも惡人にも照す。しかしそれは神に於て始めて出来る事であつて、我々人間に、まだ善惡正邪といふやうな區別の存在する間は、どこまでも惡を惡として之に敵し、惡を敵としてこれを憎まねばならない。にくむ以上は其人の靈魂だけを惡んで身體を惡まないといふ理由には行かない。罪を憎んで其人を憎まずといふのは一種の空想である。我々はもう心と物とを二つに分けて考へる事は出来ない。随つて其敵を惡むに當つては、いきほひ其人の身體をもにくみ、尙進んでは其人の所有物や事業にも害を及ぼすやうな事になるのはやむを得ない事である。坊主憎けりや袈裟まで憎いといつたのは一面の眞理である。僕もこれまで多少成功主義の生活もした。悔悟の時代もあつた。無抵抗主義に心を傾けた時代もあつて、人と争ふ事が絶對の罪惡であり、敵を惡む事は極端に下劣な事であると考へたこともある。しかし今から見れば、そんな事はみんな未熟な信仰であつたと思ふ。我々が人間である限りは、どこまでも罪惡との奮闘を續けねばならない。惡人を敵として之を斃してしまはねばならないといふ事に氣がついた。かうして我々が敵を惡み戦ふ事によつてのみ、社會人類の幸福が増進するのである。』

其時自分はずゐぶん猛烈に其の議論を反駁してトルストイの無抵抗主義を主張すると、「それ、其通りに無抵抗を標榜しながら、やつぱり猛烈に抵抗して來るぢやないか。」と言つた。

其頃の田原の家には玄關番とも食客とも附かない青年が始終五六人ゴロ／＼してゐた大抵東

(335)

京大阪から流れて来たもので相當教育もあるらしかつたが、家事や薬局の手傳ひをするでも無く眞面目に勉強する容子も見えなかつた。どういふ縁故があるのか、どういふつもりで置くのか聞いても見なかつたが、何しろ醫者の書生らしくない青年が、能く頼つて来ては表坐敷の二階でのんきな顔をしてノツソリしてゐた。

二年前の春であつた。泉州の堺で開いた牧師會へ出席した時、田原から頼まれて、貞子（田原の妻）と其の妹の勝代と、それからやつと三歳に明けた丈太郎とを伴れて勝浦から紀州丸へ乗込んで和歌浦まで一緒に行つたのであつた。

四人がボーイに案内されて二等室へ入つて行くと、そこには色の黒い大きな男が胡坐をかいて坐つてゐて、

「やア、奥さん、どこへ？」と言つた。

「一寸名古屋まで……」と貞子は顔の筋肉一つも動かさずにブツキラボウに答へただけであつた。しかし男は大層親切らしく船中何くれとなく世話をした。無邪氣な丈太郎は其男に抱かれてデツキへ出て行つたり、菓子を買つて貰つたりして喜んでゐた。其男は平生田原に診察でも

して貰ふ懇意な人だらう位に思つてゐたが、和歌浦へ上陸した時、芦邊屋の二階で貞子は眉根に皺を寄せながらこんな事を言つたのであつた。

「音無さん、私今日は本當に不快でしたワ。彼の男は刑事なんですよ。迷信臭いツてお笑ひなさるか知れませんが、御承知の通り、宅は平生からあんな突飛な事ばかり言つてゐるんでせう。私は其事を思ふとあの刑事が丈太郎を抱いたりデツキへ伴れて行つたりしてくれるのを見ました時、何だか三年五年向ふの事を取越して考へて見ましたの……萬一にも宅が何かの間違ひで遠い所の監獄へでも入れられるやうな事があつて、其時私は牧師であるあなたに伴れられて……刑事に尾行せられながら船に乗つて行く……私はそんな事を想つて、シーンと身が縮るやうに思ひましたワ。」

「そんな馬鹿な事を」と云つて其時唯ハ、と笑つたのであつたが、今夜の田原の言葉から推して考へると、其頃の貞子の心根が今になつて始めてはつきりわかつて来た。貞子はもう二年前から今度の悲しい出来事を豫感してゐたのだ。

かう思つた時音無の心の底には其當時の事がはつきりとパノラマのやうに見えて来た。

勝浦へ行く途々俵の上から眺めた白菊の濱の浪は繪のやうに美しかった。船室へ降りて行く階段の眞鍮の欄干は綺麗に磨かれてあつた。前窗の一本缺けたボーイがコーヒを持って来た。三つになる丈太郎は、船がグーツと浪の中へ入つて行く時、「チャ／＼さんお母さんの事此の家はどこへ降りて行くんならウ。」と言つた。丈太郎はマダ船と家との區別を知らなかつたのである。船の揺れるのを家が降りて行くと思つたのだらう？

いつのまにか音無の眼の前には、廣々とした海が見えて来た、雨が降り風が吹き初めた。山のやうな怒濤が紀州丸を木ノ葉のやうに翻弄し初めた。

音無は物の怪にうなされたやうに蒲團の端を両手にグーツと握りしめて、兩足を屈めた。

「あの紀州丸、自分達の乗つて行つた紀州丸が沈没したんだ。食事の前に叮嚀に挨拶に出て来た事務長も、前窗の缺けたボーイもみんな死んでしまつたのだ。製材會社で働いてゐた小山も……彼の弱々しい小山が裁判所へ喚出されて行く途中で……」

音無はがばと撥ね起きて蒲團の上に坐つた。「タトヒ罪業ハ深重ナリトモカナラズ彌陀如來ハスクヒマスベシ」と書いた小形の和本が鳴野の手と一緒に壁の所へ見えたやうに思つた。

恐ろしい／＼運命の爪が僕をひきさらつて行くんだ……空想的な恐怖に脅かされてゐるのかも知れない……悪靈に取憑かれてゐるのかも知れない……とたつた今言つた田原の言葉がひし／＼音無の胸を締めつける。

音無は又た蒲團を引被つて寝てみたが、なんとなく悲しくなつて来たので、今度は心を静めて、ソツと半身を起して黙禱し初めた。五分十分たゞ、「主よ／＼」と祈つてゐたが、神経が沈靜して來たと見え、ふと一ヶ月前に晩雅樓で枯木のやうに極めて自然に永眠した松藏爺の安らかな死面がまぎ／＼眼底に浮んで來た。

長い間不幸な病人の慰安者となり看護人となつて死水を取つてからは、世に棄てられた乞食の友人となつて、よるべの無い憐れな人々を温かい愛の懷に抱いて慰めつゝ七十六年の長い生涯を終つた松藏爺の死面には眞に崇高な聖者の面影があつた。

危篤だと聞いて音無と一緒に驅け付けた田原は「嗚呼、何といふ尊い美しさだらう！」と思はず感嘆して叫んだのであつた。兩手を帯に挟んだまゝ直立して松藏爺の死面をちつとみつめてゐた時の田原の顔には言ひ知れない感激が溢れてゐた。

學問も智慧も才能も無い松藏が、善人といふ性質を唯一の資本として、南洋から印度、南北の米大陸を流れ渡つた末が、縁もゆかりも無い熊野の浦へ落着いて、餘生を病人と乞食とに捧げたといふ此の眼前の事實がドレ程田原の心を感激せしめたのであらう。

『アレだ！』

音無は思はず膝をたゝいてまた眼を閉ぢた。神々しい松藏の死面と、ちつとそれを見詰めてゐた田原の姿とがアリ／＼と眼前に浮んで来る。

『さうだ！ 田原はこれまで冷靜な哲學と火のやうな熱情との激しい戰鬥を長く續けて來たんだ。此の精神的苦闘が、彼にどんな煩悶を與へたか。またどんな光明を與へたかは知らないが、最後の決心をした機縁となつたのは確に松藏の美しい死であつたにちがひない。きつとさうだ！』

明日の朝、彼は此地を去る！ 可愛い妻子を残して去る！ 去つてどこへ行く？ 往く日も來る日も、所變れば風も變る長い／＼旅路。あの過激な革命家の意氣も、貧者の友であつた救世者の熱心も全く打忘れたやうに、普通の平凡な一善人として、朝には哲學者の門を敲き夕に

は蠻人の群を訪ひつゝ。雲を送り山を迎へた末、青草の上に眠るが如き大往生をして、裸體の土人たちにその平和な涅槃の姿を合掌禮拜されるが恐らく彼れ畢世の大本願であらう！』

とさまかうさま田原の生涯を思ひ惱んだ果に、此の空想の光景を彷彿した時、音無の耳には天の一方から不可思議な音楽さへ聞えて來るのであつた。

『御宅ですか。』と音無は白々しく玄關先から聲をかけた。

『あ、音無さん?』と診察室の襖を開けてなけば顔を見せたのは貞子であつた。

『どちらかへ行らつしやいましたか。』

音無は重ねて自己を欺きながら問うた。

『まアお上り下さいまし、私、今お伺ひしようかと思つてゐたところです。』

『さうですか……』

二人は診察室の小さいテーブルを中に對ひあつた。

『音無さん、宅は今朝東京の方へ参りました。私、三輪崎まで送つて行きましたが……』

見る／＼貞子の睫は涙に濡れた。音無はもう堪へ切れなくツて、出来る事なら其場を逃げ出したく思つた。

『東京へ行くとおつしやいましたか……』

『えエ、中村さんや根本さんに面會に行くのだと言ひましたが、不思議なんですよ。私共が彼の三輪崎の片岡屋の二階へ上つて行くと、そこには和歌山へ行くのだとか言つて樽本刑事と署長さんが行つてゐまして……宅に一寸面會したいと仰しやるんでせう。宅は平氣で樽本さんのお部屋へ入つて行きましたが四五分間何だかひそ／＼話して出て來ました。そして宅は大層打怖れていろんな事を仰しやるんでせう……哲子や丈太郎の事、それから私の身の上の事まるでもう二度と會はれない、永い／＼訣れでもするやうに……それから……これは迷信だと御笑ひなさるか知れませんが、私、本當に氣味の悪い幻まぼろしを見ましたのよ。』

貞子は色を蒼くして一寸首をすくめた。音無はぎよツとして、

『幻? どんなまぼろしです?』

『本當に奇態なんですワ、もう船が着いたといふ知らせが來たので、宅がふいと立たうとした時、羽織の下に……宅の羽織の下に……』貞子はブル／＼と身を慄はした。

『羽織の下に? どうしたんです?』

『三勝半七の芝居で見るあの舅のやうに、たしかに……たしかに宅は繩で縛られてゐました。』

それはまぼろしでせうが私の眼にはたしかにさう見えました。それから署長さんも樽本刑事も、偶然あの宿で落合つたに相違ないんでせうが、やっぱり私の心では偶然のやうには思はれなかつたんです。』

音無はテーブルの上に両腕を突いてがつくと顫へてゐた。

『それから私は歸りしな、あの二軒茶屋の所で鳴野さんに會ひました。俵が三挺、前の俵には平野刑事、後の俵には宇田部長が乗つてゐました。俵が摺れ違つた時、私は（あ、鳴野さん！）と聲を掛けたのですが、丁度降り坂でしたから、おたがひに振返つただけで……』

『え？ あの鳴野君？』音無が態と元氣よく話しかけようとした時、玄關で『號外！』と叫ぶ聲が聞えた。貞子も音無も思はず言合したやうに一緒に玄關へ出て行つた。

『まア、あの中村さんたちの……』

貞子は號外を握つたまゝ、疊の上に投げられたやうに坐つた。二人の眼の前には陰謀、中村、無政府、田原、爆弾、鳴野、放火などの眞黒い二號活字が、縦横にちらついた。

田原が故郷を離れてから、もう三月を經過した。時子と堅爾の結婚式へ列する爲に京都へ行つた太地の隠居はまだ歸つて來ない。

太地の家は須基子とナオミきりで、須基子は此頃毎日花壇いぢりをしてゐたが、或日の午後ひよっこり音無が入つて來たので、『音無先生がいらしつてよ。』と嬉しさうに言つた。

『まア能くいらしつた。』と云ひながら花壇に水を遣つてゐたナオミは、『すゐぶんお久しぶりでしたワネ。さアどうぞお上り下さい。』

『イヤ、今日はさうしちやゐられんのです。丁度御門前を通り掛つたら、須基子さんのお聲が聞えたから一寸お寄りしたので……』

『さう。ではこゝで失禮いたしますが……石塚さんは近頃どうしてゐらつしやるんでせう。ちツともお見えになりませんのよ。』

『田原君の仕事のあと片附や留守宅の世話やらで多分忙がしいんでせう。』

『本當に田原の奥さんもさぞ御心配でせうネ。私もお見舞に上らうと思つてゐるんですが、御不幸といふのではなし、何と申上げてよいか御挨拶の申上げやうに困るもんですから、ツイ御無沙汰してゐます。一體どうなすつたんです。奥さんにまで黙つて飛出しておしまひなさるなんて。』

『さア。どういふわけか、僕にも能くわかりません。』

『シンガポールへ行らしたつて、本當にさうなんでせうか。』

『さういふ話だが實際はどうだか解りません。もうたよりがありさうなものだと思ふが……』
『何しに行らしたんでせう?』

『何しにだか、それも解りません。田原君に云はせれば運命に引摺られて行つたのだらうが、始終火山の燃えてゐた田原君が俄にトロウのやうな森林生活に入られるものでもなからうし、西行や芭蕉のやうになり切れるもんでも無いだらうと思ふ。シンガポールへ行つたには何か或る目的があるんかも知れない。』

『でも、ずるぶん思ひ切つてゐますのネ。』

『尤もああいふ心持には吾々も時々ありますが、斷行する勇氣が無いんですネ。』

『そんな人騒がせをする勇氣は無い方が宜しいございますワ。』

『音無先生、』と須基子はだしぬけに横合から口を出した。『今夜は時子叔母さんが東京から歸つてらつしやるのよ。』

『さう。』と音無は笑ひながら、『嬉しいだらう、須基子さん。』

『嬉しいワ。それから叔父さんもおばさんも京都から歸つてらつしやるのよ。』

ナオミは如露じよろを白い庭石の上に、ことりと音を立てながら措いて、

『世の中ツて妙ですワネ。時子さんが今夜ツからこの主婦になつて、松本時子さんが大伴時子さんと變るんだから……人間は誰でもそんなに自分の姓を棄てる時、變な氣持がしないでせうか。悲しいでせうか。嬉しいでせうか。』

『そりや難問だ。経験のない僕には解らないネ。だが、女の人みんな一生に一度は自分の姓を棄てるのが習慣になつてゐるから、悲しいとは思はないでせう。あなたも今に古座ナオミさんで無くなつてみれば其時わかりますサ。』

「私？ 私はいつまでも古座の姓を棄てないつもりです。」

「棄てないつもりでゐても棄てる時が來ますよ。女ツてものは獨身の時は力^{ちから}んでゐますが、いざとなると案外脆く降参してしまひますからネ。」

「随分皮肉を仰しやいますネ。」

ナオミは片頬に微笑を見せながら、また如露をとりあげた。

堅爾夫婦が歸つたと聞いた四日目の朝、音無は太地の家へ喜びに行つたが、そこには新婚の夫婦を迎へたらしい花々しい気分も何にもないばかりか、家の中は空家のやうにひっそりしてゐた。

玄關に立つて何度も音なつたが取次の返事が無い。家中みんな留守といふ事もあるまいと思つて、も一度大きな聲で呼んでみると、暫らくして蒼白い不安な顔を出したナオミは、

「まア、お上り下さい。」と沈んだ調子で言つた。

「どうしたんです。變つた事でも起つたんですか？」

「まア、お上り下さい。」とナオミは機械的に繰返して彼を自分の部屋に案内した。

「どうしたんです？」と音無は一度問ひ直した。

「大變なんです。もう少し先に堅爾さん御夫婦に御隠居さんまで警察へ喚ばれたのよ。」

「警察へ？」

音無は眼を圓くした。

「そればかりぢや無いので、」とナオミは聲をひそめて、「昨日の午後町内の銀行がみんな調べられたさうです。」

「どういふわけで？」

「わけは知りませんが、何でもこゝの預金高と田原さんとの取引關係を調べたんださうです。」

「田原君との取引關係？」

音無はギクリとして次の言葉を恐る／＼待つた。

「何しろ田原さんは失踪同様なわけせう。いろ／＼な風説も立つてゐます。田原さんのお身

の上何か事件でも起つたんぢやないでせうか。』

『さう？』

音無が返辭に窮して黙つてゐると、廊下に蓮葉な足音が聞えた。時子が歸つて來たのである。
『おや、お歸んなさいまし。』

ナオミは障子を開けて縁側に出て行つた。

『私、本當にびつくりしちまつた。警察で調べられたのは生れて初めてよ。』時子はほてつた顔を押へながら入つて來たが、ふと音無のゐるのに氣が附いて、

『まあどうしませう。音無さんですネ。』時子は顔を赤くして慇懃過ぎるほど叮嚀におじぎをした。が、音無は軽く挨拶をすまして、

『警察ではどんな事を訊かれました？』

『いつ結婚したか、財産が有るか、田原さんとはどういふ関係かといふ風で訊く事は簡單でしたが、何だか氣持が悪くつて。』

『御隠居さんや大伴君は？』

『母は下の部屋で署長さんとひそ／＼話してゐましたが、堅爾さんはどこにをりましたか知れませんでした。』

『一體事件の内容はどういふ事なんでせう？』

『そんな事はちつともわかりませんワ。』

『どういふわけなんだらう？』と云つてゐるところへ、隠居のお常も歸つて來て、

『音無さん、いゝ修行をしました。此齡になつて警察のお調を受けるなんて望んだつて出來ない事です、』と皮肉な苦笑をした。

『とんでもない事ですネ。どういふ事件か知らないが……』

『本當に音無さん、親子三人一度に警察のお調べを受けるなんて、本當に外聞の悪い話です。一體まア、どういふわけなんでせう？』

『さア……』

音無は腕を拱いてちつと考へ込んだ。

やがて堅爾も歸つて來たので、音無は挨拶がすむとすぐ問うた。

『警察でどんな訊問を受けました?』

『歸つて來る早々訊問といふ騒ぎで大いに面喰ひましたよ。』と云つて、堅爾は汗を拭きふき『何の事だか、一向要領を得ないが、二三年前にアラスカへ遊びに行つた時、その労働組合の會長をしてゐる人の宅で中村と云ふ男に出會つた事がある。旅行先きの日本人同士だから其後二三回手紙をもらつた事もあるが、其の男と僕との關係を頻りに詳しく訊くんだネ。』

『中村? シンガポールにゐた中村春吉君ぢやないかネ。』

『さうかも知れないが、君は其男を知つてゐるかい?』

『知つてゐます。去年田原さんの所へ來て暫く逗留してゐました。』

『中村君と田原君とは、いつ頃から知り合つたのか知ら?』

『中村君はシンガポールで週刊の労働新聞を發行してゐて、毎號田原君の所へそれを送つて來てゐました。』

『それ、それ、それだ!』と堅爾は膝をたゝいて、『では、その二人を中心とする事件だ。僕

がアラスカで其男に會つたといふ事が其筋に知れたので、田原君と中村君と僕とこの三人の間に何かの聯絡が有りはしないかといふ嫌疑だらう。兄貴が死んでから田原君に財政整理をしてもらつた時イクラ禮をしたかといふことを、頻りにきいてゐました。禮なんぞは一文も出さないといつても、そんな筈は無いと飽くまで追究するんです。』

音無は黙つて、うなづきながら堅爾の話をきいてゐるうちに、今警察が太地家を取調べたといふについては、新しく何事か湧上つて來たのではないかと思はれて、急に田原の留守宅が氣に懸り出したので、

『それぢやア今日は失敬する、』と俄に思ひ付いたやうに座を起つた。

音無は太地の家を出て、途々いろんな事を考へながら、どこをどう行くといふ方角もなく屈託顔にブラ／＼する中に何時の間にか田原の家の前まで來た。

『私は覺悟してゐます。どうせあの人の事ですもの、札所廻りの順禮のやうな心持で影を隠したので無い事はわかつてゐますが、唯皆さんに御迷惑が掛らなければよいがと、そればかり心配してゐます。』

貞子にはうろたへた氣色もなかつた。

『そりやア大丈夫ですよ。田原君の事ですもの。人に迷惑を掛けるやうな事をして置くもんですか、』音無はわざと元氣らしく言つた。

『私も他人様に御迷惑を掛ける事はしてゐなからうと信じてゐますが、』と言ひつゝも貞子は心配さうに、『太地さんの皆さんが警察で調べられたのはどういふわけなんでせう！』

『何でも田原君が家を出る時何千圓かの金を持つてゐたらしいので、其金の出しては誰だらうといふ疑問が警察側にあると見えますナ。そこで太地の家は先代以來田原君と親族同様の關係になつてゐるし、それに今度のシンガポール事件の中心人物である中村君と堅爾君とが先年アラスカで出會つた事があるので、警察では堅爾君と田原君と中村君とこの三人の間に或る默契が成立つてゐるやうに思ひ、それやこれやから太地家をシンガポールでやつた祕密出版事件の

資本金供給者と睨んだらしいんです。』

『まア』と貞子は眼を見張つた。

『ところが何でも無いですよ。太地家の人たちだつて田原君を信用してゐますから。』

『でもたくのために、お年寄までが警察へ呼出されて、ほんとうにすみませんワネ。』

『それよりか奥さん。あなたは御自分の覺悟をちやんとおきめなさらないやいけません。』

『私はもう覺悟してゐます。私は三輪崎で別れました時、何にも云はないでもたくの心持が能くのみこめました。それから私は私も覺悟がきまつてゐるのです。あの三輪崎の濱が最後の別れでもう一生良人^{をうと}には會ふ事が出来ない……』

貞子はけなげに言ひ放ちながらも俄に言葉をとぎらしてしまつた。

『さう伺へば安心です。今度の事件はほんの一時の嫌疑ですぐ無事に落着くとは信じてゐますが、人間はいつどんな運命に虐げられるか解りませんから、假に面白からぬ事が田原君の一身に起つたとしても、あなたは少しも驚く事はありませんよ。どんな運命が墜ちかゝつて來ても泰然としてゐらっしゃい。びつくりしちやアいけませんよ。』

『大丈夫なつもりでございます。』と貞子はそつと涙を拭きつゝ淋しき微笑をみせて、『どうぞ無事で済むやうに祈つてはをりますけれど、疊の上で死ぬのも、どんな所で死ぬのもみんな運命で仕方のない事だと私はとうから諦めてゐます。第一、たくの身になりましたなら、自分の思ふ通りの事をして、そして其の爲に知らぬ他國へ行つて死んだつて、それは本望でございます。』

音無は貞子の言葉を聞きながら何度もうなづいた。何にも知らない哲子と丈太郎の無邪氣にきやつきやと騒ぐ聲が庭前から聞えて來た。

覺也は約婚以來一度も太地の門を潜らなかつた。わざ／＼まはり路をして門内の須基子を垣間見たり、時折は門前のあつけない立咄しを樂む事はあつても決して鬨を跨げなかつた。どんなによんどころない場合であつても、入籍披露を済ますまでは決して出入しないと盟つた自身の心に對しても太地の門を潜るのは何となく氣がひけた。のみならず今は太地の家の空氣が變つてゐる。堅爾とは同窓生であつたが、十年も會はなかつた上に歸朝後まだ親しく話す機會もなかつた、其上に自分を手球に取つた時子が現に堅爾の妻として一家の采配をふつてゐるのだと思へば、何となく底の知れない急流を瀬踏みするやうな不安があつた。けれども思ひ切つて案内を乞ふと、やがてやさしい足音が廊下に聞えた。

『おや、お珍らしい。さアどうぞ。』

ナオミはいつもの馴れ／＼しい調子で覺也を自分の室に案内しておいて、靜にそこを出て行つたまゝ三分、五分、十分たつても戻つて來なかつた。

誰よりも先きに須基子が顔を出すだらうと思つた事も空頼みとなつて、覺也はいらくしてゐると、程經てナオミは戻つて來た。

『お待たせしました、ツイ手離せない用事がありましたので、』

ナオミの顔には沈鬱が漲つてゐた。

『どう致しまして。御用の處をお邪魔致しました。』

『いゝえ、別に……』

『實は御報告かたく御相談に上つたのですが。』と覺也はつとめて冷靜を粧ひながら、『僕の新聞が財政上の都合でもう發行が出来なくなつたんです。』

『では廢刊でございますか。』

『さうする外に方法がないので、其善後策を御相談に上つたのです。それで一寸堅爾君にお目に掛りたいんですが、』

『堅爾さんにですか。』とナオミは當惑さうに眉をひそめて、『堅爾さんは先刻から頭痛がするつておやすみになつてゐますので……』

『さうですか。では御隠居さんにお目にかゝれませんでせうか。』

『唯今生憎お客様で、今日はお目に掛られないさうでございます。』

ナオミは言ひにくさうに語尾を濁らした。

『さうですか。では時子さんにでも？』

覺也の顔には興奮の色が溢れて來た。

『時子さんもお客様のお相手をしてらっしゃるので、今日は失禮すると仰しやいました。』

『須基子さんは？』

覺也の聲は悲しさうに顫へてゐた。

『ゐらっしゃいますけれども唯今お稽古中……』

『では須基子さんにもお目にかゝることは出来ないんですか。』

覺也は蹂躪された權利を奪還しようとするやうに、怒氣を含んで言つた。

ナオミは俯目になつて暫くちつと考へ込んでゐたが、やがて氣の毒さうに、同情の籠つた聲で、

『石塚さん、私あなたのお心持をお察し致します。あなたは今さら、こんなつめたい待遇を受けようなどゝは夢にも思つてゐらツしやらかなかつたでせうが、これにはいろ／＼事情のある事で、いづれ今晚にも音無さんに委しくお話ししますから、今日はどうぞ此のまゝ黙つてお歸り下さいまし。』

『音無君に話さないだつて、事情があるなら僕自身直接に承はりませう。』
覺也は涙ぐんだ眼をしばたゝいた。

『お腹の立つのはごもつともですが、こゝであなたがそんなに大きな聲をなすつては却つて面白くありませんから、今日は何にも仰しやらないでどうぞ此のまゝお歸り下さいまし。』

ナオミは聲をひそめながら、なだめるやうに言つた。

『黙つて歸れつてなら黙つて歸りませう。だが古座さん、あなたも御承知だらうが、僕とこゝとの関係は戸籍上の手続きこそすまないでも玄關拂ひされる間柄ではありませんよ。今日は仰に從つて黙つて歸りませうが……』

ナオミは氣の毒さうな顔をして何度も黙つてうなづいた。

其晩ナオミは音無を訪問した。

『さういふわけで、私、石塚さんに本當にお氣の毒でたまらなかつたんです。』

『ちや何ですか。太地家では石塚君の約束を破談にしようといふんですネ。』

音無は詰問するやうに言つた。

『結局はさうなんです。』

『そんな亂暴な事があるもんですか。たとへば田原君がどんな事を仕出かさうと石塚君には何の関係も無い事です。第一田原君の事件からして根據も何も無い事ぢやないですか。大方今頃はもう放免になつてゐるかも知れない。』

『それがさう手輕い事件で無いらしいと云ふんです。』とナオミはあたりを憚るやうな低い聲で、『石塚さんがいらした時は丁度大野辯護士をお招きして御相談最中だったので、大野さんは警察側の意見もお聞込みになつてさうで、事件の發展次第では太地家にも意外の飛ば

つちりが振り掛るかも知れないといふので、御隠居さん初め堅爾さん御夫婦も青くなつておしまひになつたのです。』

『どういふわけ？』

『法律上のお話は私には能くわかりませんが、……』

『ふうん。』と音無は腕こまぬきつゝ太い息をして、『困つたナア。そんな事とは知らなかつた。』

『御隠居さんはじめ、田原さんには今まで色々お世話になつて親戚同様の関係ではあるが、家には代へられないからお氣の毒でも此際思ひ切つて一切の関係を解いてしまひたいといふ皆さんの御相談がきまつたのです。』

『今さら急にそんな馬鹿な事をしたつて、過去の関係が消えるもんぢやない。なまなか小細工をすればする程却つてます〜嫌疑を増す道理ぢやないですか。』

『私もさう思ひますが、大野さんの御意見で、御隠居さんが何でもさうしなければ太地の家が危ないと氣を揉んでらつしやるんです。』

『堅爾君はそんな事を黙つてゐるんですか？』

『あの方はおつ母さんの前では口が利きませんからネ。それに時子さんがやはり一緒になつて……』

ナオミは曖昧に言葉を濁らしたが、やがてなんとなしに皮肉な微笑を口邊に寄せて、

『もううちぢやア時子さん天下ですよ。それから音無さん、今日太地家の財産は須基子さんの分も堅爾さんの分も全部時子さんの名前に切換へられる事になつたんですよ。』

『全部時子さんの名前に？』

と音無はます〜呆れた顔をした。

『えエ、さうした方が此場合安全だといふ時子さんの考へに、お二人とも御同意なすつたんです。無論斯ういふ變則な處置をお取りになつたのは大野さんの法律上の御意見が基礎になつてゐるんですが、私は此の場合田原さんの御宅の爲に何とかしてあげたいと思ふのですが、肝腎のかういふ時の頼みにならうといふ時子さんまでがもつとも力になつて下さらないで口先ではお氣の毒だお氣の毒だと仰しやるが、心の中では御自分達の利益ばかり考へてゐらつしやるんで』

すもの……』

『尤も人間でもものはミンナそんなものです。いざとなると頼みになるやつは一人もない。』
と音無はほつとためいきをついた。

『私、本當に石塚さんにお氣の毒でたまらないのです。』
とナオミはしみじみ氣の毒さうに顔を曇らしてゐた。

『ねエ、あの男、失望して自棄にならなきやあいが。』
音無は心配さうに腕をくんで考へ込んだ。

『大野さんのお話では石塚さんも事によると起訴されるかも知れないといふのです。』
ナオミは其のことを信じられないといふやうに、疑惑を含んだ瞳で音無を見上げた。

『そりやア警察の遺口一つで何ともわかりませんネエ。』

『ですから御隠居さんは益々青くなつておしまひなすつたんです。可愛い孫を罪人にめあはしては先祖にすまないとい仰しやるんです。』

『しかし、石塚君はまだ起訴されるかどうかかわからず、起訴されるにしても必ず有罪とはきまらんぢやないですか。』

『何にしろ御隠居さんはもう、石塚さんを田原の連累者ときめてらツしやるんですから。』

『困つてしまふなア。僕は今度の事件をどうしてもそれほどの重大事件とは思はれないんです。ことに石塚君が新聞の社説に書いた論文などは何でもない事です。石塚君だつて、あの論文のために起訴されやうなどは夢にも思つてゐないだらうし、田原君の事件だつて何でもないやうに考へてゐるんだから、これが爲めに一生の運命を破壊するやうな不幸が落ちて來ようとは考へようとしたつて考へられないだらう。おはなしに由ると、玄關拂ひ同様な目に會つてひどく憤激したらしいが、それは一時のむかつぱらで、これが婚約破壊の無言の宣告だとは決して感づかなかつたでせう。それほど純な正直な青年ですから、いよ／＼破約と聞いたならそれこそ一生を葬むつてしまふやうな事になるかも知れません。』

『本當にお氣の毒で……』

ナオミは下を向いてほろりとした。

一須基子さんはまだこどもだから、それほどでもあるまいが、石塚君は自分の靈魂よりも須基子さんを大切に思つてゐるのだから、須基子さんを失つたなら石塚君の靈魂も一緒に亡びてしまふぢやありませんか。かういふ貴い愛を些細な嫌疑ぐらゐで破壊して、將來のある青年を精神的に殺すなんて實に残酷極まる。ナオミさん、あなたはそんな残酷な相談をするのを黙つて聞いてゐたんですか？」

「さう仰しやられると私も申譯は有りませんが、家庭教師といひ條やつぱり使用人ですワ。御隠居さんを動かす力もなし、時子さんに反對出来る位置でもありませんワ。私が頑張つてみたところで何の役に立ちませう。あれ程深い關係であつた田原さんの御家族にさへ思ひ切つた事をなさる場合ですワ。私は無論いくぢの無い人間ですが私の立場も察して下さい。」とナオミは更に言葉を柔げて、「尤も其中には事件も落着きませうし、石塚さんの嫌疑もきつと晴れませうから石塚さんにも決して失望なさらぬやうにあなたから能く慰めて下さい……」と云ひつゝナオミは一封の包みを懐中から出して、

「私、實は明日にも須基子さんと一緒に暫く遠方へ行くかも知れません。尤も前から上京する

豫定になつてゐましたが、今度の騒ぎで急に繰上げましたので、明日か明後日はまだはつきりしませんが、多分もうこれぎりお目に掛れまいと思ひます。それで實はお暇乞を兼ねて上つたのですが、此のお金は誠に少しばかりで、差上ると云つては失禮でございますが、石塚さんの今後のお入用なり何なりにおつかひなすつて下さいまし。」

「之は金ですか、」と音無は手にも觸れずにながり切つて、「太地家からくれたんですか？」

「いゝエ、私の。ほんの志でございますの。石塚さんも之からは定めしお入用が多からうと存じますから、どうぞ私にも同情の御用をさせていただきます。」

「あなたの御厚意なら石塚君も感謝して受けませう。しかし、太地家からの手切金なら石塚君は請取りますまいよ。」

「好い加減に仰しやい、」とナオミは片頬に笑みを浮べて、「私が手切金の取次をする女か女でないか少しは私の人格を見て下さいまし。あなたにも似合ない事を仰しやる。」

「では、とにかく御厚意を傳へませう、」と音無は包みを片寄せた時、がらりと表戸を引開けて入つて來たのは覺也であつた。手には電報の送達紙を握つてゐる。

『石塚君、どうしたんだ？』

音無はたゞならぬ覺也の容子に驚かされながら問うた。覺也は送達紙を二人の前に投げ出しながら、ヤツとの事で喉笛の張り裂けるやうな聲で、

『田原先生が死んだ！』と叫んだ。

『えッ！』

音無もナオミも塑像のやうに固くなつてしまつた。

『田原先生も、中村君もみんな死んでしまつた！』

覺也は狂つた人のやうに、身をもだえながらも一度叫んで疊の上に突つぶしてしまつた。

もう隣りの時計は二時を打つた。音無は蚊帳の中で蒲團をひつかぶつてみても眼を閉ぢてみても、どうしても眠られないので、う！ん！とうなりながら兩足を揃へて蒲團を蹴ると一方の釣手がぶつりと切れて、ザラ／＼した麻布が顔の上にあふわりと落ちかゝつて來た。

寢床から這ひ出して、窓を引開けて見ると外はまつ闇である。裏の簾では風に脅かされた竹がざあ／＼と淋しく鳴つてゐる。

ランプに火をつけて机の前に坐つたが、何だかむし／＼と腹立たしくなつて、起つても坐つても居られないので、そばにあつた説教の原稿を手に取り上げて、眞ツ二つに引破つて机の上に打きつけたが、其の瞬間に吾れと吾が行爲に興奮を覺えて、其の原稿をびり／＼と細かく引裂いても、みくちやにした。そしてグツタリと疲れ果てたやうに兩の脇を頬杖に突いて、涙ぐんだ眼でランプの笠を見詰めてゐると、ブーンと微かな唸りを立て、飛んで來た粟粒程の圓い黒い蟲がパチリ！と小さい音を立て、笠の上に宿つたが、どうしたはずみに足を踏らしたものが

倒まになつて頻りにもがいてゐる。音無の眼には此の小さい蟲の苦悶も決して他事では無いやうに思はれる。

蟲はやつとの事で起直つたが、やがて六つの足を兩方へ出来るだけ廣く踏張つて身動きも出来ないでゐる。此蟲は今、何を考へてゐるのだらうと思つてゐると、今度は眞黒い徳利の形した米粒よりも稍小さい蟲が飛んで來た。能く見ると右の足は三本あるが、左の足は一本しか無い。こんな蟲でも生の爲には恐ろしい戰場を経て來たらしい。

鎌のやうな小さい蟲が飛んで來たと思ふと、一分あまりの長い四本の足を兩方に踏出して靜かに何物かを視察するやうに歩き出した。何だか其の蟲の態度が小づら憎いので、ぶツと息を吹掛けると二三寸向ふの方に吹飛ばされたまゝそこへたりとしやがんでしまつた。と同時に分銅の形した黒い二分ばかりの蟲が傲然と笠の上に飛んで來て、六本の足を動かし乍ら歩き出したので、指の先でそれを弾くと、蟲はくるりと仰向になつて死んだまねをしてゐる。

『彼奴のしくさる事を見い！』と呟いてゐると、今度は灰色した羽のある一分五厘位の蟲が飛んで來て身の丈の十四五倍もあらうと思はれる長い／＼觸角を鎗のやうに前方に投出したまゝ、

笠の縁に宿つて、びりツとも動かないでぢつと四邊の様子を探つてゐる様は、戰場を駈け抜けて來た英雄のやうでもあり、天下の動靜を沈思してゐる大哲學者のやうでもある。蟲はやがて少しく觸角を動かした。彼はその觸角の尖で不可解な未知の世界を探り求めてゐるのかも知れない。

神主のやうな服装した薄青い羽の二分ばかりの蟲が飛んで來て、ピョイ／＼と横這に斜に跳びながら滑稽じみた踊りを踊つてゐると、今度は同じ種類の蟲で後半身の黒いのが來て、二つは寄つたり離れたりしつゝ笠の上で頻りにパチツ！　パチツ！　と小さい音を立てながら踊る。ランプの心が、ジイ／＼ジイと息をする度に此の小さい蟲の世界に、何等かの異變でも起つたかのやうに、みんな右に左に動きはじめた。

『まア美しい！』呟きながら、眼を近づけたのは全身が金茶色で、羽に白と薄茶の斑文のある一分ばかりの可愛い小さい蟲である。體の割合に足が長い、三分もあらうかと思はれる長い六本の足を伸したり縮めたりしながら輕快に歩き廻るさまは、繪で見た女優カルヴェがカルメンに扮して、戀人ホセに薔薇の花を投げる時のやうな態度である。

すると次には翡翠の衣を着た稍大きい三分ばかりの蟲が来て、金茶色を輕蔑したやうにノソノソと歩き廻つてゐると、どこからともなく白絹を纏うた少女のやうな足の長いきやしやな細長い蟲が二つ連立つて来て、頗る輕快に跳ね廻る。

『何と云ふダンスだらう？』とちつと見詰めてゐると、俄かにバタ／＼と大きな響き――比較的――がしたと思ふと、濃茶色の一寸ばかりの蟲が飛んで来て、笠の上を縦横に這ひ廻つたので、今までの小蟲共はみんなちり／＼ばら／＼にどこかへ逃げてしまつたが、長い二寸程の觸角をもつた英雄の哲學者は、うるさい奴だと云はぬばかりに、縁の方へ一二分躡つたゞけで、やつぱり天下の形勢を眺めてゐる。音無は其の大きな羽のある蟲を右の指で一寸摘んで見ると、それは小供の時鮫魚あひのうをを釣る爲に能く捕つた川螻蛄かはげであつた。

暫くして又た以前の蟲が十も二十も三十も飛んで来てランプの笠一面に歩き廻つた。パサパサパサパサと微かな音を立てる者、パチン！パチン！と小さい響を立てるもの、眼の前は俄かに面白いめまぐるしい舞踏場となつてしまつた。

夢中になつて其の一つ／＼の舞を觀、踊りを眺めてゐるうちに、舞踏場の片隅の方に憐れな

一つの屍體を發見した。それは茶色の舞衣を着た小さい蟲で、長さ四分もあらうと思ふ長い二本の足と二分足らずの短い四本の足と、三分ばかりの觸角とを前の方に投げ出したまゝ、ペツたりと横になつて死んでゐる。此の小さい蟲はいつこゝに來て、そしてどんな事件のために、どうして死んだかといふ事は傍で見張つてゐた者にもわからない。しかしそこに一つの屍體があるといふ事は事實である。

音無は其の小さい屍體を見詰めてゐるうちに何だか知らないが、悲しいやうな、恐ろしいやうな氣持に襲はれたのであわてゝぶツと洋燈を吹消して、蚊帳の中に藻ぐり込んだ。蚊帳は釣手の切れたまゝであつたが、其儘にして置いた。

音無は翌朝眼を覺して顔に捲きつく蚊帳を撥ねのけて見ると、開けツ放したまゝの窓の外には、かん／＼と日光が照り榮えて、竹の葉が涼しさうに風に颯らされてゐた。

『何時だらう?』と言ひ乍ら机の側までにじり寄つて時計を見ると、もう九時前であつた。

『九時! それは汽船の出る時間だ!』

音無は兩腕をこまぬいて窓の外を眺めた時、山を隔てた一里半向ふの港で汽笛がぼろーと鳴るやうに思はれた。須基子とナオミが人目を忍ぶやうにして汽船に乗込む様が眼底に泛んで来る。

兩の頬が冷たく感じたので、はつと氣付いて、あわてゝ涙を拭つた彼は兩の手を机の縁に突張つて膝を疊に突きながら、ふとランプの笠を見ると、ゆふべの大舞踏場には何十と無く小さい屍が横はつてゐる。滑稽な身振をした神主も、金茶色のカルメンも、翡翠の美人も、きやしやなダンサアも、髯の長い哲學者も、みんな死んで居た。殊に悲惨なのは油壺の外へ滲み出た石油に浸つて、むごたらしい死さまをしてゐた小さい十二の蟲であつた。

『彼等はなぜ、こんな所へ來て死んだのだらう?』

音無は大きな謎にぶつかつたやうな氣持でちつと澤山な蟲の屍體を見詰めてゐたが、

『さうだ、彼等は光を慕つて死んだのだ! 光を見て死んだのだ!』

斯う叫んだ音無は狂人のやうになつて、机の上を力任せにたゝいた。